

て居るものもある位である。けれども上述の吉の字について音と訓とに此の側の區別を立てることは唯其の字形に依つて強ひて區別を立てたまでである。そのヨシと訓ぜさせると云ふ **吉** の形の方も既に遠く周代に見えて居る。然るをまた説文學者の間には之れを口の上に士を書くべき文字であるとして居る。何れにしても同じ音である。即ち **吉** の字其のものは音キツ又はキチで、訓ではヨシと讀むのである。決して劃然たる區別が此の間にあつたわけではなからうと思ふ。以上は總べて俗間の見解が誤つて却つて別に傳説的のものとなつたものを擧げたのである。最後には世の俗説が却つて正しくして必しも誤りでない場合の例を擧げて置かう。

## 八 蚊 の 字

蚊の字は此の蟲がブンと鳴く故に虫偏に文の字が書かれて居るのであると誰も云うて居る。其の果して聲(實際は翅の振動の音であつて聲ではない)がブンと古人に聞えたものか又はモンと聞えたものか、其の點は詳かでない。けれども兎も角その蟲の音色を寫聲せんが爲め虫偏に文の字と云ふ特別の構成を取つたものなることは疑れない。蛙が圭(ガイガイ)と鳴き、蜩が周(チウチウ)と鳴くに依つて、それぞれ其の音に近き圭及び周が用ひられて居ると同じやうに、此の蚊の字も其の理由に依つて出来て居るのである。外の動物で云へば鳩はクウクウとなく故に九と鳥で出来、鴨はカブカブと鳴くや

うに聞える故に甲と鳥とで構成せられて居るのであるのと同じわけである。雞(鶏)の如きもその聲が奚(ケイケイ)ときこえる故に其の音を單綴音化しちりめて奚の一字と隹(鳥)とで雞の字を作る。總べて此の種の構成の文字は之を寫聲文字と名附ける。こは丁度印度歐羅巴語でホトトギスがククウとか又はククルスとか呼ばれ、鶏がコックとかコッカトオなどと呼ばれて居る所謂オノマトピアの語にあたるもので古今東西を論ぜず、いづこにも同じく存在せる現象である。

文字上に現はれた俗間の傳説は大略かやうな有様である。若し嚴密なる文字系統の上より云へば、素より、採るに足らぬ謬見なるべきも併し又之を其の當時當時の思潮見解が如何にありしかと云ふ點を平民的の側から觀るときは頗る面白い觀察が出来るのである。況して上古の支那人が製字の當時に在つても人間以上の知識を以て之を作つたわけではなく、矢張り今日の俗間卑説と相去ること餘り遠くない位の思想で、否今一層單純な考で自ら拵へ出したものであるにちがひない。故に此の側の世俗の觀方は大いに専門の研究に裨益するところがあることと信ずる。



## 第八章 支那文字の發達史上から觀 たる漢字問題

漢字問題は改めて論ずるには餘りに古い題目であつて、まかも事實は常に新らしい解決を俟つて居る姿である。或は教育者の側からも、或は學者たちの側からも、時としては又實業家とか事務家とか云ふ方面などからも、いろ／＼の意見議論が出て居てそれ／＼皆理屈のある理由を有して居るやうである。けれども元來問題の性質が一般社會の向ふ大勢の上からでなくては自然ときまつて來ないと云ふわけのものであるが爲め、如何に一部の社會否單に少數の個人などの力ぐらゐで人爲的に決しようなどとしても、殆んど出來がたいことで又さも容易にきめられる可き性質のものでもない。

まかるにかの國字問題が一旦世論となつて以來は、漢字が厄介視せられ、早く片づけられなければならぬと一方から唱へられると、他方には躍起となつて辯駁をする。早く片づけようとするものは漢字を餘りに軽く視る傾きがあり、辯駁をしようとするものは言語と文字を混同して、飽くまで漢字を動かすまいとする。漢字の根柢を守るのは無論現社會の爲め學問の爲めさうしなければならぬが、文字は即ち言語であると根本に誤解してしまつて、相手の説に耳をかすことの出來ないなどは、漢字説

の爲めに頗る惜む可き點である。殊に日本の言葉がローマ字で綴られたから、と云つて直に之を以つて日本語が洋語化せられたなどと考へるのは、嘉永以前の思想であるかも知れないが、今日では餘りに幼稚である。茲には文字に對する感情のことを云ふのではない。文字は飽くまで言語そのものと違ふと云ふことを先づ明かにして置きたいのである。今では英語にも這入つて居る着物と云ふ言葉はこれ *Kimono* と綴られても、尙皇道の國語たることは失はない。キモノとか着物とか云ふやうに東洋の文字で綴られた時ばかりが日本語であると考へるのは明かな謬見である。又若しローマ字論者の中に於いても、日本語を以てアーリアン語である(平井金三氏の説の如く)とか、日本語を以て洋語に牽き附けることが出来るからとか云ふ了見から、東洋固有の文字を換へてしまふとするものがあるならば、これ亦明かな謬見であつて、實に皇道に反したものと云はざるを得ない。

それ故漢字に就いて議論し、漢字を主張する場合にも、常に文字と言語の間に根本的ちがひのあることを先づ明かにして置かないと、例の水掛け論に了るのである。まかし漢字は國字問題の例から觀る場合と、所謂漢字問題からの場合とでいくらか觀方がちがはなければならぬ。即ち漢字なるものは、必しも常に國字問題からのみ論ぜられなければならぬと云ふわけは無論ないのである。國字問題と云へば直言すればつまり理想派の議論で非常に先きの遠いことを議するので、今日の漢字をそんなに理想の方からばかり觀て議論すると缺點の出て來ることは云ふまでもない。無論それを觀るのも不必要



とはしないが、漢字問題の立脚地から云へばそれは寧ろ、枝葉の末論である。焦眉の急務たる緊急の問題は眼前に迫つて吾人の解決を俟ちつゝあるではないか。それは他のことでない。即ち今日現存して居る漢字は之を如何にかたづけける可きものであるか、と云ふやうな類の漢字存在の上の問題である。如何にローマ字の理想を鼓吹するものにしても、内々此の側の研究が出来て居なければ、鼓吹のきゝぬが滅するわけであらうと思はれるし、又これだけの仕事を當然の責任と引受けて、ローマ字を主張すると云ふ氣運にも未だ到達して居ないやうである。又漢字主張の側に於いても、漢字の廢す可からざる理由の件々は屢明白に繰り返されたが、單にそれきりで、然らば現在のものは如何にして取りかたづく可きかと云ふ實際の側のことは未だ時機が至つて居ないやうに思はれる。それ故理想に就いての議論も漢字不可廢論の方も先づこの卑近なる實際問題に手を附けなければ時事問題として説の十分なるものではなからうと思はれる。

さらばと云つてそれが餘りに頑固な漢字本位説と云ふやうな風になつてしまつても、現代一般社會の大勢に合はなくなることは火を見るよりも明かな事實である。それ故つまり其の要は時勢の傾向に叶うた漢字問題を論究して行くと云ふのが、即ち今日の漢字問題の本領たるに近いものかと思はれる。今日の漢字問題が係はるところは現在に關する問題と將來に關する問題との二大重要事件を有して居る。即ち、現在の問題と云へば『現今の社會に於いて漢字は如何なる状態にあるか、又これがかた

づけかたは如何にす可きものであるか』と云ふにあるので、次ぎに將來の問題に關する方面に於いては、多少推論的にはなるが、『今後の社會に於いて漢字は如何なる状態にうつり、如何なる傾向を以つて發達して行くものであるか。又之に對する方法は豫め如何に講じて置く可きものであるか』と云ふ困難な問題が横たはつて居るのである。まかし漢字將來の生命は一つに懸つて此の點にあるのであるから、苟も漢字の將來を慮るものは此の點に就いて攷究して置くところがなくてはならぬ。

まかるとは現時問題として文字の趨勢を論じ、之に對する相當の方法を講じようなどとするには、單に現在の觀察のみを以つて立論することは十分でないので、尙順序としては豫めその今日に成るに至つた迄の沿革が、いかなる歴史を経て發達して來たものであるかと云ふことの大體を觀察して置く必要がある。實際社會に重大な關係をもつて居るこの漢字問題が單に机の上丈の議論でははらしてしまつてよいものならば兎も角も、苟も多少の根據あり、云ひ甲斐のある議論とするには、先づ漢字が過去に於ける發達の歴史より觀察を起して現代に至る間の徑路をしらべておく必要が十分ありはしないか。まかして後始めて現時の社會と文字の關係即ち漢字が蒙つた社會上の影響如何を觀ることが出来るので、漢字將來の方針などに就いても全くこの順序に依つて論ぜられなければ十分の基礎がある論とは云はれまい。然らば過去に於ける支那の文字はどう云ふ工合ひに發達をして來て居るか、是れ吾人の先づ第一に觀ておく可きことである。



## 一 過去に於ける支那文字の發達

支那の文字を観察するには形の方面、意義の方面、音の方面など色々あるが茲には其の一斑を窺ふことにして主に形の方面をとり出して少く之について観察して見よう。

普通一般からは漢字の形と云へば、これはくるひの生ずることのないもので、又それがあつては字を成さなくなるものであると云ふやうに考へられて居る。無論それにも一つの眞理がある。意味とか音とか云ふ方面であると古今の時代に依つて違ひが生じて來、地方々々に依つても亦少からぬ變化を有して居るのであるけれども、形の方面に至つては殆んどいつも變つて居らないやうである。又なる程形がみだりに變つて行つては文字相互の間に混同などが生じ、文字が文字としての役目もつとまらなくなるものである。けれどもまかしそれは單に理屈にとまらるのであつて、古く文字の歴史上から仔細に觀察して見るときは、漢字が今日のものに發達して來るまでには、少からぬ變遷を経て居て其の間随分甚しい混同も行はれて居たことが發見せられるのである。

現今普通の書體の上に楷書、行書、艸書の三體があるが、その基本たる楷書の生ずる前に既に隸書とか、篆書とかの色々の書體、否古くはかやうな字形があつたので、愈最初の根本のところ推詰めると古文と云つて繪のやうな形をした文字があつたことがわかる。漢字の象形起源に就いては茲に

別段事新らしく繰返す必要もあるまいが、その象形から起つて今日に至るまでに、非常な變遷があつたので、殊に篆書から楷書にうつるまでの段階に最もよく之が現れて居るやうに思はれる。今左に一、二の例を擧げて見ると、既に五八頁でも云つたことであるが、

唇の字

胃の字

共に肉月の月に従つてその意味が出て居る。

然るに素との唇の字は音を表はす辰の部分丈けはそのまゝに残つたが月は變じて口となつて今日の



唇の字が出来た。最早や今日ではこの唇の字の方をかいても決して怪まれなくなつ

た位である。胃の字には肉月の月はそのまゝ残つたが、胃の腑に物の溜つて居るか

たちの部分は、今日少々略されて、全く田の字同様にかゝれて通用して居るやうに

なつた。田と月では胃の腑のことに解しようとしても解釋がつきにくい。また、

冒の字

帽の字

共に曰の字と目の字に従つてその意味が出来て居る。



然るに今日では往々冒の字が日月の二字を以つてかきつらねられ、従つて帽の字の場

合にもやはり之をかく。これは目の字から月の字に變じたものであつて後世日月の文

字の體裁に混同せられて書かれるやうになつたものと見られる。



今一つ茲にちがった場合の例を擧げて見るに、愛宕の宕の字。これは今日誰しも誤字とも、略字とも、俗字とも思つて居ないやうであるけれども、其の沿革の歴史上から云ふと此れ丈けでは素との文字にはならないやうである。即ち古くはハ冠りの下に碭の字があつたのを、その旁が省かれてしまつて、意義を示す石偏ばかりが残つたので、全く省略文字となつてしまつたものである。

かやうに各文字の沿革を派つて次第に古いところをしらべて見ると、今日正しい楷書と思つて居るものに、中々容易ならぬ謂はれがついて居るのを見る。それ故に孰れの文字であつても先づ豫想以外の變遷を経て以つて今日に至つて居ると云つても過言であるまい。かやうにして一度變形した文字が又長い年月の間には、更に或る種類の變遷をなして來ると云ふ風で、文字の沿革は絶えずめぐりめぐつて、そのうちに自ら發達をなしつゝあるのである。

かやうに觀て來ると、文字の形はいつも一定した同じ字書を有して居るのでなく、反つて大いに變遷して居るものであると云ふことは最早や争ふことの出来ない事實である。まかもその現象が常に繰り返へされ、又殆んどすべての文字に之が行はれて居る。そして見るとこれは決して偶然的の現象としては見られない。何かこの現象の裏面に絶えず之を支配してゐるやうな原動力たるものがありはしないかと云ふ疑問はきつと起つて來るであらう。之には看過することの出来ない二箇の原因が伏在して居るやうに自分には思はれる。即ち、先に六四頁に云つた通り、

## 一、類推作用

## 二、省略作用

であつて、上述の唇の字とか、冒の字の例は第一に屬し、宕の例は第二に屬して居る。總べて漢字が文字としての形を現して居る間は、此の二つの作用のうち、孰れか一つを受けないものは極めて少いので、文字の拵へられる時に既に多くは第一の作用から影響を蒙つて出來てゐるのである。それ故總べての文字は殆んど運命としてこれ等の作用を受けなければならぬ。然るに此れ等の作用と云へば必ず直ちに形の上に影響を及ぼして來る筈のものであるから、従つて漢字の形がうつつて來なければならぬ趨勢に向ふものである。これ後世の文字が古代の文字と形に於いて少なからぬ差異を有してゐる所以である。

類推、省略の二大作用はその互に相はたらいて、文字の形を變化せしめると云ふ點に於いては孰れもかはるところはない。けれども類推の作用の方は漢字を統一的に増殖せしめようとするはたらきをなし、省略の作用に於いては之に反し既に存する形を成る可く單純化して行かうとするはたらきをなしてゐるやうに思はれる。つまり漢字が今日に至る迄の發達と云へば、一方に於いてそれが作られて行くと同時に他方に於いては單純化せられて、成る可くわかる以上は輕便簡易な形に向つて行かうとする傾向を示してゐるのである。



過去に於ける漢字發達のあらまは以上のやうな状態を経て今日に至つて居る。次に然らば今日の現状は如何。

## 二 現在に於ける漢字の状態

上述のやうに、漢字の變遷發達は單純化しつゝある。一方に簡易文字の改造増殖があれば、他方には煩雜な形が續々略されて行く。過去に於ける此の一大現象は現代に於いて殊に著しく行はれて居る。否之は止めようとしても止められない。若し現代の日本にして、假りに楷書一式の活版文字が全く存しなかつたものとするれば、或は漢字の形は看板文字以上にくづれたかも知れない。又若し禮儀の上に於いて或は學校に於いてあまりに之が注意せられなかつたとすれば、楷書の感念はよほど不明なものになつてゐたかも知れない。滔々たる社會の大勢が難を脱して易に向つてゐることは、古も今も變るところはない。和漢混用文に於いても、年を追うて一般に漢字の要素が減退しつゝあることは争ふ可からざる事實である。殊に言文一致の行はれるやうになつてからこのかた、頓にその現象が著しく見られる。これは書くものが多く難字を用ひないのみならず、讀むものも一目して拮据な文字が餘りに多く見られると、讀まない先きから肩が凝るとやら云つて、多くは之を喜ばないと云ふ一般の傾向もある位でこれも亦否定す可からざる事實である。茲にはその原因が如何なる所に起つてゐるかと思ふ

ことを責めるのではない。社會の大勢に於ける漢字の用ひざまがかやうになつて來てゐると云ふ事實を述べるのである。

又單獨の各文字に就いて、其の形を觀ても普通の活版文字は別として、苟も人々の手で書かれて居る楷書には、種々さまざまの單純化した形、而かもそれが楷書的事であることを見る。今日では尙一方に正式の楷書が存して居るものであるからこれらは俗字とか、略字とか目されて居るが、現に反つてその略字であるところから全く重寶がられてゐるものが頗る多い。例ば、雖の字とか、類の字とかがその偏丈けの文字となり、錢の字がその傍のみの文字となり、獨の字が毛もの偏に虫の字を書き、その他舊の字、醫の字、點の字、摩の字が皆それぞれ特有の一部分を残してその素との文字と同様に用ひられて居る。これらは本字と略字の間に、省略の部分が明かなもの例であるが、此の外には又、體の字の俗字、屬字の俗字、佛の字、國の字、黨の字などの俗字と云ふ風に、漢字が常に簡單なる形に向つて進んで來て居る事は全くうたがはれない。時として類音などところからして、『關係』と云ふ字を『干係』とかくことさへある位である。

かやうな例は事務家の手びかへとか、學生一般の筆記などに就いて求めるならば、最も普通に觀るところであつて、其の理由には色々あるであらうが一定の時間内に出來得る丈け多くの文字を、わかり易く書きとめなければならぬと云ふ必要が主な原因となつてゐるものかと思はれる。



以上は既にある文字が單簡になつて來た例であるが、尙今日新たに作られて來た文字の形を觀ても、亦この傾向にそむいてゐるものは餘り見ないやうである。例へば最近の新文字で云へば、

涇又は哩の字、

俵の字、

浬の字、

偕の字、

この外時としては鷓の字とか、鯉の字とか又腺、腓などもあるが、後者のやうな入りくんだ畫のあつた文字は比較的僅少である。

社會の大勢は常に文字の複雑なるものを避けて、簡易なものにつくと云ふことは、一般から云へばそれがひがないが、元來意味の表識が主眼であるから、唯一概に形の方ばかりでその傾向がきまつて行くと云ふものではない。まかし意味にくるひの生じない限りは、形に於いて簡便なものを選ぶと云ふことは、自然の勢ひ上争ふ可からざる事實である。又字數に於いて數箇の文字を用ふるものは、一箇の文字に出來ればまとめてしまふと云ふ傾向も、亦自然の勢の然らしめるところであつて、人力車が俵となり、海里が涇となり、陸里「マイル (mile)」が必ず哩となるが如きは即ちその好適例である。

以上現代の状態に就いて述べ來たつたやうに、漢字は文章中に用ひられて居ることが次第に減じて來て居るのみならず、その用ひられて居る文字そのものも成る可くむづかしくない字畫のものが勝利

を占めて居ると云ふ有様になつて來たのである。文章中に於ける漢字減退の理由は、輒近の文章が達意平滑を專一として、口語に近づき、従つて素との所謂漢文直譯體流の文章を避けるやうになつたと云ふことが主な原因となつて居るのである。一面から云へば漢學素養の足りなくなつた爲めとも云はれ得るかもしれないが、他の一面から云ふと一般大勢の要求上平易を主にして、融通の利いた平民的文章を貴ぶ風となつたから、獨り支那文字のみの榮えることを許さなくなつたものとも見られる。即ち日本現時の趨勢の上、或は又便宜の都合上からは、時として從來の縦書きよりも横書を書くことさへ少なからぬ位で、従つて漢字よりもローマ字、否洋語洋文字をそのまま書き流すことを便利とするところのあるのは、既に一部の社會に經驗せられて居るところである。これは場合によつては假令字畫の容易な漢字をかくよりも洋文字の方が更に、一層便利で且つ適切などころがあるからである。尤もこれは横書きする場合のみ起る話で、必しも一般縦書きの場合に直ちに適用して攷ることは許されない。けれども文章に於ける文字が如何に便利平易を主として居るかは此れに依つて察せられるのである。

尙現代に於ける漢字は類推の作用に依つて如何に影響せられて居るかと云ふ問題は、今日の文字の状態を觀る上に看過す可からざる方面である。この現象は過去に於けるそのやうに、頗る面白く且つ多く現れて居る。即ち既に述べた俵の字は人偏の類推で、鯉の字は魚偏の類推、その他聽の字が唯の



耳偏にかゝれ、鹽の字が土偏にかゝれ、又汜の字が巳の旁フツに書かれて居るなど皆この好適例である。この類のものを採取すると、尙種々の場合のものが出て来るであらうが、大體に於いて皆既に知られて居る普通の文字の方に引きつけて、一種の新しい字形を拵へて居るのである。中には無論複雑なる類推の方法もないではないが、多くは統一的に新類別を作つて、今の考へ通りに文字を作つたり、又は改めたりなどしてゐる。かやうに類推で出来る字形は時代思潮の表識となつてゐるものであつて、常に必しもその運筆上の便否如何は問ふところでない。けれども類推作用から出来た新字形は或はその出来ると同時に、或は又それ以後に於いて省略簡易の作用を受けて居ないものは極めて少いのである。鹽の字の俗字に於いて觀られる形は即ちこの一例である。

要するに現在に於ける漢字發達の大勢は大體過去に於けるものと同様に觀察せられる。即ちその各箇の文字は類推に依つて作られ、又變ぜられて居るが、省略作用によつて之が簡便にせられて居る。又その文字の使用せられたに就いては一つに全く文章の傾向が既に漢文的口調を遠ざかつて來た爲め、次第に漢字そのものも舊の如くには用ひられなくなつて、従つて今日では或る特別なものを除いて、普通一般には、餘りに多く難字は社會から疎んぜられ、忘れられて來た。のみならず漢字全般の使用がよほど減じて來た。而かもその或る部分に於いて日に月に獨りその數を増しつゝあるものは、即ち平易にして簡明なる新俗字と新略字の形である。

### 三 將來に於ける漢字の問題

古來漢字の發達は、其の字數の示すところに依ると、後漢時代に九千餘、唐時代に二萬六千、明末に四萬五千と云ふふえかたをして居る、その各時代に死字となつたものを差し引いて數へて見ても、とにかく字數が時代と共に増加して居ることは争はれまい。近くは康熙字典に補遺を合算して五萬七千、尙現代及今後はいくらに増されるものかはかられない。まかしこれは漢字のもとかた支那本國に於けるはなしである。日本に於ける社會の現状で頓に減少に傾き、むづかしいものは世間から疎んぜられ、或は平易にくづされる。この大勢は過去の歴史上から自然にきまつて來て居ることで、今更一部の人為の力できめようとしてもとゞまらぬ。

然らば將來に於ける漢字は如何なる状態に向ふであらうか、略ぼ推察が出来る。即ち今後の大勢が局面を一變しないかぎりには、

- 一、漢字の用ひられることが全體の上で減少に傾くこと、
  - 二、今後用ひられる漢字は特に用途の多いものか又は簡易なものであること、
  - 三、今後用ひられる漢字は常に自ら簡易にせられて行くこと、
- などとなるであらう。尤もこれは社會一般の上から觀たのであつて、



- 一、國粹保存のためとか、
- 二、歴史的にものを研究するとか、
- 三、支那朝鮮に關する仕事をするとか、

云ふ場合に於いては漢字の反つて必要なことは、無論のこととて茲に贅言を費すまでもない。否反つてこれは有力なる積極的議論の基礎となつて居る。けれども既に一般社會からは、漢字はかやうな運命になつて來て居るやうに觀察せられる。既に然りとすれば、今日に於いては益大いにこれに就いて善後策を講ずるやうに勉めなければならぬ。嘗に支那式一流の漢字にのみあこがれて居る可き時ではない。俛の字も認め、床の字も認め、圓の字の略字をも認めなければならぬ。

のみならず反つて漢字將來の爲め、否社會の爲め此の種の輕便な文字は、世間に通ずる限り續々作り出だされなければならぬ位であるであらうと思はれる。まかしそれも程度問題であつて、むやみに濫造せられるがまゝに委すことは無論できない。

そこで之に對する相當の方法を講ずると云ふことは漢字問題の將來の爲め否社會の爲めに、當然しかある可きことである。

又國字問題の立脚地から云つても、先きの遠い理想は別にして、差し向き此の點で一先づ漢字に就いて猛省することも無益でない。それ故漢字問題の目下の急務としては、漢字の今日に至つた發達の

徑路を明かにすると同時に、今日及び今後の社會の趨勢に鑑みて、之を攻究しなければならぬ。

尙漢字問題に關聯したことで世間から餘りに注意せられてゐないことがある。即ち漢字交り文が書き流される時に當つて、その縦書きを必要條件として居るのであるか如何の點である。漢字存立の根柢さへ動かさなければ、ローマ字式に横がきせられてもよろしいか否か。若し之が認められるとするならば、現に諸種の筆記に於いても觀られる通り、漢文字は色々の點でローマ字と親密になる。鶴的の文字は嫌ふ可きに似て、時としては反つて便利なことがあり、事實又よく行はれても居る。けれどもそれらは一部の社會に見るところであつて、一般の社會が此れに従ふに至るか否かは全く疑問である。從來の縦書きが横書きになることは區々たることのやうに見えて、其の實容易に決定は出來ぬ。まかし兎に角これも自然のまゝに打ちやる可きものでない。品川驛で横書きの驛名を『はかなし』と讀んだり「きぬた」驛を「たぬき」と讀んだ一乗客のあつた一事に依つて見ても、日本の書きかたには何とかのきまりをつけると云ふことは必しも無益のことでない。これは本問題に直接の關係はないが、西洋式のかきぶりが漢字問題に將來影響を及ぼすことがあるから、之を附加したのである。

以上はこの重大な漢字問題を茲に解決しやうとしたのではない、唯漢字問題を觀察する方法に就いて述べたまでである。漢字不可廢論を唱ふるひと達が常に社會の趨勢に伴ふ主張をしなければならぬとは無論であるが、その觀察が單に理由を列べて立てる丈に留まらないで、漢字そのものの觀察法は



果して如何にあるか、又漢字は如何なる歴史によつて生じて來たのであるか、と云ふやうなことを歴史的にしらべて見て、然る後現代の状態を解釋し、或は將來のことに及ぶと云ふ風にありたいもの考へるのである。過去のしらべを怠り、現在の状態を明にしないで居て、將來のことに及ぶのは、宛かも今までの漢字を全く軽く視てしまつて單に將來の國字にのみ及ぶと云ふ一方の論と撰ぶところはなと思はれる。要するに支那文字の發達史上から、又今後の社會の大勢上から目下の漢字を如何に整理す可きかと云ふが、本問題の焦眉の急務であるから、漢字ローマ字孰れを主張しようとも、一先づ此の點で兩派は妥協する必要があるまいか。

## 第九章 今日の漢字は如何に觀察す可きか

### 一 緒言

漢字が實用上必要にして缺く可からざることは、今更云ふ迄もないが、更に之を學術的の方面から觀ても、又頗る趣味のあるものである。決して現状の如く冷淡に打ちやつて置く可きものではない。假令此れが觀察の方法に就いては、不完の差は現はれようとも、兎に角支那の文字を對象とする一つの科學的研究が、今日起つて來ることは是非必要である。從來は漢字が特別に研究せられたと云ふ

ことは殆んどなかつた。普通に漢文とか漢詩とか又は和漢混用文とかの中に現れた漢字、其の他人名地名等の名前に現れた漢字などから得られた漢字の散漫なる知識、此れが即ち從來の所謂漢字の知識であつたのである。素とより實際用ひられた一々の場合に就いて漢字を觀て行くことは即ち此れが用法を最も明かに會得し得る所以であつて、此の側の研究亦頗る重要であるに違ひはない。併し漢字は單にかゝる場合に就いて觀察せられるばかりでは、未だ十分の觀察を遂ぐることは覺束ない。然らば其の觀察を十分ならしむる爲めには如何なる方法を探る可きか。左に其の方法に就いて少しく攻究して見よう。

苟も漢字の研究には此れを散漫に觀て居る丈けでは無論未だ研究と云ふことは出來ない。漢字を教授する場合であつても之と同様で唯文章中に散見する漢字を素通りに觀て教ふる丈けでは、決して眞の精確なる漢字は覺られないでしまふ。漢字に關して精確なる知識を必要とするには此れが教授の場合も又研究の場合も共に孰れもかはるところはない。其の精密なる觀察を下す爲めには豫め其の文字を或る一定の標準の下に蒐集し來ることが肝腎である。凡そ事物の觀察には單獨に觀る場合程危険の多いことはない。それ故出來得る丈け多くの類例を拉し來たつて、此れを種々の方面から比較し研究をなすのである。此れが最も安全に近い方法である。漢字の研究とても亦此の例に漏れない。實に漢字の研究にはその比較せられる材料の多ければ多き程、益基礎が安全で研究は愈鞏固となるであ



る。

今左に其の實例の一斑を擧げる。

例へば〔田〕の字の觀察するに當つては同時に一方に於いて之と〔由、甲〕などの字形との區別を認め、他方には之と〔因〕の字との差異を明かにして置かなければならぬ。然る後〔田〕と佃、鈿、思とを比べ、〔由〕と油、袖、柚とを比べ〔甲〕と狎、岬、鴨、と又〔因〕と姻、恩、咽とを觀ると云ふやうに進んで行く。尙〔爰〕の字の觀察の場合には一方に〔爰〕の字を他方に〔爰〕の字をそれぞれ區別して觀て置く。然る後股、段、役は〔爰〕に屬し、假、霞、鍛は〔爰〕に屬し、而して〔爰〕は沒の字に於いて現れて居ることに注意する。かやうにすれば沒が役の字とか段の字とかに混同せられる虞れはなくなる。沒は實は口と又に書くが古形に近いのであるがこは省く。其外化、貨、花は〔七〕に依り叱、切、砌は〔七〕の字に依つて其の音が出て居るのであることを注意しなければならぬ、又〔音〕の字に就いて其の音に〔イン、オン〕の二種あることを知る時は同時に又〔アン〕の音のあることを注意して置く。然らば闇、暗、諳などに〔アン〕の音が現れて居ることは容易に考へられる。又〔者〕の字音に就いては〔シャ〕の外に〔シヨ、チヨ、ト〕の音の共存して居ることを知らなければならぬ。奢、闇は〔シャ〕であるが、諸、署、曙は〔シヨ〕の音、猪、緒、蹠は〔チヨ〕の音、屠、都、賭は〔ト〕の音で現れて居ることなども此れに依つて直ちに察せられるのである。其の外〔鳥〕

と〔鳥〕との區別、遣と遣との別、彊疆の別、簿簿の別、勅勅の別、復復の別、祿錄の別、毫と毫の別、頃頃頂の別、勅刺刺、妨防坊、戊戌戌戌、己巳巳、又又又などに於けるそれぞれの區別、此れ等は總べて其の音の側から、形の側から、又意味の側から共に十分精密なる觀察を以て比較せられなければならない。

かくの如く特殊の類例を蒐め來たつて漢字の異同を注意すると云ふことは漢字研究の出發點である。併しながら國、漢文などの教授に際して餘りに此の種の觀察に深入りするは、枝葉に馳せ過ぎたるが如く思惟せられるかも知れない。けれどもそれは舊來の考へ方であつて漢字其のもの立ち場からすると、兎に角一つの學問として少くとも一つの學科として漢字の科學的觀察が茲に獨立して攷究せらる可きは理の當然である。況して此の特別の觀察の未だ獨立に存しない今日に於いては國漢文の教授の序でに折にふれ之を注意する必要がある、又止むを得ない譯と思はれる。

まかし熟々考ふるに漢字の研究には漢字獨特の研究部門がさまざまある。のみならず孰れも系統を追うてそれぞれ秩序的に攷究せられる性質を持つて居る。決して漢字は偶然的の現象を呈して居るものでなく、従つて傍ら仕事として研究しつくされるやうな簡單なものではない。輓近の科學界に於いて言語の學問が一箇の科學として現出して來たやうに文字の學問も同様に茲に獨立して成立し得るわけである。殊に文字學は言語學と違つて西人では殆んど全く出來ない事業である。其の素養を有し、



且つ又便宜を有する點に於いて吾れ吾れ東洋のものは確かに西人よりも此れが研究者たるに適して居るのである。

併しながら漢字の研究は決して容易な事業でない。固より國漢文の如きは漢字と密接なる關係を有して居るにもせよ、併し兩者の根本に於いて混同す可からざる區別を有し居る。従つて其の研究の立脚地も全然異なつて居る。假令漢字が副業的に國漢文の傍ら研究し得るとしても、それは眞の十分なる研究ではない。十分なる文字の研究は全然獨立したる文字そのものの科學的研究であつて、専ら比較研究の方法に依つたものでなければならぬ。これが即ち漢字研究の法式で文字學研究の發端は爰に啓かれるのである。(詳細は本編第十三章文字學の建設を參照せよ)。

次に純粹なる研究的方面を離れて其の應用の側より觀察して見るに此れに就いても其の攻究すべき事項は頗る多い。左に其の最も主なる點に關して少しく述べて見よう。

## 二 應用の側より觀たる漢字

漢字は云ふ迄もなく實際社會と離れることの出来ない關係があつて、事實上其の需用も益頻繁なる現象を呈して居る。然るに漢字は兒童教育に妨げになるとか覺えるに困難であるとかの理由で、從來動もすれば厄介視せられて居たことが屢有つた。現に今でも尙此の傾向がある。けれども此の傾向の

あると云ふは半面に於いて漢字教授に適當な方法の講ぜられて居ない反證となるのである。此れが教授に困難であるならば、その困難なる所以を追求し明かにし、速かに之を除去し得る方法に就いて攻究しなければならぬのである。

此の攻究は單に教育上のみから觀て必要と云ふのではなく、尙社會上の立場から觀ても、社會が漢字に對する今日の態度は此の現状のまゝで打ちやつて措いて然るべきものであるかどうか。又學術上の方面から此の漢字の現状は如何に觀ぜられるか、此れが秩序的の研究は如何に施さるべきかと云ふことの考察が必要である。孰れにしても今日漢字は唯あるがまゝにして等閑に附して置くことは出来ないものであると云ふことだけは誰れ人も拒むことは出来ない。されば從來の所謂漢字問題は今日では其の内容が違つて來て居るのである。即ち從來は單に漢字の廢止不可廢の議論であつたのが、今日では不可廢の一説に歸著し、積極的に其の必要缺く可からざることが主張せられるに至つた。のみならず更に教育上、社會上、學術上の諸方面から此れが研究の方法に就いて講じなければならぬ時期に到來したのである。つまり、

- 一、漢字は今日如何にせば整理がつくか。
- 二、此れが教授上の困難は如何にして除くことが出来るか。
- 三、又此れが科學的研究法は如何にして立てられるか。



などの問題が即ち今後の漢字問題として重要な研究事項となるであらうと思はれる。

かゝる研究事項の並び存するうち就中焦眉の急を告げて居るものは即ち教授上の方面に關する問題である。固より此の方面の研究は夙に著目せられて居ないではなかつた。けれどもそれは單に教へられる兒童の側を斟酌して居たばかりで、別段漢字そのものの教育的研究としては少しも考察せられては居なかつた。否漢字に就いて何等の研究も著手せられて居なかつたのである。全くくら闇の姿であつた。今も尙依然その通りで而かも往々食はず嫌ひのせられて居る傾きが見えることがある。又敬遠主義で觀ぜられて居ることもある。かやうに漢字はこれ迄毫も教授當局者自身からは何等の攻究も積まれることなくして、唯兒童の方のみに斟酌がせられて居たと云ふ事實は、確かに是れ迄の漢字教授に於ける一大缺陷であつたと思はれる。

今後學術上の方面から漢字の攻究が新たに起り、それに依つて適當なる教授法案の導き出されることのある曉には、教育方面に於いて漢字は即ち興味を以つて迎へられるに至るべく、教へ易く教はり易く、従つて記憶にも一層たしかに残ると云ふわけで、つまり勞少くして効果が反つて多く擧がると云ふことになる。既にそこまで行けば久しく教育社會に難問題として目せられて居た漢字の字數節減論の如きは自ら區々たる技葉の問題となつて來る譯である。從來の漢字問題は宛かも漢字の節減が問題の眼目ででもあつたかの如く、節減の議論を以つて終始持ち切りの有様であつて、眞に漢字そのも

のの根本的研究としては其の必要を論述するものさへ現はれて來なかつた。實に本末を轉倒した次第であるが、實際さうであつたのである。今後は宜しく、節減の末論に耽けるよりは寧ろその本に立ち戻り、漢字そのものの實際の秩序的研究所を積むに勉めなければならぬのである。此の根本の研究に手が著けられなければ如何に兒童の側の斟酌をしたり、字數の節減をしたりなどしても、毫も漢字そのものの整理は遂に出來ないで終るであらう。従つて漢字教授の困難はいづれの時か除かれることになるか殆んど期待することは出來ない譯である。

從來漢字の根本研究が忽諸にせられて居た原因には無論種々の譯があるであらうが、その主な原因は極めて通俗な考によつて居るのである。即ち實際上に特別の研究を積まなくとも讀み書きに不自由がなく、又必しも嚴格に正しい漢字でなくとも兎も角わかつて行く、縦し些少の誤差はあつても前後の關係からその意味がわかり、従つて之を正字に引き直して讀み通すことが出來ると云ふやうに考へた。かゝる考で普通漢字に對ふ。漢字に就いて終始精確なる知識の得られないのも理の當然で、又此れが研究心の起らないのもそれ故である。然らば此れに對する方法は如何。處置は如何と云ふに、今日のところ差し向き國漢文などの教授に際して其の類にわたらない限り、此れが綿密なる注意を振ひ起させ文字の比較對照を試むるやうになりとも勉むべきである。固より文字に關する秩序的知識は到底かゝる傍ら教授で授かるべきものではないけれども、今日の場合では亦如何ともする能はざる次第



である。

今漢字の點劃に就いてその誤まれ易いものを二三左に擧げて見よう。

- 一、研究の(究)の字 (究)は(丸)の字からの類推と運筆上の癖で思はず、穴冠りの下に丸の字を書く、丸ではキウの音が出て来ない。必ず茲には九の字を書かなければならぬ。
- 二、大切の(切)の字 (切)は土偏に類推せられることがあり、又力の旁に類推せられることもある。土偏に書いては切の音セツが出て来ない。叱咤の(叱)の字と同様に七の字を書かねばならぬ。従つて(窃、砌)なども七の字を含むことに注意がいる。次に旁を力に書いては切の字義に切斷の意味のあることが没却せられる譯であるから、矢張り(刀)を書いて(切)としなければならぬ。(功)の字ならばその旁は力であるけれども切は刀である。混同してはならぬ。
- 三、選抜の(拔)の字 (拔)はその旁の友に依つてバツの音が出て居る。更にその字は犬の字にかけたノに依つて其の音バツが出て居るのである。普通抜は手偏に友の字が書かれ勝ちであるが、それは日本の俗字である。稜趾髮鬣なども皆爰に考へ併す可きものである。
- 四、學問の(學)の字 (學)は(興)の字と冠りの部分の混同せられて居ることが屢ある。けれども學は素と教の字を含んで居た文字で、兩者は形に於いて又意味に於いて互に連絡のある文字である。然るに今日では反つて全く連絡のなかつた(興)の字に引きつけられて書かれ、而

かもよく通用して居る。無論これは俗字であるが同様の類推は覺鬣などの文字にも現はれて居る。

五、専門の(門)の字 學問の(問)と専門の(門)の字とが全く別字であることは茲に贅言を要する迄もない。けれども專(問)と書き誤られることがある。無試験檢定の履歴書にこの誤りの發見されたとか云ふ珍談もある位である。

茲に擧げたものはその一斑にしか過ぎないが、此の類の注意をその場合に觸れて常に引き起させるやうにすると否とは、其の結果に於いて著しい徑庭を生ずることと思はれる。けれどもかくの如き注意は普通の所謂漢學の知識では十分ではない。寧ろ別に文字學及音韻學などの他の方面からの知識を必要とするのである。少くとも此の方面の知識を基礎とした實用の側の知識を要するのであつて、むづかしく云へば際限のないことになるのである。

### 三 教授法案

以上の説述に關し、若し教授法案の一つとして音の側から漢字が如何に纏められるかに就いて平易に述べて見たいと思ふ。先づカ行音に屬するものを見るに、

#### (一) カ行音の部

第九章 今日漢字は如何に觀察す可きか



## 一 カ の 音

カ の 音 を 有 す る 音 の 符 號 は 左 の 六 箇 で 別 に 濁 音 ガ の 音 符 た る も の が 一 箇 あ る 。 卽 ち、  
 カ……………可、加、段、家、夏、戈、  
 ガ……………牙

此れ等が音符となつて音の出で居るものは少なからずある。今日に残つて居るは唯その一部分のものにしか過ぎないのである。今上に列擧したものの順序に依りて左に其の實例を掲げる。

(一) 可。可を音符とする漢字の音は多くカの音である。併し尙ほ他にア、キ、イの三種の音で現はれて居ることもある。けれども都合此のカ、ア、キ、イの四種の範圍以外に出でることはないのである。卽ち、

一、可——カの音に屬するもの

可、苛、荷、河、(哥)、歌、(柯)、(珂)、(訶)、(軻)、(軻)、

二、可——アの音に屬するもの

阿、痾、啊、

三、可——キの音に屬するもの

奇、寄、崎、崎、騎、欵、(猗)、綺、(鞞)、(崎)、(鞞)、

四、可——イの音に屬するもの

倚、椅、

の如きもので尙此の文字に別に俗字として一般に通用せる形がある。卽ち、

(奇に對して『立』の字と『可』の字を合併した如き文字、——奇)

奇の字をかやうに書くことから従つて他の多くの寄、崎、騎などに於ける奇の字も亦同様にその俗字にて書かれるに至つた。これは立の字の類推に基くもので決して其の誤字として排斥すべきものではない。一般のものが普通に認めらるゝに至つた以上今之を通用文字として取扱つても差支はない筈であると思はれる。

備考、上に列擧せる漢字に括弧( )を施せるは寧ろ其の通用の普通繁からぬものを示したものである。以下此れにならふ。

(二) 加。加を音符とする漢字はカ の 音 に て 現 れ る が 最 も 普 通 で あ る 。 尙 此 の 外 に ガ 或 は ケ の 音 で 現 れ る こ と も あ る が そ れ 以 外 に 出 る こ と は な い 。 日 本 の 假 名 の 『ガ』『カ』は云ふまでもなく此の音符から脱化したものである。

一、加——カの音に屬するもの

加、茄、嘉、枷、珈、迦、痲、跏、



二、加——ガの音に属するもの、  
賀、駕、

三、加——ケの音に属するもの、  
袈、

以上の『可』及び『加』は音符としての音が三種乃至四種に變化して現れて居るが、時には其の音符の原音のままの音で讀まれて居ることもある。次に挙げた段の音符の如きは其の一例である。

(三) 段。段の音符を有する漢字は其の音常に必ず力の一音に留まつて居て決して他の音に轉じて現れることはない。

段の音に属するもの

段、叢、叢、假、暇、暇、蝦、蝦、(遐)、(蝦)、(痕)、

段の音符の字書に就いては種々の誤謬をなすものがある。或は旁の𠂔を父となし、或は其の偏の方を段の字の偏と混同するものもある。かくの如くしては段なる音字はその實を失ふ譯になるのである。

(四) 家。家の字の音には五攝家、家來、後家などと云ふ場合のケの音もあるが、其の音符として字の構成上に現れた音は即ちカの一音である。併しその例は決して多くない。

家——カの音に属するもの、

家、稼、嫁、(傢)、

古人の説には家の字を更に段の字を嘗て音符に有して居たなどと説くものもあるが茲には其の事は云はないで置く。(説文解字第七卷参照)。

(五) 夏。夏の音にはカ、ゲの二音があり、夏至、半夏などの場合にはゲの音であるけれども其の音符としての場合にはカの音にて現れて居る。即ち、

夏——カの音に属するもの、

夏、榎、厦、嘎、

厦は南清の地名厦門の場合にはアの音で讀まれる。

(六) 戈。戈は云ふまでもなくカ(古音は *ka*)の音を有する文字であるが其の音符たる時は濁つてガの音となるのである。時として又更にギの音で現れることもある。

一、戈——ガの音に属するもの、

戈、我、俄、峨、蛾、(鷺)、

二、戈(我)——ギの音に属するもの、

羲、蟻、儀、犧、(曦)、

(七) 牙。牙を音符とせる漢字は普通ガの音を有す。けれども此の外に尙ジャ、ヤ、又はアの音で現



れることもある。されど此れ以外に出ることは殆んどない。即ち、

- 一、牙——ガの音に属するもの、
- 牙、芽、(逐)、(訝)、(愕)、(呀)、雅、
- 二、牙——ジャの音に属するもの、
- 邪、(耶は俗體)
- 三、牙——ヤの音に属するもの、
- 耶、椰、
- 四、牙——アの音に属するもの、

鴉

耶及び椰に於ける耳の字は牙の字と形の上の混同で誤られたものである。けれども既に今では耶は邪と明に別字視せられるに至つた。又鴉の字が阿片と書かれる代りに鴉片と書かれることのあるのは鴉阿同音たるの一例證である。

カの音に属する音符によつて説明の出来るものは大略以上の如きものである。次ぎにはカイの音に就いて觀察して見よう。

### 二 カイの音

カイの音を有する音符は次ぎに掲げた四箇で、別に濁音としてガイの音符たるものが二箇ある。即ち、

- カイ……………戒、皆、介、解、
- ガイ……………亥、幸、

である。そのうち幸及び亥の二者は時として入聲音の音符として用ひられることがある。(金石文の研究から異説が立つが暫く説文を根據とする)。

(一) 戒。戒の音符に依れる漢字音はカイの音の一種類である。

- 戒——カイの音に属するもの、
- 戒、械、械、誠、

などを普通のものとなすのである。

(二) 皆。皆を音符として有して居る漢字の音も亦カイの一種類で他に轉音のあることを見ない。即ち、

- 皆——カイの音に属するもの、
- 皆、借、楷、階、諧、

(三) 介。介の音符に依れるものも亦常にカイの音で現はれて居る。まかしその類の例は多くない。



介——カイの音に属するもの、

介、芥、界、堺、(疥)、(价)、

(四) 解。解は佛語で解説など云ふ時はゲの音を取れるが、其の音符として一般に現はれる場合はカイの音である。即ち、

解——カイの音に属するもの、

解、懈、蟹、(懈)、邂、……備考。活字に刀の字の下にキの字のあるは牛の誤である。尙また解の字の畫を角偏に羊を書くものがあるがそれは本来の形から云ふと俗字である。牛と角を書き之に刀の字を書き添へてこそ始めて解の字の本義は現はされる譯である。このことは音韻の話しに直接の關係はないことであるが序でに注意して置くべきことである。

(五) 亥。亥の音は云ふまでもなくガイである。従つて複合文字に於ける此れが音符としての音も亦ガイなる場合が多い。けれども尙外にカク又はコクとして現れることも稀にはある。されど此れ以外に出ることは決してない。

一、亥——ガイの音に属するもの、

亥、咳、該、骸、駭、効、歎、(骸)、(咳)、(核)、

二、亥——カクの音に属するもの、

核、

三、亥——コクの音に属するもの、

刻、

亥の音ガイに對つてカク、又はコクなどの音は入聲音であつて、音の古さから云ふならばガイと云ふよりも此の入聲音の方が古いのである。

(六) 丰。音符としての丰の役目は頗る複雑である。丰の字の單獨の時の音はカイであるが實際字音の場合には種々な音を表はす。即ち、ガイ、カツ、ケツ、セツ、ケンなどがある。此のうちカツ、ケツ、セツの三種の音は所謂入聲音である。左に丰を音符として居る諧聲文字に就いて見るに都合六種のものがある。即ち、

一、丰——ガイの音に属するもの、

害、

二、丰——カツの音に属するもの、

豁、割、轄、楔、

三、丰——ケツの音に属するもの、

潔、(楔)、



四、丰——ゲツの音に属するもの、  
誓、

五、丰——ケイの音に属するもの、  
契、禊、

六、丰——セツの音に属するもの、  
契(人名)、

七、丰——ケン<sub>二</sub>の音に属するもの、  
憲、

此のうち契を契丹など云ふ時にキツと讀むのはケツの音の轉である。尙字形に就いて云ふに丰の畫が書き誤まれて主とせられることが屢ある。殊に害の字を書く時にそれが最も多い。併し今日必しも丰と正しく書かなくとも一般から誤字として認められてはゐないから之を以つて尙通用文字と認めることが出来る。又憲の字は心の上に目の字の横になりたるものを書くが古形に叶ふので皿に書くのは俗字である。併しこれも強ちに誤字として排斥する程のものではない。

カイの音の部に属する諧聲文字は大略以上の如きものである。次ぎにはカンの音符に就いて述べよう。

三 カンの音 (上)

今日カンの音を有して居る漢字は通常カンの音で呼ばれて居る音符を含んで居る。又ガンの音のものはガンの音符を有して居る。然し今日のカン及びガンの音はその中の總べてが『ン』の語尾音を有して居たのではなく、中には素カムとかガムとかの音の如く『ム』の語尾音であつたものをも含んで居るのである。かれやこれやを綜合して今のカンの音符は總べて十箇、濁音ガンの音符は二箇あると思はれる。左にその音符を列挙して見れば、

カン……………草、甘、咸、監、干、弁、敢、召、東、寒、  
ガン……………雁、岳、

である。更に此これらの音符より發達し來たれる多くの漢字に就いて觀察して見れば次の如くである。  
(一) 草。草の音符は通常カンの一種で現れて居る。時としてはケン<sub>二</sub>の音を取ることもないではないがそれは唯一の場合に見出されるだけである。左に此の音字の諧聲文字を擧げる。

草——カンの音に属するもの、  
草、乾、幹、(漣)、韓、翰、(瀚)、

此のうち韓の字は其の古形では旁の韋の上に人があつたので即ち韓とあつた。後世書く韓の字は其の省かれた形である。次ぎに乾に就いて乾坤など云へる場合の音はケンであるが乾燥とか乾物など云



ふ場合は總べてカンの音で讀まれる。

幹の字に似た幹（幹旋）は其の音アツで乾幹などと同類の諧聲文字ではない。故に其の音も亦之に關係はない譯である。

(二) 甘。甘の音符は今普通にカンの音を現はすに用ひられて居る。けれども其の素との音はカムである。併し今日甘は又コン、シン、ジン、及びタンの音をうつすにも用ひられて居る。而して此れ以外に音符として用ひられてゐることはない。そのうちカンの音をうつせるものが最も多くその他は殆んど一つ宛のやうな有様である。即ち、

一、甘——カンの音に屬するもの、

甘、柑、紺、紺、堪、戡、勘、疝、箝、紺、(邯)、(峴)、

二、甘——コンの音に屬するもの、

紺

三、甘——シンの音に屬するもの

紺

四、甘——ジンの音に屬するもの

甚

五、甘——タンの音に屬するもの

湛

地名で例へばカムチャツカに甘察加と宛てて書くなどは甘の古音カムに該當せるものである。又堪をカンと讀み湛をタンと讀む。カンもタンも音の出どころこそ違へその響きの方の性質の上では破裂音と言つて同一であるに依つて、カンからタンに轉じうつたものである。

(三) 咸。咸は甘と同様に其の原音はカムである。けれども今日の音はカンとして知られ其の音符としての音も亦カンである。又咸は別にゲン及びシンの二種の字音を現はすこともある。併しこの外に出ることは全くない。

一、咸——カンの音に屬するもの、

咸、喊、緘、鹹、感、(憾)、憾、

二、咸——ゲンの音に屬するもの、

減、

三、咸——シンの音に屬するもの、

箴、鍼、

減の字は今日普通に三水でなく二水で書かれる。これは俗字であるが併し反つて、此の方が一般か



ら認められるに至つて居る。

(四) 監。監の字音はカン、古くはカム。まかしこれがカンの音符として用ひられることは比較的稀であつて、その多くの場合は寧ろランの音符として現はれて居るのである。監は又エンの音符で現れることもある。然れども以上、カン、ラン、エンの三種類の外に出ることは全くない。即ち、

一、監——カンの音に属するもの、

監、檻、鑑、(鑿)、

二、監——ランの音に属するもの、

濫、檻、藍、籃、覽、(攬)、纜、攪、(藍)、艦、

三、監——エンの音に属するもの、

鹽、

鑑と鑿とは形こそ違へ、素と同字である。又エンの音を取れる鹽の字は素と監と鹵の字から構成せられた複合文字で、其の最初の古音が監と同音であつたことは十分察せられる。前節成の部に擧げた鹹は即ちこの鹽と比較すべきものである。即ち同一の鹵に對して咸ともあり監ともあるは咸、監同音たりし一證となるわけである。その鹵の字については素と鹽田に象つたものであると云つて居る。果していかか。

尙鹽の字は略字に就いて考ふるに今日之を土偏に書かれたものがある。これは素とその音符たる監の字のうちから臣の字のみを注目し鹽と臣の字の偏とは何等の關係なしと誤解した爲め此の俗字を見るに至つたものであろう。併し字畫簡略になり行く文字發達の原則に従ひ此の俗字通用は反つて自然に叶つた譯であつて決して排斥すべきものでない。

#### 四 カンの音 (下)

干。干の音符は殆んどその總べてが、カンの音にて現はれて居る。唯それに二つの例外として、ケン及びガンの音の場合がある。併しこれ以外の外となることは決してない。

一、干——カンの音に属するもの。

干、刊、肝、杆、汗、杆、奸、杆、旱、悍、稈、罕、竿、芊、(赶)、

二、干——ケンの音に属するもの。

軒、

三、干——ガンの音に属するもの。

岸、

干の字は其の形が干の字と取り違へられることがある。従つて其の音を混同することがある。俗にこの區別を明かに注意せしむる爲め「于干棒跳ね」と云つて居る。これは事實混同した云ひかたで干



は決して最後の筆を跳ねてはならぬ。

弁。弁は干と同音でカンの音を有して居る。尙音符としては別にケン及びカイ、ケイの音で現はれて居ることがある。字の古いところに派れば同一視は出来ないがこゝではかりに一つに見ておく。

一、弁——カンの音に属するもの、  
柔、

二、弁——ケンの音に属するもの、  
研、妍、

三、弁——カイの音に属するもの、  
開、

四、弁——ケイの音に属するもの、  
形、刑、荆、

第三、第四の場合に於けるものはその形が普通に开となり、従つて開、形、刑、荆となつて通用して居る。俗字ではあるが一般に是認せられて居る。

敢。敢の古音はカム、今の音は一般にカンである。その音符としての場合にはガン、ゲンの音となる。  
一、敢——カンの音に属するもの、

敢、𠄎、𠄏、

二、敢——ガンの音に属するもの、  
巖、

三、敢——ゲンの音に属するもの、巖、儼、  
尙華巖などと云ふ場合に於ける巖の音は更に別のゴンの音となる。

召。召の音は敢と同じ。古音はカム、今はカンの音で更にアン及びエンの音符となつて居る。即ち、  
一、召——カンの音に属するもの、

召、陷、略、

二、召——アンの音に属するもの、  
韶、(本音はカン)

三、召——エンの音に属するもの、  
焰、閻、

普通によく稻、滔などの字の旁りと爰に擧げた召の字とが混同せられる傾向がある。これは類推によつて稻、滔などの方に引きつけられた爲めである。尙その白の字の部分を白にかき又その上に刀(正しくは力)とするのは誤りである。



東。東の音符カンは、カンの音を現はす外にラン及びレンの音符として役立つ。併しこの三種の音以外に出ることは全くない。

一、東——カンの音に属するもの、  
東、諫、

二、東——ランの音に属するもの、  
蘭、蘭、欄、瀾、(瀾)、爛、綱、

三、東——レンの音に属するもの  
練、煉、鍊、

東は東及東などと混同すべからざる音符である。

突。今日の楷書に見る此の音符は一方に於いてカン及びケン音を現はし、他方に於いてソク及びサイの音を現はす。字形の古い時代のことは茲に云はない。併し今日書かれる實際の形はかくの如きものである。古代に在りては寒と塞とは根本的に違つた要素から出来てゐる。

一、突——カンの音に属するもの、  
突、寒、  
二、突——ケンの音に属するもの

塞、寒、(寒)、  
三、突——ソクの音に属するもの、  
塞、

四、突——サイの音に属するもの、  
賽、塞、

以上観察し來たつたものは主として清音に就いてのものである。次ぎには濁音のものに就いて見るに、

雁。雁を音符として居る漢字は即ちガンの音を有して居る。

雁——ガンの音に属するもの。

雁、贗、

雁の音符は應、鷹、膺などに於ける音符とは固より其の古形に於て些少の區別を有して居る。混同す可からざるものである。又雁は一つに鴈と書かれることがあるが贗の字の場合には必ず雁の方を書く。

岳。岳は巖と通音として用ひられるが如くガンの音である。

岳——ガンの音に属するもの



齒、癢、

乾甘以來爰迄述べ來つたものは即ちカン又はガンの音を有する音符十二箇のものに就いて觀察したのである。十二の音符によれる漢字で今日現に残つて居るものは以上九十九箇の多きに達して居るのである。

以上は深き學理的な研究を本として分類したものではなく、單に實用の側から觀たわけかたである。教授に際して學生にこのまゝのことを語るは考ふ可きことなるも、教師そのものが楷書の形ぐらゐのところを標準にとつて此の種の分類を歸納的に研究しておくことは國字なる漢字の教授攷究上頗る必要なことと思ふ。

## 第十章 漢字問題の前途

漢字問題は云ふまでもなく、重且大なる社會上の問題である。引いては教育上の問題であつて、同時に又學術上の問題である。決して一個人の力、一團體の決議などに依つて、其れだけで、これが理想通りに左右し得られるやうな性質のものでは無論ないのである。

世間で一樣に漢字問題と云つて居る問題のうちにも、此れには、其の觀る人の觀かたに依つて、種々様々の觀かたがある。根本から漢字を追ひ退けて行くべしと云ふ觀かたもあれば、在來のまゝに保留して置く可しと云ふ觀かたもある。或は又俗字略字を盛に許容して行かうと云ふ説もある。自分は其の孰れを是とし、孰れを非とすると云ふ判断をなす資格は持つて居ないのであるが、唯、日頃、自分の音韻研究の傍ら、學術上の立ち場からこの問題を如何に觀るのが正當であるかと云ふことを考へ、假りに將來長く漢字が減びないで、保存せられるべきものとしての前提の下は少しく『漢字問題の前途』について論じて見たいと思ふ。素より今急に之が解決を欲するのでもなければ、自分の説を押し賣りするのでもない。唯觀察の結果を、有りのまゝに説き述べて、世の識者と共に此の重大なる問題を一考して見たいと思ふだけである。それには豫め順序として、觀察上の大體の項目をまづ擧げて置く必要がある。即ち、

- 一、將來の漢字は如何にあるべきか、
- 二、實際と學理
- 三、漢字相互間に系統の存すること、
- イ、音の系統
- ロ、形の系統
- ハ、意義の系統



- 四、俗字と略字の許容
- 五、新文字發生の氣運
- 六、結論

此のうち第四項のうちの略字の許容については、明治四十年十二月の雑誌『太陽』に少し許りの實例を以つて、論じて置いたことがある。

今以上の項目の順序によりて、左に其の要を簡単に述べて見よう。

### 一 將來の漢字は如何にある可きか

今後の日本に、漢字其のものは、如何なる趨勢を取つて進むであらうか。これについてはさきに市村博士の漢字論が出たことがあつたが誰もこれに答へたものが出て居ない。文部の當局者は既に此の問題に向つて、如何なる方針を立てて居らるか、其のあたりの消息は自分は深く知らない。自分は當局者の考如何に拘らず、自分だけの愚案を述べて見ようと思ふ。

將來に於ける漢字の趨勢を観察するには、先づ基礎として調査せられなければならぬ件々がある。即ち其の件々とは、

#### A 學術の方面に於いて

- a 過去に於ける漢字の歴史
- b 今日に於ける漢字の状態
- B 社會全般の發展の方面に於いて
  - a 國內の發展進歩
  - b 外國との關係

- (一) 東洋諸國との關係
- (一) 西洋諸國との關係

が其の主なるものである。つまり、此れを纏めて云へば、漢字そのものについての十分の調査と、漢字を外部から觀た大局の上からの調査（若し調査と之を云ひ得るならば）の内外兩方面からの研究を要する次第である。然るに、此れ等の件々に就ては未だ何等の調査も出來て居ない。假令、簡單なものにあつても、十分調査されたものは未だ出て居ない。

將來の漢字問題に就いて、是れまで稍人々の口にのぼつて居たのは、その字數の問題である。大分前であつたが『東京日々』に諸大家の説（國定教科書に用ふべき漢字數増減如何に就いて）の掲載されて居たものを見るに、

#### 一、増加説



- 二、條件付き増加説
- 三、節減説
- 四、廢止説

など種々のものがあつた。併し其のうち最も多數を占めて居た説は、第一の増加説であつたやうに記憶して居る。若し此の増加説から推して社會の大局の上に漢字が未だ決して拒まれて居ないものと見られ得るならば、吾人は尙更らに、詳細にその字數に就いて、調査してみることがあると思ふ。

初等教育に於ける教科書の漢字は、暫く措いて云はず。普通一般の漢字の數を今、帝國議會の速記録に徴して計算し、其の統計を取つて見ると、次ぎの如き表を得る。即ち、

第二十三回衆議院本會議議事速記録に就いての漢字調査、

ア行音に屬するもの	一五八字
カ行音に屬するもの	六九一字
サ行音に屬するもの	七二三字
タ行音に屬するもの	三四六字
ナ行音に屬するもの	三五五字
ハ行音に屬するもの	三五〇字

マ行音に屬するもの	四四字
ヤ行音に屬するもの	八〇字
ラ行音に屬するもの	一六一字
ワ行音に屬するもの	八字
國字	一四字
合計	二六一〇字

此の漢字の統計は、各方面からの議員の演説であるから、先づ各種の漢字は、茲に統計の示す二千六百十字を限度として、その範圍内に含まれてゐるものと見ても差支はなかりさうにある。けれども實際、今、大衆的の雜誌とか、中學程度の教科書、参考書類などに比較して見ると未だ此れ位のものをも以つて十分に實用を充たして居るとは云へない。第一期からの議會の速記録中から漢字を通計して見ると三千七百三十二字となる。どうしても普通に人の云ふやうな二千字説や、三千字説では未だ物の不便を感じざるを得ないと思ふ。苟も『教育勅語』のうちの漢字位が讀め得る程度で之を蒐集して見ると、

現行使用漢字の總數は 五三〇〇字

の多きに達して居るやうに精算される。茲に一々之を五十音の各行に宛ててその字を擧げるとは省



略して置くが、尙此の五千三百字以外に略字とか俗字とかで、別に發達し、而かも現に盛に行はれて居るものを加へ來ると、實に其の總字數は五九五〇字の多きに達して居るのである。(拙著漢字音の系統参照)けれども之を康熙字典に見えて居る五、七二一六字の數に比較して見れば、僅かに其の十分の一強にしか當つて居ないのである。

將來行はれる漢字の數が、かりに以上の如く、五千三百〇〇字を以つて大體の限度とすると假定し得るならば、然らば次に其れが將來如何なる運命を取るであらうか。是れ頗る攷究を要すべき點である。

抑も五千三百と云ふ數は、單に漢字の數であつて、世の所謂漢語の數とは違ふ。漢語は言語であつて漢字は飽く迄文字である。文字と言語とを混同してはならぬ。吾人は今日の社會生存上此の漢字を覺えなければならぬ外に、又漢語(時としては日本語とあひの子式の漢語も出來て居る)を覺えなければならぬ。漢語は多くは之を今、文字の側から觀て見ると、漢字のコンビネーション(代數學に云ふ)であるわけである。漢字と其のコンビネーションとを共に一つびとつ機械的に覺えて行くことは、中々容易なわざとは云へまい。今日までに高等の教育をうけ、十分な漢學を修め來たつたものは別として今後の世に立つ者の爲めには、此れは少々重すぎる負擔であると云ふ説もあるからである。吾人は此の機械的にして、おもしろ過ぎる負擔を輕め得る爲めに、次ぎのやうな案を考へて居る。即ち、

一、漢字及び漢語の覺えかたに自ら秩序を立てること

二、漢字のうちで既に一般社會が認めたる略字は之を許容すること

である。將來果して如何なる漢字が最も多く行はれるかは兎にかくとして、少くとも此の二要素を土臺にしてこの問題を考へることが便利であらうと思ふ。文字の歴史を攷究する特殊専門家の場合は別問題として、一般の中流の人々は事務家、商人、學生、時としては學者たちの間にも、書が多い漢字は、云はずかたらずのうちに、面倒がられて居る。其の爲めか、あらぬか、行書でもなく、楷書でもない、一種の簡略文字は盛んに書かれて居るではないか。卓近な例で『臺灣』の二字を正字の通りに、精しく書いて居る人はいく人あるか。又實際さやうに書く場合は、至つて少ないと云つてもよからう。一般の活字は舊の如く、『臺灣』と繁雜な正體を示して居るにも拘らず、實際はどしどしと之を略體で書いて行くではないか。此の一事に依つて見ても如何に簡易文字が、現今の大勢上歡迎せられて居るかわかる。單に現今のみに限らず、今後の社會の大勢は、反つて益其の必要を實現するに至りはしないかと豫想せられるのである。

昔し周の宣王の時には籀文といつて無暗に飾りのついた繁雜な文字が出來たことがあつた。併しこはあまりに書が多いため十分に行はれもしなかつた。爾來支那で文字は簡略になり世の變ると共に諸種の社會で、略字が勢力を得つゝあることは歴史上の事實である。それにも係らず、今日日本の字形



の標準（普通の社會に於ける標準）となれる印刷活字の書は、依然數百年來の素とのまゝで未だ「圓」の字「實」の字「萬」の字などに對して、其の略字がありながら其の略體の活字は、一般に殆んど用ひられて居ない。漸く世間に出た「漢字要覽」と拙者「漢字音の系統」とに、その略字の幾分が見え初めた位である。此の側は文部省でも更に大に調査しなければいけない。

難澁な從來の字書が自然の淘汰によりて、簡易なものに改まつて行くことをば、これを文字の墮落 degeneration などと見る人々は別として、吾人は少しく世態の變遷と大勢の上とから見て、且つ又、文字の歴史と現在の状態の上より見て、かゝる略字が舊來の難字と入り代らんことを推定するのである。果して將來かくの如き氣運に至る時は今迄のまゝの活字では、先きの世の實際と合はなくなるに相違ない。寧ろ行く行くは活字の方からも漸次、然るべきもの丈は次第に改めて行く方針を取るべきではなからうか。これは實際の側からの觀かたである。若し學者の研究の立ち場から云ふならば、無論外に主張する理屈もどつさりあるに違ひないが自分は主に社會と教育の方面からかやうに觀るのである。

## 二 實際と學理

社會實際の趨勢に適合せしむる爲めにとて、一も二もなく、今の社會を標準に取つて、漢字をきめて行くことは、學理上に照らして符合するや否や、左に少しく之について論じて見たいと思ふ。

漢字本來からの特質は、云ふまでもなく、象形義字である。それ故漢字其のものの上から云ふ時は、其の字形が繁雜にならうがなるまいが、與り關するところでない。單簡に失して意義のわかりにくいよりも、難澁であつても、そのよくわかる方が、遙かによき文字であるとせられて居た。古代に出來た當時の漢字は大抵かゝる類の繁雜な形を有して居た。今日の形では見られない字であるが、例へば、集の字の如き佳ツル（鳥）の字を三つ、品の字成なりに木の字の上に書き、これで最初アツマルの義が表はされて居た。即ち樹上に鳥の群集するの意が、初めの義であつた。然るにその後世の形では「佳」の字三つのうち二つが省略されて、今は唯一つだけを形身に殘してそれで「集」の字となして居る。而かも之には素とのまゝの意味が幾分傳へられ、今では鳥の群集に限らず、一般のアツマリにも用ひられて居る。此の「集」の字は僅かその一例に過ぎないが、大抵の漢字はその過去の歴史に遡つて見ると、多くはかやうに比較的面倒な書を有して居る。唯、それが一般の人々に知られて居ないと云ふまでである。今日の活字のうちには此の點より見てかなり古形に叶へるものもあるが、併し又、さうでなく新式の書のものも随分ある。兎もかくも、過去に於ける漢字が、難より易に向へることは争はれぬ事實である。

然るにかゝる變遷のあつた間に、又少なからぬ形の上の混同が起つて居る。一時やかましく云つて居た月の三體の書きわけの如きも、古代の所を云へば、舟の字から來た月（朕前勝の月）とか、肉の



字から來た月（胸肝胃の月）とか、又本統の月からの月（有明の月）とかのやうに、それぞれ、素とは別の起源から出て居たものがある。然るに今日ではかやうな區別を一々自覺して書きわけようとする人さへもなくなつてしまつた。

學術上から嚴重に云へば、大變やかましい區別のあるものであつても、實際の世間では、大抵一樣に見てしまひ、多くは混同してしまふのが一般の傾向である。併しこは無理のないことで、きつく咎めることは出來ない。寧ろ或る程度までは自然の成り行きにまかせて置かなければならぬと思ふ。

かくの如く難を捨てて易につき、些少の類似を求めて、同一視して行くと云ふ傾向は古今の漢字現象の上に没す可からざる事實である。これは實際社會が、常に取る傾向であつて、同時に又文字學上の理法と見るべきものである。此の觀かたが誤つて居ないとするならば、今後『鐵』の字が金偏に失の字となり、『辭』の字『亂』の字が共に、舌偏の文字となり、『佛』の字が人偏にムの字となると云ふやうな字が、一般の正字として最早や認めらるゝに至るべく、將來の活字も、亦かゝる新活字を許容して行かなければならぬと思はれる。併し此れと同様に、正しい方の素との活字を如何に處置すべきか、即ち併用すべきか、漸次取り代ふ可きか。そこらは讀者識者の判斷にまかせて置く。

### 三 漢字に系統の存すること

漢字は上述のやうに古今の間に、省略せられた形もあれば、又混同せられた形もある。よく漢字の過去に遡つてその歴史を辿つて見れば、頗る複雑なる徑路を取つて居ることがわかる。前節に、省略、混同のことを述べたのは、唯單にその字形の上の變遷に就いて觀察しただけである。然るに古今の漢字の變遷は字形以外に於いて、尙音の方面の變化がある。これは形の方よりも更らに、遙かに必要な點である。以上形及び音の方面の外に尙又漢字の意義の方面にも頗る悔る可からざる變化がある。かやうに漢字は音、形、意義の三方面に於いて、變化に變化をかさねて來て、以つて今日に至つて居るのである。

かゝる三方面の變化は其の執れも皆、極めて自由に、又勝手に變化して居るやうに見える。とても整然たる秩序などの存して居るとは思はれないやうである。けれどもその實決して無秩序のものではない。立派に一定の順序と系統は整然として伏在して居るのである。少くとも過去の歴史は整然たる徑路を取つて進んで來て居るのである。思ふに漢字の整理は先ず此の方面から之を系統的に調査することを以つて出發點としなければならぬ。否この點の注意は之が整理上の得策とするところである。左に其の音、形、義の三方面にわたり、その各の系統に就いて單簡に述べて見よう。

#### イ 音の系統

凡そ漢字は、極めて少數のものを除き大抵は音を出す部分を、其の構成のうちに現はして居る。



例へば、俛、悵、帳、脹、漲、

などがなせテヨオ（支那音チャン）の音を出して居るかト云へば勿論云はずとも其の各が長ト云ふ音符號を有して居るからであると云はれる。かやうに音符を見出し得る漢字は、全體の使用漢字五千三百中、十分の九以上を占めて居る。然るにかゝる音符の同一なるものを含みながら、事實の上では一樣の同音を出して居ないものが随分ある。例へば『途』の字と『叙』の字の如き同一の『余』を有して居ながら、其の音は大いに違つて居る。又『遁』の字と『楯』の字は同一の『盾』を有して居て、而かもその音は全く別である。かやうに音の上に少なからぬ相違が現はれて居るけれども併しその間争ふことの出来ぬ順序が存して居る。即ち上例で云へば、

ト ト音が ショ jo となる

トン ton 音が ジン jun となる

と云ふやうに、Tの音がJ（普通はSh）にうつるのである。湯と場との間にも此の關係が辿られる。かゝる秩序は一つの系統をなして多くの規則となつて伏在し幾千萬の漢字音を支配して居るのである。上のTJの規則と相併立す可きものは尙十計りもあつて、孰れも字音變化の原則となつて居る。上例の『盾』の音ジュンはトンの音から變じて來たジュンの音である。又『余』の音ヨはトからジョとなり、それが再轉してヨとなつたものである。即ち共にTの音の系統を引いて居るのであつて、

これは支那の言語學上、動かすことの出来ない法則に支配されて居るものであると考へられる。多くの漢字の音はまぢまぢで、散漫、出鱈目のやうに見られるかも知れぬが決してさうでない。學術上から見て、動かすことの出来ない、一定の秩序と系統とはその間に充ち満ちて認められるのである。

#### ロ 形の系統

漢字の間にその音の系統が自ら存して居るやうに、又形に於いても或る系統が認められる。古代に派つてその形の古いところを比較して見ると、

例へば 目 → 見 → 視（見は義の符號、示は音の符號）

であつて、即ち此の『視』の字の傍の『見』の字は更らに目の字と人の字とで出來、その目の字は最初、人間の目を横に書いて居たものである。形の上にはかやうな連絡が存して居る。尙、他の例で云へば『酒』の字、『樽』の字に共通せる『酉』の字の如きは、素と酒を容れる器物であつたと云ふことである。一々かやうにその起源及び沿革をしらべて見ると、大抵なものは其の系統が見出されるのである。『門』の字なども、始めは『戶』の字を二つ左右から向ひ合せて並べた形に起つて居るものである。（九七頁參照）

今から二三千年以前の支那古代の材料によつて、此の種のことを一々調べて見ると、種々の珍らしき發見があつてそれによると、如何に漢字相互間に存する形の上の系統關係の密なるかがわかつて來



る。併し此の側の研究は、音の例の研究に劣らぬ程のむづかしさを感じるものである。唯茲には手掛りとして漢字の形相互の間に系統關係の存せるものなることを云つたまでである。

#### ハ 意義の系統

以上述べたるものの外或る漢字には、假令其の字が全然別の字であつても、相互の間に争はれぬ關係のあることがある。それは意義の上の關係であつて、互に密接なる連絡を有して居る。固よりこれ等は半面に於いて、又音の方面とも連絡をして居るのであるが、つまり言葉として互に關係の有るものであつて、文字の異同如何は問はない見かたである。

例へば、怪(クワイ)の字と 魁(クワイ)の字

の如きはその好例である。今日に於ける兩者の意味は幾分違つて來て居ても、素とは意義及び音共に同一の言葉に屬して居たものである。假令文字は別であらうとも、それには構はないで、かやうな意味の方から連絡を求めて行くこと。此の見かたによつて多くの漢字を種々の群の系統の下に秩序立てて行くことが出来るのである。

以上イロハに別つて述べた漢字の系統は、漢字觀察の重要な部分である。今學術上の立ち場をばなれ、實際上の側から、その最も卑近なものに就いて、而かも少々ばかりの數を、世間がとやかうと議論して居たことは、おこがましいことなんである。今からは秩序もなく機械的に苦しく箇々の漢字を見ることは避けて、一字を覺ゆる時は他の之と同じ系統に屬するものは互に連絡して覺えられるやうにすること。これが學ぶ上に最も結果のある方法ではあるまいかと思ふ。吾人は漢字問題の議論がいつまでも字數のことをやかましく云つて居る間は、未だ觀察方法の宜しきを得ない爲めの反照であると云つても過言でなからうと思はれる。

#### 四 俗字と略字との許容

前節に述べた漢字に系統の存すると云ふことは、漢字を觀察する上の觀方であるが、之は覺える上、又は之を研究する上に、亦重要な手掛りとなれるものである。然るに漢字は其の發達の路筋に於いて、世間から淘汰せられ、而して用の少なきものは、次第に忘れられて行き、用の繁きものは益用ひ慣らされる。そのうち殊に頻繁なるものは、更らにその本字から別に略字を發達させる。略字の外に又俗字と云つて、本統の楷書でもなく、略字でもない一種の通俗の別體のものが生ずる。

一體俗字とは如何なる場合に生ずるものであるかと云ふに、多くは、素との字畫が十分に知られて居ない時に起るものである。而してその際、その文字の意味の方から或は音の方から時としては又、形の似寄りからしてよい加減の細工を加へたものが出来るのである。然るに其れが多くは一般世俗に通じて、随分廣く行はれるに至る。こゝに於いて俗字が正字を凌ぐに至るのである。



例へば「團碁」の碁の字を碁(俗字)とするもの、

「翻譯」の翻の字を翻(俗字)とするもの、

がある。これは、孰れも意味の方から生じた俗字である。即ち前者は碁石を用ふるより「其」の字の下に石を書き、後者は羽の軽くて飛び易きより「羽」の代りに「飛」の字の旁を書く。「碁」「翻」共に俗字である。尙「邪」の字の代りに、耳偏の「耶」の字を書くも亦俗字である。又「土」の字を書くに、あとで一點を打つのも一種の洒落ではあるが、又俗字たるを失はない。かやうに各の字についてかゝる穿鑿をして来ると、大抵の字には、俗字が伴つて居る。太鼓の鼓の字を人によりては皮の字の旁に書くものがあるが、これは隋唐頃から既にあつた誤りである。が、頗る面白い俗字と思はれる。次ぎに略字の方のものに就いて云ふに、此れは既に、一寸と述べて置いたやうに、一般社會から、よほど重宝がられて居る文字である。

例へば、「禮儀」の禮の字を亂とするもの、

「負擔」の擔の字を担とするもの、

「亂暴」の亂の字を乱とするもの、

などその好例である。既に擧げた「臺灣」の灣の字の略字「灣」の如きも、茲に考へ併す可きものである。此の類のものは俗字の數に劣らぬ程たくさんある。今日の如き正しき活字の一方に行はれて居るにも拘らず、他方に於いては盛に此の種の略字が発生して來て居るのである。普通の商人で「圓、錢」をその通りこまごまと書くものは殆んど居ないと云ふ事實に照して見ても、如何に簡略文字が實用に適合して居るかがわかるであらう。

略字の生成に就いては、又同音のものうちで、劃の少ないものに代へることがあり。(擔の字の略字)。又意義の上で、同義のものうち書のない方にものに代用することがある(辭の字の略字に舌偏を用ふる如く)。その他運筆の上で省略の行はるることもある。その徑路には色々の差別はあらうとも其の結果は必ず簡單な字形になるのである。我が國の假字が本字より脱化したる如きも此の一例である。誰れかこの略字の便利を認めないものがあるであらうか。

以上は俗字と略字の發生を別々に區別して論じたものであるが、時としては、又俗字にして同時に略字たることを兼ねたるものもある。寶の字の別體が冠の下に唯の玉の字(古文では缶の字)のみ書かれて居るが如き其の一例である。

要するに俗字略字には種々様々のものがあるが、孰れも今後の漢字問題をまじめに熟考する上に大いに攷究すべき重大なる點であると斷言しては、からぬのである。尙本節に聯關した實例は本篇二十二及び二十三の兩章を參照せよ。



## 五 新文字發生の氣運

文字は一般社會の共同產物であり且つ又共同に使用して居るものであるから、一般社會の文化の様態次第、如何やうになりとも、其の命運は支配せられて行くものである。故に文字はその社會の鏡面の如きものとして觀ることが出来る。既に醫學上の研究が往年漢字に及ぼした影響は、『腺』『臍』『隆』の新字にその結果を現はし、又外國西洋諸國と接觸せし結果は『弗』(フ)、『亨』(ヘン)、其の他、哩、漚の如きものを生じ、又近くは人力車の三字を打つて一丸となし『俚』の新字を生ずるに至つたやうな現象がある。

今日新文字發生の趨勢は大略かくの如き状態である。知らず、人造石の三字が『佑』の一字にまとめられ、電氣は『氫』に、電話は『訕』に、株式は『弑』にまとめられるべしと云ふ新案の如きも遠からずして、或は實現の氣運に際會することがあるかも知れないと思はれる。併し茲に注意すべきは、かゝる新字の發生が唯單なる形の上のみの符牒たらしめるだけであるならば、いざしらず、苟くも、從來の多くの漢字式に一級音主義でとほして行かうとする時には、或はその音讀の上に多少不調和を來すが如きことが起りはしないか。それとも、其の不調和に打ち勝つ勢を以つて社會が之を是認し、之を運用するに至る時期が來れば、又之に就いて、何とも云へないのである。

要は今日の時勢と社會の状態、並びに學術上の進歩の結果は、絶えず此の文字の上に、新曙光を放つて居る。吾人はその必要に應ずるだけの新漢字が發生して來ることを許容する上には略字、俗字と同様の取扱ひ審査を致さなければならぬ。これは必しも敢て辯を好んで言ふわけでないのである。

## 六 結 論

上述の如く、漢字を學術上の方面、及び社會上の方面から觀て、今漢字問題の氣運を察するに、今日之が解釋を云々するなどは固より未だ早すぎることで、尙十分に調査すべき事項が山の如く積もつて居る。漢字そのものに就いて云つて見ても、其の過去と現在の模様をしらべ揚げなければならぬは無論であるが、それと同時に漢字と社會が是れ迄如何なる關係を保つて、其の徑路を取つて來たものであるかと云ふ社會學上の研究が要ると思ふ。この側の調査が出來たならば之を基礎として、更に將來に於ける社會と、漢字との關係が推察せられるわけである。自分の上に縷々述べ來つた研究法を前提として、次ぎの如き推斷臆測を立てることが出来るであらうと思ふ。即ち、將來の漢字に就いて、

- 一、字數は多く見積つて四千と五千の間にて用を辨じ得ること。
- 二、畫の繁雜なる漢字は使用上、俗字と略字とを以て漸次取りかへられること。



三、活字のうちに俗字と略字を容れるべきこと。

但しその略字、俗字は共に社會一般に通用し得る迄に認められたものに限るとす可きこと。

四、舊來の文字の類推よりして生じたる新字はなるべく之を認め、その一般に通用するに至らば之を正字として許容して行くべきこと。尙之を活字のうちに加ふ可きことは略字、俗字の場合と同様。

五、調査事業としては、漢字を系統的に秩序を追うて、まらべて行くこと、尙之が應用として社會上、教育上の問題を併せて考察すること。

六、調査上の特別の機關設備をなす可きこと。

以上の諸項は察するに、實際問題として將來起るべき現象の主なるものである。吾人は慎重なる態度をとつて、名義上の政治家に訴ふる手段はとらず、極めて眞面目に此れ等重大なる問題を攷究しなければならぬのである。終りに臨んで一言す。漢字なるものは古來絶えず、新陳代謝して、常に新生命を有し、其の形に於いて、音に於いて、又其の意味に於いて、發達に發達を重ねて世運と共に大々的發展をなしつつある一種の有機體系のものであると云ふことを。

## 第十一章 文字のゑるべ

凡そ少年少女の雑誌につかはれて居る文字の数は幾何位あるか精しく調べたことはないのであるが、恐らく二千より少くはないやうであります。少し程度の高い雑誌であれば三四千の文字は屹度つかはれて居るのであります。又實際世間一般につかはれて居るものも三、四千より少ないことはありません。誠に文字と云ふものは一々覚えて行くには際限のないものであります。それで先づ手近いところから面白い趣味のある字を取り出して讀者と共に研究して見たいと思ふ。

### 一 婦人の婦の字

婦の字の意味は特に申すまでのことありませんから、省いて置いて此の文字の組み立てに就いて平易に説明致しましょう。

婦の字は、女偏に、帚の字の旁が書かれてありますが、此の旁は、素と、箒草に關係のあるもので、其の箒草の繪に象どつたもので、其の箒草と云ふは、上古、婦人たるものの取るべきものとせられて居たのであります。その文字は、素と、女偏を右の旁にして、次ぎのやうに、書いて居りましたもの



婦の字  
其の一

もありません。がまた、今の楷書通りに、女偏にして、書かれて居るものもあります。孰れにしても女と云ふものは、手に箒を取る可き風習であつたと云ふことが、此れで推察が出来るのであります。

其の二

此の文字の構造は考へかたに依つては、今日の所謂家庭に適用して、多少戒めになることと思ひます。女と箒即ち灑掃と云ふことは古くから離れることの出来ない関係があるのであります。此の意味で出来て居る文字には尙次ぎの如き文字もあり。かたがた以つて一層、女の本分が明かにわかるのであります。

### 二 夫妻の妻の字

妻の字

妻の字は云ふまでもなく、婦の字と讀みかたは違つて居ります。けれども其の字の組み立てから申しますと矢張り灑掃の意味が含まれてゐます。

今妻の字の古い形を申しますと茲に擧げたやうなむづかしい形になつて居ります。けれども之を解剖致しますならばこゝに掲げたやうに三つに分れ

妻の字の上部

ます。一番上の形は艸の字を半分丈け畫いたもので、何れ箒艸か何か掃除用になる草の莖と見えます。中の形は手で物を握る時のかたちを畫いたもので、五本の指を三本だけ書いたものであります。此の二つを合して、それで手に箒艸を握つた形になるので、此れが女の役目であるところからしてその下に女の字を附けて、茲に妻の字が出来たわけであります。

かやうに、妻の字は婦の字と同様な意味合ひでその構造が出来て居りますが、妻の字の方が一層よく組み立てられて居ります。之によりますと、人の妻たるものは箒を手にして居る可きものと見えます。

### 三 稼娶の娶の字

娶の字はメトルと讀み、前の婦の字とか、妻の字などとは少し意味がちがひますが、矢張り面白く組み立てられて居ります。

娶の字

娶の字は解剖すると取の字と女の字になります。女を取ると云ふ二字を一字にまとめたものであります。一種の文章とも見られます。取の字にトル意味のあるのは茲に示してあるやうにヨの字が之にふくまれ、ヨ即ち手で、手は物を取る



義でありますから、自然取と女とでメトルの意になるのであります。造字の法は如何にも面白く出来て居るものであります。

尙之に聯關して一つ面白い古代の風習の推察せられる文字がありますから、序に之を述べて置きます。

#### 四 婚禮の婚の字

婚の字は誰れも知つて居る通りコンと読み、ヨメイリの義であります。此れを分解すると女の字と昏とになる。昏は此の文字の讀みかたのゑるしでありますが、なぜコンと云ふ音に此の昏の字が書かれて居るかと云ふと、此れは外ではありませぬ。古代の風習として、婦人を娶るには晝の日中にはせずして、普通は、たそがれの時で、ひぐれを選んで居たものであります。昏は丁度その日暮と云ふ意味のある文字ですから、茲に用ひられて居るわけであります。

かやうに婚の字にはよく視るとそのうちに嫁入りの時刻のことが示されて居るのであります。

#### 五 子供の子の字

子供の子の字とか、また好の字などの旁にある子の字とか、總べて子の字に書かれて居るものは形

は素とやはり、子供の形に似せて畫かれてゐたものであります。中には手をさし上げたものや、又頭髪のかたちを書き添へて居るものもあります。即ち、その二三の例をあげると、古いところでは大抵次に示す、



子の字 其の一



其の二



其の三



其の四



其の五

の如きものがあります。かやうな工合に宛かも蝌蚪のやうなかたちに書かれて居たものがだんだんとうつり變つて遂に今日見るやうな四角張つた子の字になつたものであります。或は楷書でかくよりも行書か草書で亂れ書きにいたす方が素の形に近いやうなわけであります。

大凡そ文字の出来る其の出来かたには色々方法があるものであつて、古來六つの方法から造字されるものであると云ふやうに云はれて居りますが、その大元となるものは大抵かやうに其の形にかたどつて畫かれた繪が最初に立つて居るのであります。

それから又既に擧げた婦の字、妻の字のやうな面白い組み合わせで出来て居るものもあります。又婚の字とか、娶の字のやうに音と意味と半分半分が出来て居るものもあるものであります。

文字を観るには色々觀方があつて、見やうに依つては如何程でもむづかしくなり、又いくらでもや



さしくなるものでありますが、まづさしあたり、不斷に必要な文字の方から、次第に進んで行つて、その間に自らその文字の深い面白い興味を感じ趣味を養ふと云ふことは、今日多少心ある人々の申されて居るところであります。

併し文字の面白味は獨り漢字に限つたわけではありません。假字でも、ローマ字でもそれぞれ特有の興味があります。唯其のうちでも嗜めばかむ程味の出るものは此の漢字の構造でありますし、又それが世間に存外知られて居ない爲め、二三の卑近な例を採つて参考までに其の趣味を御話し申したのに過ぎないのであります。近頃文字談がだいぶん流行してまゐりましたのに就いて讀者の思ひだしたねにもと思つてかやうな例をあげておきました。

幸ひ紙の餘白があるから尙一つ二つの例を添へて置きます。今日「保養」とか「養老」とか云ふ「養」の字。これはもと羊に食物を供へてやる意味で、羊の字と食とを合して作つた文字であります。古人は養を供養の義に解いて居ますが、全く羊が素となのであります。一方に羊の字は又音の符號にもなつて居て、養にヤウの音を出させて居るのであります。其の他「群集」の「群」の字なども素とは羊のたくさんむれ居ることから出來た文字で、其の爲めに羊の字が含んで居るのであります。上古文字の出來た頃に牧畜が行はれて居たためかやうに養の字や、群の字が生れたものと見えます。今の用ひざまと違つて文字はみな始めは面白く出來て居るものであります。

## 第十二章 漢字談叢

### 一 協會の協の字に就いて

吾人は今茲に東洋協會の字に就いて、及び其の語源に就いて、日頃自分の考へて居ることの一端を述べて見よう。

元來、東洋協會と云ふ語の讀み方は、云ふまでもなく日本、朝鮮、支那、それぞれ其の讀み様が違つて居るので、即ち、今日では、

日本讀み	トオ・ヨオ・キヨオ・クワイ
朝鮮讀み	トオヨウ
支那讀み	Tung yang hsié hui

と發音する。而してそのうちでいま協の字に就いて見るに、

協の現音は	日本	キヨオ	Kyō
	朝鮮	hyōp	
	支那	hsie	(臺灣音は hiap)



である。吾人は茲に其の協と云ふ語の起源をさぐる前に、此の文字の成り立ちを少しく見て置かう。協の字は、輒近に至つて盛に用ひられる文字の一つで、『協約』『協力』『協立』『協會』等の熟字は、殆んど毎日のやうに、新聞雜誌上に見られて居る。併し、新聞雜誌は活字を用ひる爲め、此の字の變態は比較的少ない。けれども、市内各所に掲げてある看板の文字に就いて見ると、随分まちまちになつて居る。一々、茲にその誤謬は擧げないが、素と協の字は、十の字の偏に、力を三つ書いたものである。其の古字は、遠く漢の時代に見ることが出来る。即ちその證據は次ぎの文字の示す通りの構造である。

漢協律都

尉印金索

ある。

さて、此の構造がなぜあるかと云ふことに就いては説文に單簡な説明が出て居る。即ち同書卷十三下に

協——は衆之同和也从劦十聲

とある。此の从は從の字と同字で、聲とは猶音と云ふが如きものである。つまり協の字の音は、十の字の古音に相當し、其の意義は、劦即ち人力を三つ合同するの意である義から構成されたものである。此れだけでは音義共に未だ明瞭でなく、痒いところに手が届いて居ない。依つて今少しく之に自分の考を加へて見よう。

支那の上代では、宛かも今日南洋又は亞非利加の未開人などが、數の三つを以つて、物の多數と云

ふ語の代用として居るやうに、古代の支那人も亦物を三つ集めて『多數合同』の觀念として居た。常に三と云ふ語を口癖のやうにして居た。文字の構成上から見ても、例へば磊の字、崑の字、森の字、素とは佳を木の字の上に、三つ書いて居たと云ふやうな例もある位である。それでこそ『集』の字に『あつまる』義が残つて居るのである。尤も稀に外見上、四つ書かれて居るやうな文字もないではない。器の字、羸の字の口の如きは其の一例である。併し素と此れは𠄎(音クワンにて義カマビスシ)の字が二つ並べられたものであつて、決して、始めから四つ並べるつもりで書かれたものではない。

かやうに見て來ると、古人が力の字を三つ書いて協の字の旁として居たのは、確かに多へ數が互に力を合同するの義に基づいて居るものと思はれる。力の字三つの謂はれは大略かやうであるが、次ぎに然らば、協の字に何故キョオ即ち朝鮮のヒョツプ支那のシエの音が付て居るのであるか、又日本の歴史的假字遣ひでは協はケフの音で讀まれて居る。此れは素とケツプのケフ音の轉訛したものである。なぜかゝる音で此れが呼ばれて居るか、今此の音の側の觀察に這入つて見よう。

説文に協は、十の字の音に依つて、其の音が出されて居るやうに説いて居るが、此れは餘りに漠として居る。自分の見るところでは、十の字のものに未だ、ケツプ kep とか、ヒョツプ hyöp とか云ふ音の出で居る材料は見出さない。東洋の音韻史上で、日本の十の字の古音は如何なる音に派り得るか。



十の音ジユウは素とシフの假字使ひもある位で、現に朝鮮では、

十の音は *sh* *shp*

である。支那でも、十の音は *shih* であつて、シの音を頭に有して居る。支那に十を *shih* と讀むから、上述の協を今 *hsie* と讀むと云ふのでは素とよりない。十と協との音韻關係は、今日全く別物として考へられなければならない。今の北京音の十 *shih* は其の古音と著しく違つて居る。然らば古音の側から見ると如何と云ふに、

十の字の古音は *tap*

である。此の *tap* 音は *kep*, *hyöp* と關係があるかどうかと云ふに、音韻の上で確かに關係が認められると思ふ。即ち、

古音 } 十の音 *tap*  
協の音 *kep*, *hyöp*

は音韻上で、たしかに類似した點があるのである。争はれぬ聯絡が存して居る。

單に音の上ばかりでなく、言葉としての其の素との意味を見るに、協に集合協力の意があると同じやうに、十の字にも、合し交はる、又は交錯する義が含まれて居る。つまり、十は錠カヌガヒ又は蝶交ひの如き義を有して、かやうな言葉を凡べて古代には *tap* と云つて居た。今も安南方面に此の語が残つて居

ると云ふことである。十の字にせよ、協の字にせよ、其の音に多少の違ひはあつても、其の義に於ては殆んど全く同様である。

其れ故に、協の字は一面から見れば、十と協とが其の意義の關係で、共に組合されたものである。所謂會意文字である。然るに他の一面から之を見れば其の音符を含んだ文字である。所謂諧聲文字と云ふものである。畢竟するに協の字は、大勢の共同した力を十の字の錠で引き緊めたやうな譯に出來て居る文字である。之を稱してキョオ即ちケフ（本音 *kyō*）と云ふのである。キョオは猶他の語で云へば、ゴオ即ちカフ（合の音）と云ふが如きもので、合の本音は *kyō* 協の本音 *kyō* と言語上の關係が密接である。否文字は違つて居ても、語としては全然同一である。それ故に、

協は合也、

と云ふことが出来る。故に協會は力を合同する會の義である。説文に協は衆之和同也とある記述に就いては自分は以上の如くに考へられると思ふ。

けれども説文に協の字が从劦十聲とある點は、此れでも説明がつかぬではないが、寧ろ反對に从十劦聲として改むべきもののやうに思はれる。而かも猶『協』が會意で諧聲を兼ねたものであると云ふ點はかはらない。

以上は十の字を偏とした協の字の説明である。然るに世間には又協の字に似たもので、立心偏の



「協」の字を書くものがある。即ち「協會」「協約」などの活字がある。一説に之を誤りとするものもあるが、此の協は随分古くから見えて居る。

協

吳禪國山碑

説文に之を解して協は心和也从劦从心劦亦聲とある。後世の支那人の考では「協」は素と協の字に更に立心偏の付いたもので後にその中間の十の字が省かれたものとして居る。この説は信を置くに足りない。自分は「協」の字に就いて、かう考へる。即ち、

協の字は、其の旁の劦が必しも力の合同と云ふ意味で用ひられて居るのでなく、唯單に物の合同すると云ふ廣義の意が、主になり、それに心偏を付けて心を合はすの義から構成されたものであらうと思ふ。而して劦はキョオ即ちケフの音を有するから協が又其の音で讀まれて居るのである。それ故音義（臺灣では協は hiap 協は kiap）共に兩者大差はない。唯力に關するものと心に關するとの區別があるまでである。併し協會そのものの性質からすると十の字の偏を書く方が原義に叶つては居ないかと自分は考へるのである。

因みに云ふ協會の協の字を屢々刀三つの旁に書くものがあるが以上に述べたところに依ればそれが誤りであるか否かは直に判断が出来る。併し刀三つの方のものは近來の新俗字としてならば認められる價值を有して居るものであると云ふことだけ付け加へて置く。

## 二 協會の會の字に就いて

前節には、協會の協の字に就いて、其の構造、並びに其の字の語源を略言した。が、次ぎには、茲に「會」の字の方に就いて、少しくその構造、音韻、語源に就いて自分の卑見を述べて見ようと思ふ。

### 一、會の字の構造

會の字が、近來のやうに、頻繁に用ひられることは、是れ迄恐らくなかつたであらう、其の使用の頻繁なだけ、それだけ又、其の書き方が、まちまちのやうである。自分は併し茲に、一千年も二千年も以前の古體の形を復活させて行はしめようと勉むるのでは無論ない。が、唯其の古代の形が、如何なる鹽梅に構成されて居たが、其の點を先づ窺つて見たいと思ふ。古代の吉金文碑文などに依ると、「會」の字は、此くの如くに見えて居る。此れは、今から一千八百年前、即ち後漢の當時に現れた文字學者許慎の説によると、その構造はこう説明されて居る。「會」は素と二つの文字より成り、即ち亼の字と、會の字との二字が合して出来、而してその會は一部分省略せられて、それと亼とで、結局、會の字が出来たものなりと説いて居る。

會

會の字  
の篆書

併し自分の見る所では會の字に未だ會の字を含んで居た證據は見ない。之に反して更に一層古い形



# 會

古文會の字

字は△の字と日又は口が主となつて出来た文字である。△は合の字、論の字、倫の字、今の字などの一部分に見られる通り、すべて物の集

合する義を有し、而して曰、又は、口は云ふまでもなく、語り談ずるの義である。其れ故此の兩部分にて已に會談の義が含まれて居る。次ぎに然らば、會の字の中間にある四角のものは、何を意味するかと云ふに、これはその象形に派つて見ると、意の義であることが、十分察せられる。尙、

意の字、黒の字、關の字、

などに於ける四角の部分もこれ亦會の字の中央部分と同様に窓の象形から出て居るものである。其れ故會の字は其の構造上から云ふと其の意義は衆人の意近く相集りて玆に談合せるの狀をうつしたものである。

## 二、會の字の音韻

會の字の音は、今日の東京俗音ではカイ *kai* と云つて居るが、關西地方では矢張りクワイ即ち *kwai* と發音して居る。日本の漢音は云ふまでもなくクワイの音である。吳音では之をエ *we* と發音する(會釋エシヤク)など云ふが、此のエの音は實際の古音ではなくて、江南地方の訛音である。

會の支那北京音は、*hui* である。「出来ない」ことを「不會」*pu hui* などと云ふ此の時の *hui* の

發音は即ち會の字の音である。此の *hui* の音の語頭に立つ *ㄨ* の音は、これ極めて消滅し易い性質を持つて居る。日本の方言にてもア *ri* マ *hen* をア *ri* マ *en* と訛ることがある。此の *hen* *hen* と *en* *en* とは、丁度 *ㄨ* の消滅如何によれるものである。以つて、如何に *ㄨ* の音の不安定なるかが察せられる。ヒンドをインド(印度)と訛るも、矢張り此の例に洩れない。

而して支那に於いては此の *hui* なる音は、素と *kui*、又は *kuai* などの *ㄨ* の語頭音を有して居たことがあり、又日本などに之が傳はる時には、自らそれが *ㄨ* に聞き取られ、或は全く落されてきゝとられた。その爲めにつまり、會の音の *hui* がクワイ *kwai* とも (*hui* *ㄨ* ともなりて日本で知られて居る。これは行の字の音 *hang* が *ㄨ* オ (*kang*) とも、ア *n* (*ang* 行燈、行脚) ともなつて傳はつて居るのと同じわけである。臺灣では會の音は矢張り普通にホ *hoe* の音である。

かやうに音韻上は、まちまちになつて居るが大體は *hui* の音のうちにまとめることが出来る。次ぎに然らば此の *hui* と云ふ音は、文字の關係を全く離れて、言葉そのものの立ち場からすると如何なる意義がこもつて居るか。此れを観察するには、語源の上から調査しなければならぬ。

## 三、會の字の語源

會の音 *hui* を語源の上より見る時は、大略次ぎの如き意味がおぼろげながら窺はれる。即ち *hui* の音は先づ多少づゝ變じて類似の音となり、*hui*, *kuai*, *wei* *we*. の音となりてその意味は、



廻りまはる義、又は集り渦くの義

が何れにも共通に存して居るやうに思はれる。例へば、

回 hui 滙 hui (又は wai)

徊 hui 團 wei

隈 wei 媚 wei

尾 wei 葳 wei

渦 wo

の如く、つまり、回る、又は集まるの義がその根本觀念となつて居るのである。これは全く會の字の構造に拘泥しないで、専らその言葉の方から見たのである。それ故、語源上よりすれば、會の字も、

回

回(回)の字も、字面こそ違へ、意義に於いては何等の差はなかつたものと、云ひ得られるのである。吾人は回(回)の字の古體が渦卷きの形をして居るのを見ても、其の hui と云ふ語の起源が那邊にあつたか、又従つて會の字の原義が如何なる意味なりしか、察するに

難くないと思ふ。

以上、會の字に就いて其の構造、音韻、並びに語源の大體を述べた。是れによりて見ると協會の會は其の意義に於いて協の字とやゝ異なる點が見出される。即ち協は衆人同體となりて専ら一致協力す

るの義で、之をキョオ (kyo) と云ひ、會は一堂の下に孰れも相會合して懇談するの義がある。之をクワイ (kui) と云ふのである。つまり協會は團體として内に結合するの義が籠つて居る。されば我が東洋協會は、東洋の活舞臺に健全なる團體として一致協力會談すると云ふが抑もの本義に近いわけであるやうに思はれる。(東洋時報舊稿)

### 三 會頭の頭の字

「頭」の字は今日最も普通に用ひられて居る漢字の一つで、其の意味はカシラ head の義で知られ、古書には頭は首也とある。頭の字の觀察には勢ひ此れを解剖して見なければならぬが、先づ此れを解剖する前に少しく其の音を見て置かう。頭の日本音はトオ古い假字使ひでトウ今の支那北平音で ton の下平、臺灣音厦門音では toio 又は tau の音である。

かゝる音が「頭」の字に存せる所以は、云ふ迄もなく頭なる言葉の音に従つて居るからである。而して其の音は明かに「頭」の字の偏なる豆偏によりて直ちに知られる。故に頭の字は分解すれば「豆」と「頁」とになり、その「豆」は唯の音符號たるに過ぎぬことになるのである。然らば一方の「頁」の字は抑もまた何か。今日では「頁」はページなる西洋語の代用語として用ひられて居る外、義は普通知られて居ないかと思はれるが、併し「頁」の原義は即ち今日の「頭」の字の義と同一であつて



説文（後漢時代の書）にも頁は頭也と見えて居る。獨り「頭」の字に限らず、顔の字、顛の字、須（ヒゲ）の字、顛の字、顛の字などに共通の「頁」の字は、みな頭の義である。更に尙ひろく調べて見ると百の字、見の字、景の字、貌の字、首の字、面の字なども、之と互にそれぞれ縁故のある象形文字である。唯そのうち今日まで生命を保つて生き残つたものと、早く死字となつたものとの差があるだけである。「頁」の字は其の楷書では此れが頭の形たることは想像しにくいけれども、之を支那上代の古器物の方に求めて見ると大きの如きものがある。即ち、



頁の字の沿革

之によつて見ると「頁」の字の古文は何か明かではないが、一種の動物見たやうなものの繪文字に起源を有し、其の目星となれる主たる部分が頭部にある故に、頭の義を特に有するに至つたものらしい。一説に之は顔也とも云ふ。而して、昔から之を呼ぶに、*ton*とか *ton*とかの音を以つて居たものであるが、其の「頁」を發音するに「豆」の字を以つて居る。「豆」の北京音は *ton* の去聲で其の臺灣音は *to* 又は *tau* である。これは頭のことをこれと同音（酷似）で呼んで居た他の例に、別に「首」の字が存するに依つて明かである。「首」は後世の音シユではわからぬが、之が古音の倂を留めて居る「道」の字、此れの本音たる *tao*（朝鮮音は *to* けれど）は即ち是れ、首の字が全く、頭



(*to*, *tau*) と同語であつたと云ふことの證據になるのである。音

の方はかりでなく、尙字形の方から申しても、「道」の字は、古代金石文に、玆に擧げたやうな形が見えて居る。頭上に毛髮の象形のあると云ふ點はやゝ異なれど、主部たる頭部そのものの形には頁も首も別に變りはないやうである。

故に頭の字の古代の音はトウ又はタウの音と思しく、而して豆偏は唯の音符で、元來は「頁」の字だけでたしかに、カシラ *head* の義が存して居たものと推定せられる。併し今日の「會頭」なる文字を「會頁」としては全く時勢に合はないことになることは申すまでもないことである。況んや「頁」の字の音はトウでなく、ケツ（又は *hiet*）の音であるから。故に寧ろ言葉としてならば、音符たる「豆」の字の方を残す方が理に叶ふわけになるのである。又此の方が周代以前の古雅な慣例にもかたふやうに思はれる。

序でながら豆の字の形に就いて觀察するに、此れは素とマメと何等の關係もない文字である。マメは素と「答」の字が其の意義で用ひられて居たので、豆の字は、上古食肉を盛る器物の象形字であつたのである。此のことは、今更事あたらしく云ふ迄もなく、古來文字學者の既に明かにして居るところである。その若し竹で造られたものには「豆」に竹冠りの添へられて居るものもある位である。此



の器物は祭祀などにも用ひられたもので俎豆の豆である。つまりタカツキの一種かと思はれる。左にその古き形の例を擧げて豆の字の最初の姿を示しておく。



豆の字の繪文字

之によつて「豆」の字は始めマメとは全く縁故のなかつた文字なることが大略窺はれるのである。

#### 四 字源上より觀たる西太后

茲には、西太后の人物論でなく、「西太后」と云ふ語に就いて、今日、世人にあまり注意せられて居ない點を少し述べて見よう。

今更ら「西」と云へる語の意味、「太后」と云へる言葉の譯などは繰り返す必要もないが、吾人は更らに其の「太后」なる語を、形の上で分解し、「太」と「后」との二つとなして、つまり「西」「太」「后」の三者の大元を搜つて見たいと思ふ。併し茲に特に述べようと思ふことは、此の三者をその文字の上に表はして、出来る丈け古い時代の意味を、字面の方から遡つて見て述べて見ようと思ふのである。

##### 一 西の字

「西」の字は、素と方角を指して居た意味ではなかつた。此の字の出來た頃は「鳥が巢の上にとま



##### 二 太の字

つて居る狀」をうつして居たものである。其の字形は茲に示す通りである。此の時代は立派な略書であつたので、此の繪文字の音は其の當時タイの音（或はダイ？）で呼んで居たと推測される。

「太」の字は素と「大」の字から出て居るもので、一説には「大」の字二字を重ね書きして居たものが「太」となり、更らに「大」となつて、遂に今日の太の字と變じたと云ふものもある。太の字は其の意味の根源に於いて「達」の字にも關係がある點などから考へて見ると、兎もかく「太」には「甚だ大」の義がある。即ち、極めて大と云ふ意を「太」とした者である。

##### 三 后の字

「后」の字は後世キサキの如く女性に用ひられて居るが、素と支那の上代では、女性でなく、男性の意で専ら用ひられて居たのである。三代の頃に既に其の例證はいくらでも見出される。此れを字源上より見ると、「一」の字と「口」の字が含まれて、其の傍に縦の曲線が一本見える。古來支那人の云ひ傳へるところでは、布令を出す君を此の文字で示したものであると云ふ。「司」の字と「后」の字とは左右、向きかたの違ふまで、字源は全く似たものである。とにかく「后」とは上古、人の上に立ちて、號令を呼ばはり居たるもの



を指した文字である。尙音の上で『后』は『侯』と同一でヨオの音であつたと思ふ。但し文字上は『后』は口に従ひ、『侯』は『矢』に従つて出来て居る。

『西』太『后』の原義綜合

以上の観かたにして大なる間違ひがないとするならば、結局西太后とは「鳥が巢の上に在つて非常な聲で號んで居ると云ふ意味になるのである。」此の支那の上代的解釋を以つて今日故『西太后』なる語の觀念と比較して考へて見ると面白く思はれる。

### 五 漢代に於ける簡略文字の一つ

支那文字の古今の状態を、種々の材料から比較して見ると、多少の例外は別として、大抵は、原形よりも簡略なる字劃に向つて發展して居る。苟も文字は其の實用上の目的に適合して行く爲めには、其の孰れの時代たるを問はず、常に繁を脱して易に就くのである。此れは文字變遷の争ふ可からざる常規である。其の意義の誤解混同を生ずる虞れのある場合とか、又は文字上の洒落などからして、まゝこれと反對の現象を見ることも、固よりないではない。まかしかゝる例外は至つて少數であつて、文字發展の全潮流は陰に、陽に、簡便なる形を取ると云ふ運命を荷負つて居るやうに思はれる。

六朝時代に既に支那の文字は著しく變化し來たつて、字畫の如きも、餘程書き易くなつて來て居る。

否當時は字畫のことなどは殆んど自由勝手に、行書流の書き方が、構はず楷書の範圍内に侵入して來て居る形迹さへ見られる。而かもそれ等が當時皆正字として認められ、且つ盛に通用せられて居たのである。その影響は更らに外國に迄も及んで、朝鮮、日本にも傳つて居る。『釋』の字の煩を厭ひて、尺の字の旁に書くことなど既に此の六朝時代に現れて居る。つまり多くは繁雜なる形を避けて易きに就かんとする傾向を示して居るのである。

然らば六朝より更らに古く溯つて漢代のものは如何と云ふに、此れ亦同様である。今その一例として、後漢の初めに現れたものに就いて其の一例を示して見よう。

例、學者の『學』の字

今から一千八百年前に出来た漢代の説文に依ると、當時『學』の字は、今日のその如く、之に別段の偏も旁も附加されないうで用ひられて居たやうである。然るに此の

は當時の通用文字と云ふまでであつて、固より當時これが完全なる文字とは思はれて居なかつたのである。このことは當時許慎が此の『學』の字を以つて次ぎに掲ぐる文字の省形也と言明して居るのでもわかる。

然らば其の基本となる素との完全な字形は如何と云ふに、それは『學』の字を偏にして、旁には『攴』の字を書いて居たのである。即ちその全形は次ぎの通りである。



學

『學』の字の原形

此の字は一見『學』の字の偏として、之に支を加へたもののやうに思はれるけれども、實際の構造は全くさうでない。寧ろ『學』の字と『支』の字とは左右相結合して離るゝ可からざる關係を有して居たものである。何となれば此の原形の文字は、その要素に解剖して見ても、わかる通り、素とは大きに示す三箇の部分から構成せられて居るのである。即ち、

數

一

教の字。二

𠄎

白の字。三

凵

𠄎の字。

である。云ふまでもなく、一は教ふるの義、二は左右の手を差し延べた形。三は蔽ふの義である。殊に第二の白は左右の手を意味する外に此の原形文字が表はす言葉の音即ち *gak* と云ふ音を示して居るのである。尤もその本音は *g* を語頭音とする。

白の音 *kak, kok, kik*

それ故に白の部分は音義兩方の役目をして居る表彰である。兎もかく以上三箇の部分が相集り、結合して *gak* の音を有するむづかしき文字を形成して居るのである。

かゝ文字構造の有様を観るときは、支の旁は離す可からざる關係を有して居ることがわかる。古形を楯に取つて、理屈を云へば、決して一方を残して、他を省略するなどは許す可からざるものである。

併しそこを省き落す點が即ち社會に於ける文字發展の順序である。言葉の方の例で云つて見ても『浦鹽斯德』と云ふ正しき多綴語を、吾人は普通に半分略して『浦鹽』と云ひ、それで而かもよく通じて誤解などは決して起らない。これと全く同じわけで、半分略されて簡易にせられたのが即ち今の『學』の字である。

かくの如く素と『學』の字の原形には教の字が含蓄せられて居た。然るに普通には又その冠りの中に含まれたる『爻』の部分を書きかへて **𠄎** となし、つまり

學

と書く。これは理屈に叶はないわけであると云つてよろしい。即ちこれは今日の通用文字であると云ふまでで、素との正字ではないのである。尙近來之を略して次ぎのやうに書くことがある。

学

又は **𠄎** 而して皆いづれも謂はれを有する略字である。これ等は皆ほかの類推 *analogy*

から生じ來たる變化である。かゝる變化は、文字發達上の自然の變化で、むしろ進歩と云ふべきである。簡略に文字が向ふと云ふことは文字の歴史的自然的傾向であつて決して卑俗視したり、排斥したりなどすべき性質のものではない。但し一般の社會から未だ認めらるゝに至らない銘々勝手の製造字は、流石に直ちに歓迎せらるべきか否か、疑問である。要は標準の眼を社會全般の上に置いて見る必要がある。

後漢時代及びその以後に現はれた文字の略形によつて吾人は更らに漢以前にも亦此の略字の現象の



あつたことを豫測し得べく、又今後の將來の文字が如何なる運命にむかふかを卜することも出来ないではないと思はれる。

### 六 黃河流域の地質一面觀

獨逸の地質學者として名高いリヒトホーフエン (Ferdinand Reichherrn von Richthofen) 氏は其の大著ヒナ (China 三卷) のうちに、支那北部黃河の流域の地質に就いて録して居る。其の第一卷ページ五六よりページ八四迄のところに記るせるところに依ると、今の山西省を中心として黃河の水城一帯の地は、黃土の地質から成り立つて居ることである。リヒトホーフエン氏は此の土質をロェー (die Löss) と云ひ其のあたりを die von Löss umgebenen Thälern と稱して居る位である。以つて如何に其の地方の黃土に富んで居るか々わかる。思ふに古名の『河』が後一般に『黃河』Huang Ho と云つて、『黃』の字の冠せらるゝに至つたのも、此の地質の爲めに原因して居るのである。

さて、我が言語學の方面から見ても Huang Ho の Huang が『黃色』を意味し其の根本に於いては假令廣大とか、光るとかの語源があるにしても、兎も角く其の『黃河』の『黃』は即ち色を指したものであることは云ふまでもない。然るに茲に又文字の研究の上よりするも、吾人はリヒトホーフエン氏の所謂黃土 (Löss) の意味と同じ觀察の結果を他の文字から見出し得るのである。左に其の文字を擧げ併せて、其の字形の歴史に就いて、少しく述べて見よう。

其の文字とは漢水の『漢』の字である。素と『漢』の字は西曆紀元前後二三世紀間にわたつて兩漢 dynasties の現はれて來て多く用ひられて居る文字である。爾來『漢』と云へば即ち其の漢時代を指すか又は支那と云ふ語の代用語となる迄に至つた。併しこは、兩漢時代以前には比較的多く用ひられなかつたのである。のみならず、假令用ひられても、詩の大雅の篇や、爾雅の釋天の部などに見えて居る通り漢は即ち天の河の義で用ひてあつた。併し此の『漢』の字が最初作られた當時の支那古代の思想は全く別で此の字の構造をよく視て見ると、寧ろ地質上の面白い一面觀が出来るやうに思ふのである。『漢』の字の構造は素と水の流れを偏として『莫』を旁として出來て居る。今左に上代の鐘鼎文に現はれたものから、其の代表的の字形を掲げて見るならば、

漢

金壺『漢』の字の古形

𣪠

齊侯罇、嘯堂、『𣪠』の字籀文

尙『漢』の同音で、『莫』を音符とせる類例を求めて見るならば『𣪠』の字がある。𣪠の字は楷書の形と古代文字の時のそれとは違つて居るので、例へば、籀文の形で申上げるならば、

がある。此の籀文の『𣪠』の字は眞の古形から土の字の省かれて居るものであるが、之を前の『漢』の字の古形に比較して見ると自ら共通部分がわかる。尤も今日の『𣪠』の字では偏と旁とが入



り違つて居るが、古代のものは、上に擧げたやうな排置になつて、出来て居るのである。  
 扱『漢』『艮』に共通の部分は即ち『奠』で、此れは素と『黄』の字と『土』の字とから出来て居る文字である。尙鐘鼎文から『黄』の字の獨立したものを調べて見ると、次のやうなものが代表字である。即ち、

**奠**

春秋時代の がある。而して黄と土とが合して一字となつたものが今日カン（實  
 『黄』の字 は han）と云つて居るものである。或は時としてタン又はナン、ダ  
 ンともなる。歎難灘などにそれが現はれて居る。何れにしてもかゝる類例から見ると、『漢』の字が音  
 符として黄土の二字から構成せられて居る文字を含んで居ることは、争はれぬ。而して自分は、此の  
 音符を以つて音の外に意義をも兼ね現はして居るものと考へる。

それ故に『漢』の字は字源上『黄土の水流』の義であると云ひ得られるであらうかと思ふ。併し漢  
 水は今の黄河のことではない。漢水は Han 水で黄河は Huang 河である。既に言語上兩者は區別し  
 て考へなければならぬ。けれども茲に、注意すべきは、黄河の黄の意味と、漢水の漢の字の起源から  
 すれば、慥かに語と字との區別こそあれ、以つて上代支那人の思想が兩場合に黄色（支那の土の色）  
 より起る水の色を主として考へて居たことは疑はれないと思ふ。かくの如く、黄河も黄色で、漢水も  
 黄色であると云ふことは、此の北部支那（山西、陝西、甘肅、河南）一面に其の地質が黄土を以つて

地殻として居ると云ふ反證になるではないか。リヒトホーフエン氏の『支那』を繕いて居るうち、一  
 寸氣の附いた點を茲に摘録して置く次第である。

序みに云ふ、詩經の大雅、雲漢の篇に、

倬彼雲漢、昭回于天、王曰於乎、何辜今之人、

とある『雲漢』は周宣王が夜天河を仰視せるところを云へるもので、勿論これは河水の轉義比喩でも  
 あらうが、又漢の音 Han, Kan に宏大の義があるから、借り用ひたもので、直接に黄土とは關係は  
 ない。併し銀河の義をはなれて字の根本を云へば、『漢』には飽くまで黄土質の義が籠つて居るのであ  
 る。

## 七 満洲の洲の字及び其の他

最近の日本の傾向は漢字が次第に一般から注意せられるやうに成つて來た。見方によつては一種の  
 流行かとも見られる程である。併し漢字其のものに就いての知識は未だ甚だ怪しく、頗る俗的の文字  
 も跋扈して居るやうである。よく字畫の事などに就いて相談をもちかけられることがあるが、未だ研  
 究が浅いので、いつも十分の斷案を下すことが出来ないで居る。

人は曰ふ、一般世間が認める字ならば正字として取扱つて然るべしだと。固より之も半面の眞理は



ある。けれども又さうばかりも行かない。半面に於いてその濫造を戒め統一をはかつて行かなければならぬことは贅言を俟たない。

露伴著『頼朝』の『頼』の字に就いて先達頃東京市中の諸書林の店廣告、新聞廣告殆んど總べて誤字ばかりを筆太に書いて居た。即ち旁を『頁』の字にして居た。これは素と『刺』の字の『リ刀』である可き字であるから必ず刀を書いて、其の下に『貝』の字とならなければならぬ。つまり『負』の字の旁であつて『頼』を書かねばならぬ文字である。それを『頁』の字のツクリにして而かも世間一般は全く平氣であつた。尤も露伴子の著述の表紙には流石に正しく『頼』と明記してあるが。幸田氏一個人の力よりも廣告の世間的力の方がたしかに社會的効力が強い。その廣告の方に盛に誤字がつかはれてあるのだからこまる。けれども此れは社會が此の誤字を是認して居ると云ふよりも、此れが誤字たることに氣附かないで居るのである。其の氣附かないで居ると云ふことは聽て此れが正字同等の資格を且有するに至る階段であると思はれる。

次には滿洲國の洲の字、又守田中佐著『滿洲地誌』の表題に見える『洲』の字は如何と云ふに、此れは今日正字である。遠く前漢の時代にも既に正字として行はれて居た文字である。けれども洲の字は別に之が基本字たる可き『州』の字から二次的に作り出された文字であることに注意しなければならぬ。

『滿洲』と三水偏の文字を二字重ねると熟字としての見かけは大層よろしい。併し今茲に理屈を申すと州の字の三水偏は全くの蛇足である。何となれば『州』の字自身で既に水の意味はあるのであるのだから。即ち古文ではたしかに、水の流に象つて作つた文字であつて川の字に關係の深い文字である。即ち州の字に含まれたる川の字そのものは素と水流の象形に出たものである。即ち、

(一)

(二)

洲の字の原形

古い時代の洲の字は皆(一)又は(二)の孰れかで書かれて居た。中間の交錯せる部分は水中可居曰州と支那人は云つて居る。つまり水の瀬の中に小島などがあつて、そのあたり河水の滙流する様を書いた文字と見える。州の古音は「*ju*」であるから、土(土)と同語なることは明かである。

かやうに『州』が素との字で『洲』の方は此れから導き出された文字である。且つその三水偏は他の三水偏の文字からの類推で附けられたものである。此れは日没の義の『莫』の字が再び『日』を加へて『暮』の字を發達させて居ると同じわけであながち誤字として排斥すべきものでない。

故に滿洲の洲の字に就いて、『州』『洲』孰れが正しいかとのやかましい議論はしなくとも唯新古孰れを採用するかを決定するならばよろしい。素とは孰れにしても同じわけである。唯併し現代の著述に



向つて、殊に滿の字との釣合ひの上から云ふ時は、何ぞ必しも強ひて古風にしなくとも『洲』の字で澤山と思はれる。五大洲とか太平洋洲とかの如く水で取り圍まれて居る義として洲を用ひなくとも差支はあるまいと考へられる。

要するに州の字、頼の字に限らず凡そ其の字形の變遷は時代の上こそ前後はあれ一般が廣く用ひて來るに従ひ自らきめられて行くものであるから、字の使用はその時代の思潮に或る程度適合して行かなければならぬ。が、又他方にその然る所以を明かにし、吟味して行くことが必要であると思ふ。

## 八 文字と植物

文字の構造を少し古い時代に遡つて研究して見ると、植物に關係したものが随分ある。素と漢字は云ふ迄もなく、自然のまゝをうつした繪から發達して居るものであれば、獨り植物に限つたわけではない。山水花鳥風月のいづれを通じてもどつきり見出すことが出来る。無論支那の文字の歴史上其の繪文字の作られて居た時代は比較的一番古く且つ其の期間も短いあひだであつたから後の所謂諧聲文字程に多くはない。が先づ卑近な文字から述べ始めて見よう。

### 一 華の字

華の字は近來『繁華』とか『中華』とか『華美』とか云ふやうな轉義の場合の使用は可成りあるが、

華の字の本義のハナの意義はあまり普通には現はれて居ない。此れは同音の化の字に艸冠りをかけた『花』の字が新たに出來た爲め、此の簡単な音字の爲めに、素との華の字は止むなく別の轉義を取るに至つたものである。

自分は日頃から疑つて居た。支那上代に、山も水も、風も月も又鳥蟲など總べてこれ等の文字は其の物の象形から出來て居ながら、獨り、花に限つて此の花の字にあたる繪文字は果して出來て居なかつたものかと。西洋では埃及などにも昔花に象つた文字は明かに出來て居たのに支那では何故出來て居なかつたのか。日本の所謂櫻花のかたち、又は梅鉢の姿の花の字の如きものは出來なかつたものかと、種々古器物の銘などをしらべて見たけれども、遂に發見し得なかつた。或は支那人が花に對する趣味がなかつたものでもあるかなどと思つて居た。

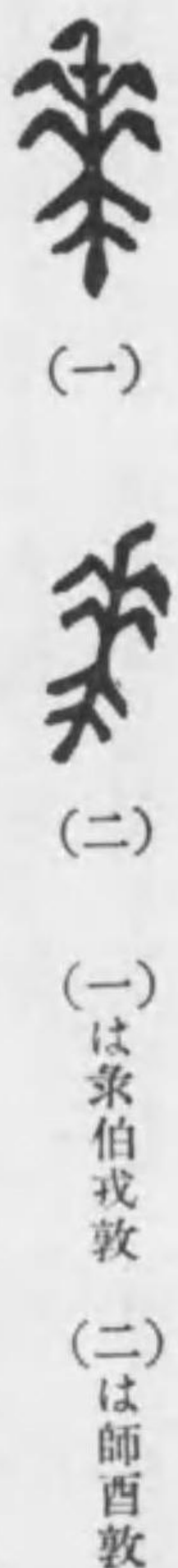
併し翻つて考ふるに、花の字をば後世の俗字と見れば之に相當する本字は必ずや華の字でなくてはならぬ。而して此の華の字は單一の花を描寫したものではなく、謂はば花序とも見るべきものの象形であることがわかつた。けれども此の華の字とても素とは艸冠はなくして書かれて居たもので艸冠は唯それが植物であると云ふ意味を漠然と示して居るに過ぎぬ。尙古字から調査して見ても華の字の下部には **与** の字がふくまれて居る。これは華の字の音を示したものである。左に以上の順序をまとめて花の字の由來を遡つて見よう。



# 花華萼

花の字の古形遡源

此の文字の順序は下のもの程古い形である。尤も一番下にあるものには随分異説もあるが。吳大澂などによると之は華の古文として居る。此の外尙



などの周代の器物にはかゝる古文が見出される。これ等は孰れも華の字の古文なりとせられて居る。華はかくの如く賑かな花ばなしき形を有し、其の本義よりして、榮華とか美觀とか色彩の意味が胚胎して來るのである。花の字の沿革は大略かくの如くに見られる。

## 二 栗の字

栗の字は楷書で西の下に木を書く。木の字のところは素とから木で誤りはないが上部の西は東西の西の字では本義に叶はない。栗の字の古形は唯此の西の字の古いところを調べればこと足りるわけである。併し東西の西の字は素と栖の上の鳥の義（支那人の調べたところに依る）で其の形は次ぎのやうである。



西の字

然るに、栗の字の時の西の字は鳥の巢ではなくて、果實の實に象つたものである。而かも一箇の實ではなくてあまたの實が書かれて居る。それをば古代には大抵三つ、品の字なりに書いてそれで澤山と云ふ意を現はして居た。つまり栗の字の由來は次ぎのやうにたどられる。即ち、



栗の字の古形遡源

である。一見此の沿革を見ると、あまりに冠りが省略せられて居るやうに思はれるが、何ぞ知らん、星の字、雷の字などのうちに含まれたる日の字、田の字なども素とは三つ矢張り品の字なりに書かれて居たのである。尙栗をリツとかレツとかの音で讀まれて居るわけは、恐らく、其のクリの實が鈴成りにたくさんつらなつて出來て居るところを呼んだ言葉であらう。それ故栗は猶列の如しとも語源上からは云ひ得られる言葉であらうかと思はれる。

## 三 果の字

栗の字を調べた結果は直ちに果實の果の字についても其の觀察を適用することが出来る。即ちこは木の枝に實の成りたるに象つた文字である。之を文字通りに田地の田と木とで出來たなどとは見ては少しも解釋がつかないのである。木版があまりに多く這入るから此れは古字を書くことは略しておく。



讀者しばらく其の古文を上例から類推せられたし。

四 樹の字

樹木の樹の字は素とから木と云ふ意味であつたのではない。又此の字に含まれて居る寸の字のころも、始めは又の字が書かれて居たのである。寸と又とは屢々古代文字では混同され入り交つて居る。而して字の主要部は木編と壺の字である。其の本の意味はシツカリと立つて居る義で教育勸語などの『徳を樹つる』の樹は即ち其の本義に適つて居るものである。なぜ樹の字に立つ義があるかと云ふに此の字の中間に介在して居る **壹** は素とは支那古代の太鼓か何かの繪文字で、支那の音樂用の太鼓は臺が附いて居てチャンと立たせてある。打つても倒れるやうなものではない。而して其の形は太鼓の鼓の字にふくまれて居る **壹** 此のの字に依つても最もよくうかゞはれる。其の古文は次ぎのやうになる。



壹の字の古形

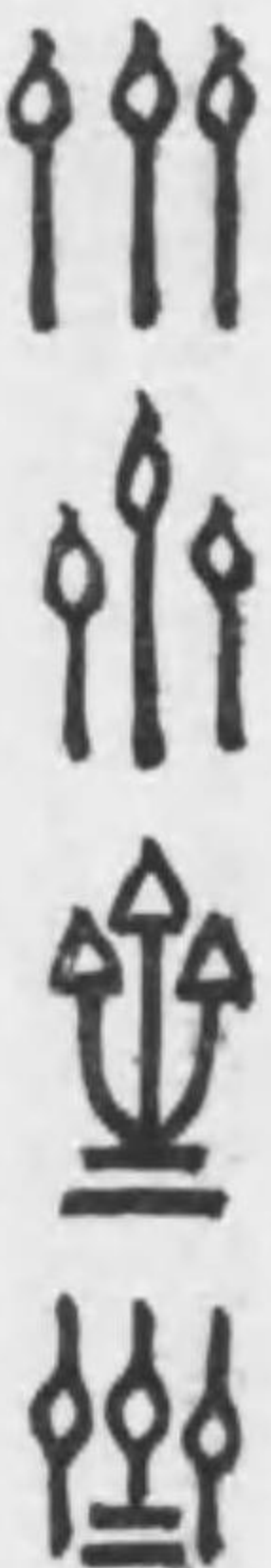
此の字をば、コ(鼓)とかチュ(厨)とか又はジュとか讀むのである。それで樹の字がジュの音を有して居るのも此のしるしを含んで居るからである。故に壹の字は樹の字の音も示し又意味も示して居る符牒である。

かやうなわけであるから、樹とも云はれる木は十分にしつかりした倒れない生ひ木でなくてはならぬ。尙『樹立』と云ふ熟語は容易に引き抜くことの出来ないことと云ふ意を含んで居る言葉である。樹の字については大略かくの如きことが云はれる。

最後には普通の農家では勿論、一般の人々にも珍らしく感ぜらるゝかと思はれる齊の字の意味について一言して置かう。

五 齊の字

齊の字の本義は稻とか麥とか穂の出で揃つたさまを呼んだ文字である。此れを後世ヒトシクと云ふ意に用ひたるは其の澤山の穂がよくそろつて一様に生ひ立つて居るところから云ふのである。澤山の義は例によつて穂を三つ書いて居るが、此れも單に三つと云ふことに拘泥してはいけない。其の文字の古文は左のやうなかたちをして居る。



齊の字の繪文字

此れをば今のやうな齊の字の形にかき改めたのであるが、今日の楷書には殆んど穂先きの有様は見えて居ない。兎もかく古代農業を以て國の本として居た支那の國民には五穀のそろひもそろつて實ることは目出度きことに相違ない。日本の古代にも亦殊に此の趣きがある。故に神前にいつき祭る時の



文字に『齋』とか『齋』とかの字が用ひられ、之には必ず齊の字が含まれて居る。これは單に音符たる外に意味の上に大なる關係を有して居るものと思ふ。

吾人はこれ等の文字を通じて古代の農業が如何に社稷の祭詞に深い縁故を有せしものなるかを推察することが出来る。

以上、華、粟、果、樹、齊の五字について字形の穿鑿上からいろいろのことを臆測して見た。併し自分は植物學上何等の知識もなく、唯めくらあてに過ぎぬ。吾人は其の道の人を得て共に此の側から植物に對する古人の思想の一斑を窺つて見るのも亦頗る興味のあることと思ひ筆のすさびに、門外の人々の爲めに。

## 九 農の字の趣味

近頃は新農業教育の普及と共に農藝學上の知識が漸次一般にひろめられて居る。此の際吾れわれ門外のものには農業に關して一の文字の側から農業の『農』の字に就いて、其の字形の構造成り立ち及び其の字の意義について聊か自分の研究して見たところを少しく申し上げて見よう。

『農』と云ふ字は今日云ふ迄もなく『農會』『農相』『農産物』『大農主義』などの言葉に於いて其の他『農作』『農具』『農民』等種々の語に於いて盛に用ひられて居るが、尙今日から三四千年の上代に於いても既に支那で盛に用ひられて居た文字である。と云ふは支那の古代の民もやはり素とは農學を以つて其の文化の第一歩となし、農耕を事として黄河の上流地に起つた民族であるからである。

それで周の時代頃の種々の遺物に就いて調査した先人の斷案によつて考ふるに、此の『農』の字の楷書で書く形は極めて後世の通用字であつて、謂はば一種の俗字たるに過ぎぬ。と云へば此の字の古い形は如何であつたかと云ふ疑問は誰れ人にも起るであらう。

凡そ支那の漢字は皆其の構造に深いわけが存して居る。中には簡單なわけで出来て居るものもあるが併し大抵のものは複雑に結合せられて出来て居るのである。例へば『雜誌』の『雜』の字に就いて云うて見ても素とは、衣(コロモ)偏に集の字から結合されたものである。然るに集の字は分裂して下部の木は衣偏の方の下にうつり爲めに今では一見『雜』の字に此の集の字のあつた形迹が氣附かない程である。雜の字はかやうなわけで出来て居る。さて然らば『農』の字の構造は如何。

農の字の構造上其の下部に辰の字の存する理由は如何と云ふに、辰は晨旦の晨と同音の辰である。即ち黎明あげがたの義である。農作に出かける時刻の早きを云ふのである。故に農と云へば早朝と云ふことが此の辰の字に依つて聯想せられる。次に『農』の字の冠となれる『曲』の字は何の義かと云ふに此は決して素と古い形の時から曲の字であつたのではない。此れに就いては種々異説も出て居るが兎に角茲に古字で示したやうに田の字を

農

中央に左右から兩手を下して居るらしい



形の構造を有して居るのである。農の字が根本の構成に於いてかやうに田の字を含み又其の上に兩手を下して居る象形の見られるのは餘程古雅な趣を添へて居るもので造字の法の如何にも實際的で且つよく誰にもわかる組み立てかたであらうと思はれる。高田竹山氏の直話参照。

之を要するに『農』の字の構造は素と兩手に田に辰の字から出來て居る文字である。即ち朝早くより田に出で種耕に従事するの義を不言のうちに言ひあらはして居るのである。

造字の關係上から推さるゝ意義に就いては大略かくの如きわけであるが、尙支那の古記録によつて之を見るに例へば書經洪範、左傳襄公九年の條などにも見えて居る通り農は『耕種』の義でつかはれて居る。時としては又農民の義にても用ひられて居るが大體古今の間に意味の差は生じて居ないやうに思はれる。

次ぎにだれも云ふ彼の太古の神農氏と云ふ名前、これは今日の新しい歴史研究では人としての神農氏とか神としての神農氏とか云ふやうには之は見られて居ない。全く太古の一つの時代を人間の如く假りに見て所謂擬人化して史上に稱せられて居るものと考へられて居るが、自分も全く此の考である。燧人氏が火食を覺えた時代を指せるものであるならば此の神農氏は全く農業時代と見る可きである。その時代は何千年續いたのか判らぬが兎に角、神農と云ふ人間が何千年も生きて居たのではない、十史略などの記事は冷靜に見ると傳説史と見る可きである。傳説として神農氏を見れば澤山である。

その『神農』の『神』は人の字と同音で必しも之を神様の神の字の如く之に、拘泥すべからざるものである。全く燧人氏の『人』と同義に見ても大なる誤りはあるまいかと思はれる。

かゝる上古の頃既に農の字の古字が作られて居たか否かはわからぬ。が併し此の農と云ふ言葉は存して居たものと見てもよろしからう。

農の字の日本音はノウであるが支那の古音ではドン (dong) であつて東のトン (tong) 旦のタン (tan) 噸のドン (don) などと密接の關係のある言葉である。即ち上述の早朝の義に關聯せるものであつて、文字上こそ田地に關係はして居ても其の言葉の音の方から云へば朝と云ふ時刻の方に關係をして居るのである。

農の字に關する文字上並びに音語上の自分の考は大體かくの如きものである。

## 十 米の字に就いて

茲に『米』の字に就いて特に述べて置きたいことは、其の楷書、行書、艸書の時の米の字のことはなく、支那でゾット古い時代に遡つて、先づ周末當時のものと思はれるものに就いてである。

漢魏當時の米の字は六朝以後のそれと書體こそ違へ形の上の連絡がよほどよくわかつて居る。つまり、篆書とか隸書とかで書かれて居た時の米の字は楷書のそれと頗る畫が似て居るのである。然るに



茲に述べようとする周代當時の古文字に至つては、よほど其の字形が古雅に傾いて、直ちに今の楷書から推察することがむづかしい程である。

さて、當時の鐘鼎文に就いて米の字の古文を見ると今日の米の字の如く木の字に關係のある文字ではないやうである。木の字の部分を含むに至つたのは小篆以來の俗字で漢の頃から見え初めたものらしい。其の古文は横に一の字を引き、其の上に點を三つ、下にも三つ打つたものが即ち當時の「米」の字であつたのである。

**米**

米の字

茲に示してあるものがそれである。後漢時代の文字學者許叔重は之を象形文字に見て『粟實也象禾實之形也』と述べて居る。

思ふに米の字の素との形は許氏の言の如く禾の實に象つたものに相違はあるまい。けれども然し稻の實をどう云ふつもりで此の如き形に書いて米と讀ましてゐたものであらうか。尤も支那の上代で米と云ふのは唯單に今日の米、禾、稻のみを指して云ふてゐたのではない。尙此の外に、黍、稷、瓜なども亦同様に米と稱せられて居たとの説もある位で、爾雅の著者、舍人は之を六米と云ふて居る。以つて米と云ふ字の意味が如何に廣かつたかがわかるのである。さてそれにしても米の字の古形がかゝる穀類の實に象つたとは云ふものの如何に象つたのか、其の點はよくわからない。けれども自分は之について次の如くに考へる。

米の字の古形は穀類の既に十分實がいつて熟して、之を刈り取りたる時其の稈から實の籾を取るより先きにまづ束ねてたばにして置く。其の束のそのまゝ立ててある形が即ち米の字にかたどられたのであると思はれる。古人で此の點まで立ち入つて説をなしてゐるものは居ないが自分は多くの鐘鼎金文を比較して右のやうに考へるのである。けれども説文學者の王筠は云ふ、米の形本難象四點米也則聊爲界畫耳凡凌雜之物皆此形也と、いかゞ。

尙獨立文字としての米の字でなく他の字の偏となれる米(米偏)の字形を見てもそれは推察せられる。それ故つまり米の字の沿革に就いて繪文字のときから順次變遷した跡かたをたどつて見るとかうなる。即ち、

**米 米 米 米 米**

米の字の沿革

である、最初の二つは周代戰國頃までのもので中央のものは漢代に其の遺證を得可く、最後のものは隋唐頃に見られるものである。つまり二千二百年前と千九百年前と千二百年前及其の後の形は大略右の例で知ることが出来る。俗に米の字は木の字に關係があるやうに見たり、又米の成る木と云ふやうに此の字を見るのはまちがひではないかと考へる。

尙米を含んで居る複合文字に就いて云へば例へば『梁』の字の如きものがある。これは普通下部が



梁

木の字であつたやうに思はれて居るが、此れは素と梁禾米也と古書にもある位であつて其の古形は次ぎのやうにある可き文字である。後世では梁の字は梁の字と混用せられて居るが素とは兩字は別に書かれて居たのである。

以上は形のことである。が次ぎには音のことを少しばかり観察して置かう。

米の音にはベイ (bei) マイ (mai) 及びメイ (亞米利加の米の音 me) の三音がある。此のうち根本となる音はマイであらうと思ふ。併し米の古音は此のマイの外にルイ (lui) とかライ (lai) とか云ふ音もある。類の字がルイと讀まれるのも其の米の字の部分から音が出て居るのである。

米の字に古い音にルイと云ふ音があつたと云ふことに聯關して茲に注意すべきは支那上代で麥のこをライ (lai) と云うて居たことである。今日では『麥』とかくが古代は之を唯『來』と云ふ字だけを書いてムギのことを云ふて居たので、きながら亞米利加、加奈陀地方のライ麥か何かのやうに偶然にも麥のことをライと云ふて居たらしい。併し既にも云へる通り上古の米の字は廣義で麥の如き穀類までも米の字で云ひ現はして居たものであるとすると、つまり米の字を實際上ライ (又はルイ) ともマイとも云つて讀んでゐたものと思はれる。即ち之によつて見ると、米の字の古音はマイとライとで米と麥とを區別して呼んで居たものと思はれる。何れにしても米の字に次ぎの如き二音が認められるのである。

米の字の古音  
1 mai  
2 lai (lui)

米の字について先づ大體右の如き觀察が出来る。更らに之を諸種の文獻に徴したならば屹度色々の事實が引き出されるであらう。

## 十一 稻の字の趣味

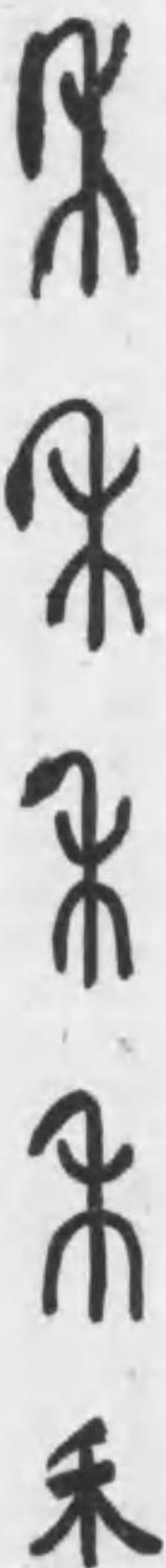
『稻』の字は稻生田など云ふ名前もある位で、イネのことを今日は指して居る。我が國でも昔し祝詞日本紀などにシネ (和稻荒稻) と見えて居る其のシネ (shine) の (shi) は後世イネのイ (yi) と變化しては居るが同じく今のイネのことを指してさう云つたのである。古事記にある米のヨネも音の上で之に關係がある。併しながら『稻』と云ふ此の文字の構造上から細かく觀察して見ると、稻生田の稻其のものを此の『稻』の字で表すと云ふことは因襲の久しき最早や如何ともすること能はずであるが『稻』の字は元來天然のイネに更に人工的手を加へたものと云ふ義を示して居る文字である。稻生田の『稻』は『稻』の本義にあたるものでなく、本來は單なる『禾』の字が、之にあたつて居るのである。故に本來禾と稻とは別物なのである。

イネの義には『禾』の字の方が正しくあたつて居る。其の證據は色々ある。尤もこゝに『禾』がイ



ネの本義なりとの主張は致すもののイネの如何なる點、如何なる特徴を取つて、さう云ふたものであるか、其の點までを突きとめて置かなければならぬがそれに就いて自分は次ぎのやうに考へて居る。即ち、

言葉の音の方面から云つて、禾の音がクワ (kwa) であることは、云ふまでもないが、このクワの音はミノリたるもの (實) と云ふ義の『果』の音クワ (kwa) と言語上關係があるやうに思はれる。つまり『禾』の字はイネの實りたるものを指して云ふのである。此れだけでは論據が薄弱なりと思はば、『禾』の字の極めて古い形のものを取つて見ると思ひ半に過ぎるのである。即ち



字の沿革

此の變遷によつても推測せらるゝ如く、其の最初の形は實の入りたるイネのことを繪に畫いて居たものである。此の故に自分は『禾』の字を以つて直接にイネの義にあたるものと比定するのである。

次ぎに然らば『稻』の字の方はなぜ人工を加へられたイネを指すのであるかと云ふに、其れには此の字形を解剖して見れば直ちにわかる。『稻』は『禾』と『爪』と『臼』との三要素から出來て居る文字であれば、其の原意を知るには、其の要素に分解し、其の各の義をさぐるのが最も捷徑である。禾は上述の如く實つて穂の垂れたる姿を形に象つたものである。次ぎの『爪』は普通では『ツメ』と云



つて居るが唯單に爪のみの意ではない。

爪 (sau) は手 (sou) と同じく、素とは手に象つたものであるが、更に詳言すれば、

爪の字は下むきに手を差し伸べた象形である。茲に示す文字の變遷に依つて見ても、此の事は十分に察せられる。『稻』の字のうち『爪』がツメの意に非ずして手の義であるならば、次ぎに『臼』は何の意を示したものであるかと云ふ疑問が起る。此れは支那上代の金石文に徴して見てもわかる如く、ウスの形であつて、且つそのうちに穀粒の入つて居るところを畫いたものである。普通には此の臼の字を以て單にウスのみの象形と見られて居るが、委細に之を調べて見ると穀類の象形が内部に含まれて居ることがわかる。其の證據は次ぎに示す此の字の變遷を見てもさとられるであらう。



それから俗に向ウスツクと云ふ『春』の字に、此の臼の字が含まれて居るのも偶然ではない。すべて『臼』の字を有して居る文字は皆素とはウスに關係のある意味を有して居たのである。そこで然らば

『稻』の字に之があるわけは、上代の風俗として、何か粗末なウスの如きものがあり、之にウスツク具に杵の如き進化したものは未だ行はれず、唯手を差しおべて、米なり、麥なりを掻きまぜても居たものか、その姿を象形に現したものが即ち此の稻の字である。



兎も角も『稻』の字は『禾』の字とは異なり、禾の實を刈り取つて、之を更に臼にかけたと云ふ、手数のかゝつた意味が寓せられて居るのである。されば『稻』とは既に食せられてもよい迄に、出来揚つた米のことを云ふのであつて所謂米のなる木を指したのではない。寧ろ米のなる木は『禾』の字の方に該當して居るのである。

『稻』は其の原義がイネと云ふことでなく、米のことであると云ふことは以上の如くであるが、その米はイネと密接の關係のあることは勿論であれば、其の廣い意味からすると、矢張り禾の系統を引いて居ることになる。之を俗にノ木偏と云うて居る。『稻』の外『私』の字、『秀』の字、『租』の字、『年』の字、(もとは禾と千の字との結合)、『穀』の字、『秋』の字、其の他『穗』の字、などの如き、禾偏の字について居る文字は、皆總べてイネに關係して解かれて居る。或る意味から之を見れば、以つて支那上代の風俗習慣なども其の幾分は知ることが出来るのである。

『稻』の字の意味はかやうに説明せられる。然るに尙之が、構造を意義の方面ばかりでなく、音の方面から見るとは、又別に一觀察が出来る。即ち『稻』を偏と旁の二部にわかれ、偏を以つて單なる意義の符牒とみなし、旁を以つて音の符牒とみなすと云ふ觀方である。上古にあつては既に臼に入れて舂いて出来揚つた米は之を呼んでトウとかタウとか云つて居たものと見える。其の音を示すが爲めに、特に此の旁の音符を選んで茲につけたものである。之と同じ現象は、尙同種の他の文字『蹈』の

字、『滔』の字などに見られる。尤も此の『蹈』『滔』が果して臼に關係して原義を有せしか否かは疑問である。或は單に其のタウの音を示さんが爲めにのみかゝる旁をもて來たものかと思はれる。が之かし、『稻』の字の場合には音に其の稻の音のタウを示さんが爲めのみに非ずして、其の意味に於いても聯關するところがあるやうに思はれる。つまり旁になれる『滔』は此の稻の音符であると同時に又意義の一部分をも兼ね有するのである。かくの如き役目を有する部分の含まれて居る文字は之を文字學の上で會意に諧聲を兼ねた文字と云ふのである。

稻の字については大略かくの如き觀察が出来るのである。最後に此の文字の各部分を結合したる稻の字を鍾鼎古文のうちから採つて擧げて置かう。

稻 稻 稻 稻

此れ等の字形よりして自分が上に述べたる諸點は種々茲に思ひ併すことが出来るであらうと信ずる。此の『稻』の字の研究は『米』の字の研究と密接の關係があるから前節『米』の字の條と參照して見られんことを望む。

## 十二 自然主義の文字觀

文學上の見地を全く離れて、茲に文字の研究上から、世の自然主義の標榜して居る『自然』と云ふ



字の組み立て並びに其の原意に就いて眞面目なる御話しを申し上げて見よう。

一 自 の 字

『自』の字は今日の楷書ではかやうに書かれて居るが、支那の古代で例へば春秋戦國當時に於いて之が如何にかゝれて居たかと云ふと、其の代表的ものは次ぎの如きものである。

楚公罇  
積古

仲考壺  
嘯堂

居た。後世『敬白』など云ふ時の白が申すの義とせられて居るのは高田氏の直話によると、此の自の字から脱化した義であるとの事である。即ち上に示した字形のうちにはま中の横棒が二本引かれずして一本丈け書かれて居ることがある。此れからして即ち『自』が『白』の字に混同せられたのである。素とは矢張り二本引かれたる自の字でなくてはならぬ。故に『敬白』は『敬自』とあるべき理屈になるのである。『自分』自らを申し出ると云ふが敬白の白の原意であるのである。

然らば『自』の字になぜ自分と云ふ意が含まれて居るのであるか。と云ふに、これは自の字で自分の顔を代表させたものであつて、顔のうちでも特に鼻の部分を指示したものである。その爲めかあら

ぬか自の字の更らに古いところの鐘鼎古文を調べて見ると、さも鼻の形に似たやうすのものが

商鐘文又は蛟篆鐘などのうちに發見せられる。このことは自分が始めて唱へるわけではなく已に遠く漢代からわかつて居る。許慎の説文第四卷にも『自は鼻也象鼻形』と見えて居る。又漢書の揚雄傳に依ると、其の鼻の字を熟語として鼻祖と使ひ始めて居る。即ち『有周之嬋媯或鼻祖於汾隅』とあり、註に鼻始也とある。鼻を始めと解するは自と鼻の普通のためでもあらうが素と自の字が鼻の字の本字で初めと云ふ義を有して居たからであらうと思ふ。

兎も角も支那の記録及金石文に現れて居る限りでは、古く『自』の字が鼻のことを指して居たと云ふことは争はれない。自然主義の自の字にかやうに鼻と云ふ原義が籠つて居ることは面白く感ぜられる。吾人は更に進んで今『自然』の然の字の起りに就いて述べて見よう。

二 然 の 字

『然』の字は之を解剖すると三つの部分になる。楷書の上で直ちにすることの出来る部分は犬の字の部分である。その左側にある部分は楷書でわかりにくいのが、肉の字である。篆書以前では肉の字を斜にかやうに書いて居たのである。下の四つの點は云ふまでもなく火の字である。火の字を四點にかへることは他にいくらか例がある。

かやうに『然』の字はこまかくわけて見ると火の上に犬の肉があるところが書かれて居るわけであつて、之を篆書では茲に示したやうにかく故に『然』の字は



今では「玄かり」とばかり訓じ又其の意味でのみ知られて居るけれども、此れには、焼くとか、もえるとかの意が存して居ることが自ら知られる。後世では燃焼などと云つて、然の字に尙火偏を付けて「燃」える義が示されて居るが、理論の上、此の火偏は蛇足になるわけである。「然」の字だけで已に焼ける義があるのである。浩然とか歴然とか云ふ時の「然」は他の「若」とか「如」とか「爾」とか云ふ助辭の音と同様にその雙聲字として唯音だけを借りたものである。決して之を以つて然の字の字義に拘泥してはならぬ。然の字についてその原義を研究するとかやうに燃焼の義が伏在して居るのである。

故に上來述べた自然主義の「自然」の字義は其の根本に於いて「鼻が燃える」と云ふ意になるやうに偶然にも結合せられた熟語である。鼻を焼失させる主義が自然主義であるとは如何にも怪しからぬわけではあるが、字源の研究上からはどうしても此外に意味のとりやうはないのである。

此の諸語ばなしは往年吾が松山同郷文藝會の自然主義討論の席上で座長内藤鳴雪翁側に加擔して述べた話の一節である。

### 十三 異字印刷の困難

茲に漢字の不便を指摘するのではないが、自分が日頃文字の研究一端を印刷に附するにあたり、殆

んど常に我が思ふ通りに字畫が刷り出された事はなく、いつも之を不満足に感じて居る。歐羅巴に於いても言語學者又は音聲學者が色々苦心して寫聲に一層適切なローマ字の修飾を工夫して居るが、併しその數には略きまりがあつて幾百幾千と云ふ大數に上ることは殆んどない。然るに漢字にあつては元來が數千以上もあり、その字畫についても正俗の區別を立て、又形の變遷、形の解剖、文字の成り立ちなどについて少しく精密に之を説明せんとせんか。自分に筆を執つてまのあたり説明する時には、何の造作もない事が一旦之を活字の上に乗せるとする時になると一通りの困難ではない。一々、銅版、石版、寫真版などにとるか然らずんば木版を態々起さなくてはならぬ。されば經濟上の點で常に書林に眉を顰められると云ふ有様である。假令書林の關門は通過したとしても、さて、愈印刷に附するに先立ち植字小僧に對する筆者の注意が又一通りでない。此の注意が足りない時は折角の一點一畫の微細な苦心も水泡に歸してしまつて、普通の活字と同一視せられて、拾はれてしまふ。形の上に表はせば一見直ちにわかることでも長き説明文を以つて、之に代へなければならぬこともある。尙校正にかゝつてからの苦心に至つてはこれ亦一通りでない。大抵五六校も採つて尙且つ憊焉たりである。されば活版などは文字研究の神髓を發表する好手段でない。唯僅かにその手掛りを與ふるまでで詳細なことは手で一々書いて辨じなくては満足が出来かねるのである。世の進運につれて一般世間の認めたる略字俗字の通用せるものは之を早く活字に上すべきことは自分の日頃の持論だが、こは實行に



於いて頗る困難を感ずることと思ふ。活字のことたる、その造字は容易のことの如くにして、實は然らず。その字母を造りて一箇の活字に仕上ぐるには五號小活字と雖も悔る可からざる經費を要すと云ふ。されば今から新たに開かれようとする印刷所に非ざるよりは異字の鑄造は甚だ事實に於いて行はれ難かるべく、さらばとて在來の印刷所に於いて之を隨時場合に應じて造るとせんか、餘程早いめにその準備にかゝるとしても尙且つ爲めに印刷完了の期日は兎かく非常な後れがちとなる。又やむを得ない次第である。單行本の場合はまだしもだが、雜誌などの場合に在つてはその發行期日を延引せしむることが殆んど毎回である。現に自分はその當局者より小言を受けたること幾度なるかを知らず。異字木版の印刷は文字研究の發表手段として甚だ都合よろしからぬものなる哉、經費の許す限りは金屬寫真版又は銅版などによるより他に道はないのである。本書を讀まるゝ方はその點の事情に御察しを願ひたいと思ふ。尙予が別著『漢字音の系統』の第一版にも其の心してよ。

文字統一の手段として活字が頗る結構なものであることは贅言を要しないことである。國定教科書の文字の統一も全く此の活字の方便の賜物である。然しこれは唯實用上から云つたまで、専門の學問上から深く吟味して來ると、今の活字でその是認せらる可きものは案外に少ないのに驚くのである。呈、廷程などの不完全とか起記忌の不注意とか尺屋局の俗書など、今更活字上では、舊書を復活させることは到底出來ない。之を辨明しようにもそれに用ふる文字が活字にないと云ふ始末である。尤も

今茲に例證した起記忌は此の論文を見て印刷屋が急に注意したものと見え、殊勝にも正字を拵へて居る。此の注意が萬遍なく續くならば結構だが、大抵は誤書のまゝを植字するのである。自分達は常に文字に關する書を印刷に附する度毎に此の不便を感ぜざるを得ないのである。文字に對する自分の眞の考へは唯自分の眞筆によるより外に仕方はないのである。

## 第十三章 文字學の建設

### 一 緒言

言語の新しい研究準備は今から約百年前に歐洲に起り十九世紀の後半には其の準備も略出來てその研究が漸次科學的になり、之が研究の大成者としては、

シュレーゲル Schlegel, Aug, Wilhel.

フンボルト Humbolt, Karl, v.

ボップ Bopp, F.

ポット Pott, Aug. F.

グリム Grimm, Jacob.



シュライケル Schleicher. Aug.

オストフ Osthoff.

ブルグマン Brugmann. K.

などの巨擘が輩出し、爲めに印度歐羅巴の言語學は長足の進歩をなし、今や殆んど完全の域に迄發達し來つた。翻つて文字の方の研究は如何にと云ふに、十八世紀の末葉ナイル河畔ロセッタ石文の解釋ありて以來、埃及のヒエログラフイック文字、又はアッシリアのキュネフォーム文字等に關する研究などなきに非ざるも、之を言語學の隆盛なるに比較する時は、著しき徑庭がある。否未だ一箇の文字學として科學的に研究せられる迄には進んでは居らぬかのやうに思ふ。

吾人は信ずる。言語學が初め印度ゲルマン語に基づき、且つ、西人の手によりて遂に大成せられたのと同じやうに、文字學も亦一箇の學として、之を創立し東洋殊に支那の文字を基礎として、是非東洋人の手によつて之が開拓と大成とを全うしなければならぬものである。實に漢字は東洋學の精華の一つであると思ふ。

歐羅巴の言語學は云ふまでもなく世界全言語の調査の上に成つた言語學ではないけれども、其の研究の結果や實に偉とするに足る。之と同じく今茲に開拓に着手せんとする文字學に於いても之は世界の文字全體を究めて然る後に完成せられなければならぬと云ふ必要は必ずしもない。さしむき支那支でも澤山である。唯その立脚地さへ明かにしておいて之に秩序ある科學的研究をなすことにすれば學の學たる所以はつくされれると思ふ。

然しながら文字は實用を主とする符牒に過ぎぬ。何ぞ之が研究の必要あらんやと一言の下にけなしてかゝる人には固より文字學など云ふ學の建設は到底相談にならぬ。之を學問として成りたゞせる爲めには少なくとも文字發生の由來。文字發生の徑路。文字と言語との關係。文字と歴史との關係などを調べなければならぬ。其の他國字問題の將來と云ふ如き大問題を眞面目に研究せんとするにしても單なる現狀満足主義だけで居ては何も解決はつかない。總べてこれ等の調査については是非文字そのもの、深い研究の必要があるのである。從來記録に關する學問としては西洋でも文獻學フィロロジと云つて漠然たる名稱があり又その學問中には無數の分科が存して居る。然るに文字そのもの、研究は未だに存立するに至つてゐないのは確かに一大缺陷である。嘗つて上田博士も文科大學の講義で述べられて居られた通り、我が國史の研究にしても、又國文の研究にしても、奈良、平安朝頃の古文書をば今の明朝活字でのみ讀んで居るやうでは駄目である。表面の研究ならばいざ知らず、眞の研究に資する爲めには其の筆跡其のもの、研究が出来て居なければならぬ。活字のみに慣れて居ると、天平年間の古文書は愚か、近くは徳川時代の文書であつても十分に之をよみこなすことはむづかしいわけである。

さて支那の研究に於いても全く同様であつて、支那古代の研究をなさんとするに唯後世の版本のみ



をオーソリテイとすることは險呑なわけである。尤も今日に傳はれる歴史上の資料は代々支那及び日本の學者が比較考證によつて疑ふべからざるものとはなつて居る。吾人も敢へて之に疑を入れんと欲するものではない。けれども極端なる場合を云へば其の所謂根本資料となれるものにして果して之にどれだけの根本的價値のあるものであるか。私に之を疑ふのである、例へば堯典を見ても之を眞の堯典となし得るかどうか。その版本の上の文字が堯典そのものに非ざるとは素よりである。吾人が見ることの出来る堯典は虞書孔安國傳のものに過ぎず。彼の周末春秋の頃の鐘鼎文の文體より遡源して、更らにそれよりも一千年以上も古き時代に於いて果して堯典などに示せる如き完全したる文字があり得たかどうか、たとへ一步譲つてあり得たとするも、其の古文は果して如何でありしか。かくまでも揃ひも揃つた字畫が其の頃に既に實際發達して居たものであるかどうか。吾人は感情とか信仰とかの非科學的の點は除きこの問題は冷靜に考察しなければならぬ。時代を同じうせる積極的材料及び事實が他に色々出て來ない限りは後世の傍證的材料がいくら出て來たからとて、必ずしも眞の有力な證據とはなり得ない。尙最近、劉鐵雲の龜甲牛骨文字など頗る研究ものである。

此れは極端の場合であるが兎にかく支那の經書、史書類を文字そのもの、研究から新開拓をして行くこと云ふことは從來の研究に一新面目を與へることになる。尙方便としての文字の研究でなく文字そのものを科學的研究の對象とすること。自分は此の後者の場合を主張するのである。尤も之には支那は古くから僞物模造の多い國だから甚だ用心がいる。現に今も山東地方には僞造業を以つて渡世にして居るものが少なくはない。されど、ともかく文字は上代事實の反射鏡であるからには、此の文字の研究を打ち忘れて支那の學問を開拓しようとするのは宛かも機械の改良を忘れて軍艦を造るやうなものである。吾人は實用を超絶して文字遡源の研究を軍艦の改良に劣らぬ熱心を以つてつとめなければならぬと信ずる。

## 二 文字學建設の要件

支那の文字學は素とより六書の學を基礎とすべきものである。併し單に之のみでは未だ文字の性質發達を十分に明かにすることは出來ぬ。而して所謂六書の學なるものは是迄反覆的に支那人が幾度も研究して居る。自分が茲に述べようと思ふのはそれ以上に之を今日の學問上の立ち場からして今少しく科學的に建設せんとする點で其の骨子に就いて概言しようと思ふのである。

文字は思想表彰の言語を更に符牒で表はしたものであること勿論なれば、言語の學と同じく文字の學問に於いてもその之と相聯絡する補助學は其の研究の方面の廣さに依つて多々益入用になつて來るわけである。

哲學、宗教、社會學、天文、動植物、工藝、一として關係のないものはない。併しながら文字成立



の初期より漸次高度に向つて發達する徑路の方面及び世界諸地方の文字の比較などに資する爲めには以上哲學、宗教、社會學等の諸學よりは、むしろ次ぎに掲ぐる諸學との關係の方が更らに密接なる關係を有するものかと思はれる。即ち、

- 1 神話傳説
- 2 土俗人類學、考古學
- 3 繪畫及模様之歴史
- 4 言語學
- 5 歴史學
- 6 心理學
- 7 文學

一民族が其の文字を有するに至る前に既に一種の言語、風俗、習慣を有して居るが如くに又神話とか傳説をも有して居るものである。我が國に既に高天原、海原、夜見の國の神話があり。西洋に戦争の神、美術の神の神話があると同様に、支那にも黄帝とか、堯舜禹とかの一種の傳説がある。即ち天地人の神話や種々の傳説と見るべきものが存して居る。素より文字が出来た後と雖も傳説の形式は色々ある。周秦漢の間の傳説の如きは多く山海經センガイキヤウに見えて居る。抑も支那人が古來有しきたつて居る一




定の傳説は漢族心理の發現であれば文字構造上にも之が現れずには居らない。天地人の考、五行の考、外敵を毛物又は蟲類視する考、神仙不死の考などは色々の文字構造上に表彰せられて居る。工の字が三才に象つたものであり、王の字はそれから導き出された文字であることの一例によつても如何に傳説と造字の密接なる關係があるか察せられるであらう。

又土俗人類學、考古學上からするも、支那の造字が象形に其の發端を有せるだけに、此れ等の諸學は文字學建設の一大要件となるものである。卑近な例で云へば、支那人の住宅と家との關係は家の字の中に豕を書けるに依つても判るし、又京の字、享の字の古形によつても支那古代築建のゴジツク式の屋根の形も辿ることが出来る。





字の家                      字の京                      字の享

又秋の字の籀文  は龜の甲を火にあぶり、稻の收穫をトするの事實を示し書かたものでこれ禾の字の偏に火の字を書いた秋字に残つて居ること。また鼓の字が  とて居たこと。又矢の字が  であつたことこの事實より考ふる時は、文字上から考



古學上に資することのあると同時に又考古學上の該博なる知識が逆に文字學上に裨益を與ふることは争はれぬ事實である。

尙繪畫とか模様とかの發達の研究が文字發達の初期と密接の關係を有するのみならず又その裝飾としての目的に向つて、又單なるなぐさみ物としても繪と字とは全く同一の價値を有するわけであれば、吾人は此の兩者の關係を忽に附すべからざるものと考へる。文字の起りが繪にあることは勿論なるも、單に繪のみに存するに非ず又時として模様より起れるものもあるかも知れぬ。又一旦既に文字になれるものが繪又は模様と同時に其の意味はわからなくなつても其の運筆の妙とか字形が珍らしいとかの點で重んぜられることもあるのである。巴の紋の形の如きは素と水玉のめぐれる模様より來たれるものであつて之を屋上の瓦の模様用ひるのもその爲で火の用心の義であらう。此れは模様が一方には繪の方に發達し他方には文字の方に發達したものゝ一例である。尙吾人はうたがふ。亞の字は古銅器によつても其の起源は不明だが、此れ等は尙連續模様として存せしものにはあらざるか。許慎が亞を解して醜也とせるも、こは漢代の如き後世に於ける解釋である。此れを以つて眞に原義を解したものは思はれない。要するに文字と繪畫模様の關係は今後の研究として文字學建設上頗る重要な部門になると思ふ。

言語學が文字の研究に離る可からざる關係を有することは贅言を要しない。支那の諧聲文字の全部は素より會意指事轉注假借のものとも雖も苟も文字たる以上は總べて言語の方面を忘れては全く解くことが出来ないのである。鐘鼎古文に見ゆる例の佳の字、且の字、乍の字、白の字の如きは後世の所謂假借字であるが、鐘鼎文の當時の言語から此れ等は皆其の音のみを示したものと見なければならぬのである。然るを經書や詩經その他經典に之を惟、維、祖、作、伯などの字として偏を態々附したるは古雅な文字に蛇足を加へたわけである。ともかくも此れ等の文字は總べて繪でもなければ模様でもない。音の側から觀たる一種の音文字である。下つて左傳などに就いて見ても侍人を寺人とし、不恭を不共とし、略を戮とし、鮮(アザヤカ)を宣とし、其の他恐(オンル)を凶とし、嚮(ムカフ)を郷とし、安を焉(イツクンゾ)とした類のものは枚舉に遑ない程であるが、これ等も總べて言語の方から文字に拘泥しないやうに解かなければならぬのである。かやうに文字を字義からせずして其の言語としての音の方面から觀察する方法は文字研究の一大要法である。之によると例へば周代の帝の音はタク(又はテキ)の音となり、周易の音はタク、テキと云ふ可きことが生じて來る。要するに文字の研究には其の音及び其の意味の如何に表されて居るかを先づ看破しなければならぬ。殊に其の言語の變遷に伴ふ文字の變遷のことはこれ文字觀察中最も大切なる部分となつて居るのである。故に言語學の補助知識は文字學の建設に缺く可からざる大綱となるものである。

歴史の學は有史以後の事實を確むる點に於いて造字研究上直接間接に其の裨益を受くるのである。



むしろ、造字上より歴史に向つて與ふる手掛りの方が多いのであるが、併し又鑄文、刻文、記録上の文字の時代を決定し或は時代思潮の變遷に伴ふ文字の變遷を見る場合などの如き、又史的人物及び地名の現はれたる時代とか、其の他交通の歴史などは一として文字の生命に多大の關係を有して居ないものはない。これ茲に史學上の補助知識の必要を數ふる所以である。

心理學と文字の研究との聯絡は從來あまりに世人に注意せられて居ない。けれども既に神話傳説の物語りが文字の上に没す可からざる影響を與ふる以上は更らに民族心理の特質が又或る形式に於いて文字上に現はる可きは言を俟たない。尙普通心理に於いてもヘルムホルツ (Helmholtz) が言語心理に觀察せしと同じ實觀は又文字と心理の方面にも適用せらるべく、連想作用の文字發達上に於ける現象の如き亦頗る興味のある問題である。殊に字形の印象と字義との關係所謂 *Visual stability* の研究など漢字については特に研究上の好題目としての一大價值を有するものである。

文學と文字との關係は今更云ふ迄もなく、近くは日本の王朝時代の文字が假名のみにて如何にもなよなく現はれて居た。實に文字は其の國民の文學に非常なる影響を與へるものである。殊に此れは支那の文學に於いて最もよく現はれて居る。云ふ迄もなく、支那の文學には冗漫なる語句を許さない。他國の文學でならば七八音綴を要する場合にでも支那では言語及び文字の性質上一音綴若しくは二音綴位で而かも多量の感想を表彰して居る。これは一面に於いて漢字が字面に於いて意義をば遺憾

なく微妙に暴露して居るからでもあるが、尙同音類義の文字がいくらなりとも造り得らるゝにより、支那文學の特色の一つは言葉の方面に發達することよりも寧ろ字形の方面に横に發達するの點が著しい。他國ではそれが文字の側よりは言葉の方面に向つて縦に發達するのである。これが支那文學と外國文學との相違する一つの點であつて、又支那に文字のみが無暗みに増加して來て居るわけである。故に支那では文字が其の言語の範圍に浸し入つて居ると云ふ有様である。されば支那の文學の如きも本來言語のみに支配せらる可き筈のものなるが事實上は、文字（字形及字義）の爲めに非常なる束縛を加へられて居る。これ支那文學と文字との特に離る可からざる所以であつて、茲に、吾人がその文學上の方面から文字研究に資するところあるを特に主張する所以である。

以上は補助學としての要件である。

更らに茲に特に注意しておく可きことは從來文字の研究と云へば字形の研究だけで能事了れりと思はれて居たのであるが、此れは誤つた考へである。文字が未だ繪の階級を脱しない程度にある間は、いざしらず。既に文字とも云はれて、繪や模様以上に高度の發達をなしたものに就いては、形以外に別に、其の音韻、並に意義の方面に於いても形の方と同様にその沿革、變遷のあとその他一般の比較研究を行はなければならぬ。これは文字の言語學的研究中に述べ可きものであるけれども世人は往々此の點を忘れて、唯字形の研究のみが文字の研究なるが如くに云々する傾きがあるから特に茲に指摘し



て置くのである。

以上は總べて文字そのものの研究に就いて述べたのであるが、此の側の研究には尙此れに關聯したことで筆墨、及竹簡、布帛、紙の研究が併び行はれなければならぬ。筆についても毛筆となるに至るまでの筆、即ち大工用の墨竹の如き又鐵筆などの調査、墨についても漆液を用ひし時代より今日の墨に至りし沿革の調査、すべてこれ等筆紙墨は常に文字の形を制限して行く有力なものであればこの側の研究が大いに要る。茲に於いて考古學は益必要となる。これ等筆紙墨の研究の外に又書道の研究が尙別に一つの學問として十分の價值がある。謂はば書學としての研究、此の研究は特に西人などには到底わからない點であれば是非東洋人によつて大成せられなければならぬ。文字學建設上の必要條件中主なるものは大抵これで申し述べたことゝ信ずる。今これを表にして列舉して見ると次ぎの如くなる。

- |       |  |   |             |
|-------|--|---|-------------|
| 補助學   |  | 1 | 神話傳説        |
|       |  | 2 | 土俗人類學、考古學   |
|       |  | 3 | 繪畫、模様 of 歴史 |
| 一、補助學 |  | 4 | 言語學         |
|       |  | 5 | 歴史學         |

文字學の建設

- |          |  |   |     |
|----------|--|---|-----|
| 文字學の建設   |  | 6 | 心理學 |
|          |  | 7 | 文學  |
| 二、筆紙墨の研究 |  |   |     |
| 三、書學の研究  |  |   |     |

建設に關する要件はこれにてとゞめ、次ぎは枝葉の問題なれども、少しく此の文字學の建設を實行する方面について如何に進んで行くべきかを述べよう。先づ其の採る可き材料の種類並びに其の研究の方法について簡単に附け添へて置かう。

三 文字學建設の材料に就いて

文字學建設に要する補助學は大略以上七箇の學問を必要とするのであるが、さて、この文字の學の根本資料ともなるべきものには何を取るべきかと云ふ問題が次ぎに起る。これには普通古記録又は古文書が採られて居る。けれども更らに直接の材料としては金石文を準據としなければならぬ。一概に金石文と云つても中には禹の碑などのやうな全然信じられないものや、又夏鈎帶のやうな頗る怪しいものもある。又その掲本の寫にしても金石索に見えるやうな頗る眞物から遠ざかれるものもある。されば掲本の研究には頗る鑑定吟味が重要なこととなる。



金石文の鑑定は經驗の淺き吾れ吾れ初學のものに到底判断し得るところに非ず。専門の大家と雖も十分に安心の出来る鑑定は定めし少なかる可きことと信ずる。金石文の鑑定には別に考古學及び歴史上の知識と並に多年鑑定の經驗とを必要とするのである。

併し文字研究の資料とするには實物のそのもの眞偽如何は第二の問題で、唯文字そのものが眞物から直接に採つた摺物又は寫眞であつてもよろしかる可き筈である。近時劉鐵雲の龜甲及牛骨に現れたる刻文の如き諸説紛々だが併しこは偽物でなく春秋時代以前のもの也と云ふ坪井（九馬三）先生の直話もあり、又日支兩國にもこの方面の研究がかなりたくさん出来てゐる。

要は根本に近い眞材料によつて、同一の文字を出来得る限り多數に蒐集して見て、其の時代により正俗を分ち、判断するより外に道はなからうと思ふ。

#### 四 文字研究の方面

文字の研究に於いては言語學と同様に地理上の比較研究と歴史的の沿革の研究との二方面があり得るわけである。併しながら文字は言語と違ひ其の地方的差が言語の場合程に多くはない。支那は各省を通じて方言が非常なもので、省によつては全く互に通じないところへある位である。之に反して文字の方は各省殆んど一樣であるといふことに依つて見てもわかる。されば文字の地理上の比較研究は

支那文字と外國文字との比較の場合には別として、支那文字内部に在つては單にその歴史的方面の一面があるのみである。併し勿論この方面とても其の見方によつては心理學上からして類推文字の研究も出来れば、經濟の原則よりして、省略文字の發達についても研究が出来る。併し文字研究の最も大なる方面は此の歴史的研究、殊に其の系統上の研究であらうと思ふ。

漢字の系統の研究は其の形の系統、音の系統、其の他意義の上の系統一として、歴史的調査のいらぬものはない。先づ昭代の漢字の歴史的並びに系統的の研究は上來述べ來たつた七補助學、神話傳説、土俗人類學、考古學、繪畫模様様の歴史、言語學、歴史學、心理學、文學の力を借りて進むこととするならば圓滿なる科學的研究が出来はしないかと私かに思ふ。

往年、明治四十二年五月十五日、東京帝國大學内に、重野、星野、上田、三上、白鳥、服部、市村、伊東、塚本、關野、藤岡、岡田、森、内藤等の諸先生並に高田氏、河井氏等の先輩諸士の發起賛同を得て成立することを得たる『文字研究會』は少なくとも支那方面に就いて以上の抱負を有しなければならぬと思ふ。

備考 文字學の建設について一言辯じて置きたいことがある。自分が常に文字學と呼んで居るものは廣き規模を有して居る字學の義である。舊來の考へかたでは金石の學、音韻の學、訓話の學などは何れも皆所謂文字の學から別に見られて居た弊がある。尙書法の研究なども多少別に考



へられて居たかと思ふ。爲めに一世を風靡するに足りる音韻家朱駿聲なども尙、金石のことに  
なると殆んど考が及んで居ないと云ふやうな始末になつて居る。健全な文字學には固より此れ  
等總べてを包含しなければならぬのである。

#### 第十四章 説文より入りて説文を超脱すべし

百年の歴史を有し來たれる説文會を始め、吉金文會、談書會、説文素讀會、大學の文字研究會など  
と近時文字に關する研究會は雨後の筍の如く諸方面に起つて來た。爲めに説文の需用は頓に増加し従  
つて段註説文の流布も著しく擴まつて來た、と云ふやうな風で以て近時文字學風潮の一斑は察せられ  
る。

抑も支那、日本の文字の研究は何よりも先づ説文から這入つて行くべきことは今更贅言を俟たない。  
苟も文字を云々するに説文を外にしたものは、最早や、字學者間に齡されない位になつて來た。説文  
の文字學入門として又その法典としての價値は支那幾億の書籍中之が右に出づるものは全くない。蓋  
し説文は今を去る丁度千八百年前即ち後漢の時代に出來たものであつて、當時支那に行はれて居た文  
字中九千三百五十三字だけを取つて之に許叔重と云ふ學者が叮嚀に小篆の字體を擧げ且つ其の意義並

びに構造について説明を加へたものである。

説文の外、文字の研究には尙爾雅や、方言、釋名の如き傍證資料となるものも素よりないではない  
が、これ等は孰れも言語の方面の研究資料であつて、文字の構造などには少しも説き及んで居ない。  
尙梁の顧野王の玉篇以降字引の類は無數に出來ては居るがこれ亦字の構造については、説文の範圍以  
外に出では居ない。實に説文は文字調査の上に空前絶後、西洋にも之に匹敵するものは今日迄のどこ  
ろでは斷じて出て居ない。故に説文は東西古今に唯一つの字源寶典として重んずるに足るべき珍書で  
ある。此れに就いては往年故重野老博士からも懇々高説を承つた。

併しながら今日に傳つて居る説文は多く宋版や、明版の翻刻本たるに過ぎぬ。従つて傳寫翻刻の際  
の誤謬は幾多もあるであらう。よし其の後世の翻刻本でなく、後漢の時の眞本がそのまゝ傳へられて  
居るとしても、其の書中に録するところの總べてを丸呑みに、其のまゝ信仰することは考へものであ  
る。これが宗教上の聖典でもあるならば、別であるが、さうでなく、事實にもとづいて科學的に批判  
せらる可き字典のことであれば更らに尙研究の餘地はいくらでも存して居る。試みに思へ、後漢は周  
代を去ること約一千年の時代をへだて、而かも文字は既に周初以前に於いて可成りに發達して居た。  
蒼頡とか黃帝とかの存在は信すべからざるものとするも、尙周初以前に文字の發生のありしことはう  
たがはれない。説文に錄せられたる文字はその凡てが必ずしも周代に出來たもののみとは限られない



けれども許叔重が文字解は後漢の世にあつて而かも遠き一千年以前の文字に解釋を附けたものと視ることが出来る。元より許氏も書、詩、易などの思想によつて説きたる點もなきにはあらねど、周以後の文化とか、又は兩漢當時の思想で古代文字を解いたところも少なからざるべく、甚しきは許慎一個の見解でよい加減な釋きかたをした箇所も或はありはしないかと疑はれないでもない。

説文を以つて一言一句、金科玉條の如くに信仰し奉れる人は説文十四卷及序の全體に互つて何等疑念の起らう筈もあるまいが、虚心淡懐、之を研究せんとするものには、其の各一字の解を讀む度毎に、何だか怪しいと思ふ疑ひの起らないことはない。字源の研究に無理な解を強ひて施す必要はない。各種の學問の未だ少しも開けて居なかつた後漢に於いて上古各般の反鏡たる文字がかくの如く残らず釋然として説き去り得るものなるか。如何か。之を説き得べきものと信仰するならば、格別、言語、考古、風俗、傳説、金石、歴史の諸種の方面より見て正鵠を得、穩健なりと認めらるゝ如き許慎の解釋は其の九千三百五十三字と及び序のうちに果してどれ位あるものであらうか。『王』が『三』に従ふ字なりとの説文の説の如きも今日言語及び金石文の研究上からは既に動搖して來たではないか。又『存』が『从子才聲』との説文の説も音韻學上からは頗る怪しいものと自分は考へて居る。その辯證は茲に省く。

されば支那上代の考古、言語、風俗、金石、傳説等より其の上代の心理作用を十分に研究し得たる

時は文字は必ずしも説文のみによつて解し盡さるべきものに非ず。寧ろ此れ等諸學の知識によつて直ちに根本の金石文字其のもの研究が起るべきわけであらうと思ふ。つまり説文を脱し抜いて更に一步先の根本研究が出来るのである。これに向つては、豫め漢民族の有し來れる天地人の三才の思想とか水火金木土の五行説又は陰陽の考などの哲學的基礎の學問を始め、支那の周圍に於ける外民族の文化、思想史の研究を遂げなければならぬ。支那の方で極めて上代の風俗古禮としてのみ思はれて居るものでも存外、外民族例へば蒙古人やツングース族の滿人の卑近な今俗のうちに發見せられることがあるであらう。

支那の文字研究は素とより説文に關係した部分のみを以つて能事了れりとするのではない。他に研究の方面はいくらもある。けれども最も普通には之から這入ることとなつて居る。のみならずさうするが比較的早く堂に入ることが出来るのである。故に自分は説文を以つて『文字學入門』と視る。併し之が大體に通曉した時を俟つて之を内部と外部の兩方面から研究して行かなければならぬと思ふ。つまり説文の眞の研究は之に吞まれることなく、之を客觀視し批評的に觀て十分之に疑問を挟み、疑問のあるところは、倦まずどこまでも他の補助學の知識を以つて之を批判して行くべきである。近くは『蒼頡』の名稱の如きも今では頗る疑問の種子となり、蒼頡は『創契』の意に見るべきものに非ざるかとの説が出て居り、更らに創とは始むると云ふ義の外に切り刻むの義のあることが唱へられ、(倉



の字と刀の字の構造故) 更らに一步を進めては言語上、朝鮮、滿洲、蒙古、サモエード、フィン、ウグル(匈牙利語)の諸國語の Seal, Sir, Ser. などの語と關係ある「コスル」「エガク」と云ふ語の音を取つたものに過ぎない文字であらうと云ふ進んだ比較的研究さへも起つて來た。(飯島忠夫博士や白鳥博士の説參照) 林泰輔博士、森槐南氏は尙別に一説を持して居られる。

文字研究の方法は既に茲まで進んで來た。此の際此の漢字研究の荒野は銳意以て開拓せられなければならぬ。それには上述の如く入門の書として説文が推されなければならぬ。けれども自分は茲に特に、その説文研究者に向つて『説文に蔽はるること勿れ、よろしく之を達觀して超脱すべし』とのことを注意したのである。

此の注意や餘りに大言壯語の如くに聞ゆるも吾人は説字の價値を強ひて神聖化せんが爲めに之を研究せんとするものに非ずして、單に文字研究の方便とするのみ。つまり唯その一大方便として之に據ると云ふ迄のものである。併し説文内部の比較考證出典の調査丈けでも中々容易なわざではない。嘗て重野老先生から賜つた玉づきのうちにも『(前略)十二日學士院に於て右の趣星野博士へ申演置候次第云同(星野)博士當日(五月十五日)演題許慎序文は御承知の通り説文一書の綱領反覆研尋可致且研究會(文字研究會)は可相成最初より餘り高遠に馳せ候はぬ様注意第一と愚存に候何分漢時代の古文一讀即了と申譯には參り兼申可は勿論に候間先大意を了得し徐々精義に涉り候方可然歎註解の異

同も右に準じ候方可然哉云々(明治四十二年五月十三日鎌倉にて)との仰せがあられた位である。吾人は説文の内部研究丈でも大事業であると思ふ。されば讀書百遍意自ら通ずの譬に洩れず、専ら畢生の精力を説文に注集するも、尙これ足らざるの嘆は屹度起るだらうが、然し研究の目的は『説文より入つて説文を超脱せざる可からず』との一事に歸するのである。世には説文を寶典の如く神聖視した上に尙後世の發達にかゝる文字を一も二もなく誤字なり俗字なりとけなすものがある。こは平安朝の文典を明治に強ひる類で頗る心得ぬ話であると思ふ。

## 第十五章 古代の文字と人物畫

支那古代の人物畫は漢代の武陵祠及孝堂山石室の刻像に依つて、漸く當時の人物畫の一斑を知ることが出来るが、それ以前のものとしては今日何等の繪畫的材料は残つて居ない。若し強ひて之を捜し求めんとする時は、最早や繪畫の程度を脱して單なる象形、若しくは幼稚なる輪廓畫の如きものを以つて満足しなければならぬ。繪でなくして一種の象形文字であるとか又輪廓畫の如きものはこれ所謂符牒に過ぎぬものであるが、此の符牒は懸て支那文字の先驅となつて居るのである。

文字起源の方面から繪畫の上代史を窺はんとするは素より方法の得たるものではあるまいけれ共、



此れに依つて、繪畫の達し得ざる秦漢の時代よりして遠くは遙かに春秋、周代に至る人々の美的感想の表彰並びに實物模寫の俤をば幾分窺ひ得らるゝものと信するに依り、左に多くの材料中より五六の古代文字を示し併せて門の字の人物畫觀に及ばうと思ふ。

支那の文字は今日、死字迄を悉く算入すると、優に五萬六七千の多きに達して居るが、之を眞の象形的要素にまぼり揚げて見ると、僅か六百二十字即ち全體の約百分の一の母字に歸着させることが出来る。其の母字六百二十のうち人物に關する象形は大凡そ七十ばかりを占めて居る。

イ	人	長	比	兜	見
𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎	𠄎
(見)	(見)	(包)	(人)	(司)	(𠄎)
𠄎	臣	夫	交	並	
(母)	(臣)	(夫)	(交)	(並)	

などは即ち其のうちの主なるものであるが、此の中を更らに分類して見ると大體「人」字のと「大」

の字との二大系統内に收めることが出来る。而して此れ等の人物文字は其の輪廓に於いてこそ、粗笨なれ、如何にその要點の描出せられ居るかは察すに餘りがある。單に人物に關したものに限つたわけではなく、尙鳥獸、蟲魚、草木、器具、家屋に至る迄、周代の古文は實に面白く、要領を得て畫かれて居る。尤も龜甲又は牛骨などに卜占用に刻せられたもの丈は別として、普通の祭器、鐘鼎の類に鑄込められたる古文は、多くは、古雅掬すべきものである。そのうちでも殊に代表的のものを左に擧げて見るとかやうなものがある。

𠄎	佳	𠄎	𠄎
(佳の字)	(西に關 係なし)	𠄎	𠄎
小篆 にて	小篆 にて	小篆 にて	小篆 にて

𠄎	龜	𠄎	𠄎
(龜の字)		𠄎	𠄎
小篆 にて	小篆 にて	小篆 にて	小篆 にて





小篆にて



(禾)の字  
(尖端  
稍穂)



小篆にて



(鼎)の字



小篆にて



(萬)の字(蟲の象形)

此れ等の鐘鼎古文は眞の繪畫としての價は無論あるまいけれども書は美術也と云ふことが云ひ得べくんば又以つて繪畫の元始状態を既に超脱したるものと云つても過言であるまい。而して此れ等の古文は前に掲げたる人物の象形と線の數に於ては多少の差あるも、まかし周代の文字としては共に孰れも支那文字特有の性質を遺憾なく現して居るものである。



(一)



(二)

かくの如き古代文字の觀察よりして今『門』の字の古形遡源に遣入らう。讀者は、先づ此の文字を見て其の左右相雙の構造に氣付き、同時に又之が『門』の字と何等かの聯關するところあるもの如くに感ぜられるであらう。併し『門』は素と『戶』の字の左右相對せるものであつて、茲に觀んとする『門』の字とは何等の歴史的關係は有して居ないのである。『門』は素と小篆で(一)

の如く書き (tan) と讀む。此れの意義が如何なる意味であるかは此の門構を共通に有する多くの文字を蒐集比較するに依つて始めて明瞭にすることが出来る。例へば

- 一 閉 ベン 搏也擊也
- 二 鬪 ダウ 鬪也擾也
- 三 鬪 コウ 争也鬪聲也
- 四 鬪 トウ 兩兵相遇也
- 五 鬪 キウ 手取也
- 六 鬪 フン 擾亂不解也
- 七 鬪 ゲキ 争也訟也戻也

以つて『門』の意は十分に察知し得られる。然らば次に『門』にかゝる意味が存して居るか  
と云ふに、此れは素と『可』の字を左右相對せしめ、それより生じた意味であつて、その各は共に、  
門 ゲキ 鬪物也の意がある。而して争ふの意はこれを併立するに依つて出て來る。之が楷書及び小篆の  
字面では未だその意味は明かに現れて居ない。けれども、少しく古文の方に遡つて其の鐘鼎文の徴す  
べきものに就いて見ると、次ぎに示す如き、種々様々のものがある。いづれも簡古掬す可きものたら  
ざるはなしと云つてもよろしい。即ち、





可の字の古文各種

此れ等の古文は既に述べたる人の字の系統のものと相對照して頗る興味のあるもので、周代の支那人が當時人物をスケッチするに如何に描き居たりしか。少なくとも符牒的文字として實用上に供せし字形が如何にありしかの點は此れに依つて幾分の手掛りを得ることと信ずる。此の象形を通覽すると、前に述べたる『可』に執物也との義の存せしことの所以も了解せらるべく其の結合せし門の字に相せめぎ相争闘するの意の含まれ居ることも容易に推知することが出来るのである。

『可』に執物の義の存せしところよりして別に『執』の字などにも之に執るの意が生じて來て居る。



執の字の篆字

蓋し旁の『九』の字はもと矢張り『可』から變じ來たものであつて、其の證據は篆書の形に窺はれる。其の他『勢』の字、『藝』の字、『恐』の字、『筑』の字、並びに『執』、『熱』などの『九』は總べて皆此の『可』の字に由來して居るもので、孰れも執物の義を最

初に含んで居ないものはない。

更に一步を進めて、言語の方面から、更なるかと云ふに、此れは其の人間の持つて居るかと思ふ。即ち手に戟(ゲキ)を持して争闘をして居たと云ふことからではあるまいか。支那の上代殊に有史以前の時代に在つてはかの五帝の治平と云ふやうなことは殆んどなく、絶えず干戈を事として居たもので、堯舜禹の理想的傳説の如きも畢竟其の反動として作られたものかと思はれるが、其の殺伐な



になぜゲキの音があつて、執物の義が存しする武器の名稱より來たものであらうと思

る餘風は、後の造字上にも現はれ、或は戈の字と己が領地を示す符號口とで、『或』(古音コク)の字が出來、後には更らに之から國の字が生ずるに至つた。

又戈と軌とで戟(ゲキ)の字が出來、其の他刀の字を食んだ契(ケツ)の字とか割(カツ)などの字をも見るに至つた。此れ等のゲキ、コク、ケツ、カツなどの音は言語としては殘酷の酷、殘虐の虐などと同類の語の音で、何れも干戈、争闘に關した語でないものはない。



て見ると  
書いたもので

「我」の字の古文は明かに後世の兵士、又は武装したる人物の側面を  
あると見られる。普通の場合の人物側面は  
(人の字)

と書き居るに反し争闘又は兵士の場合にはかくの如くに書きわけて居る。簡単なことではあるが、古代の文字上に觀られる此の類の消息は尙他に色々と思出されるであらうと思ふ。

卑近な例で云へば「我」の字の如きもその左半に就いては古來諸説紛々(古文垂字説、人字説等)だが右半に持戈の意の含まれて居る點は一般に認められて居る。自己と云ふ觀念が武器にて現はされて居るのは古代の殺伐たる光景目に觀るが如き心地がする。此の自衛護身に武器を執るの風は今も南洋諸島の諸蠻族中に少なからず見出される風俗である。

## 第十六章 漢文教授の改良案

中等教育の科程中近來特に文部省の注意を促せる點は、倫理問題と語學問題である。倫理問題は暫く措いて云はず、語學の問題は即ち英語修得の問題を指し宛かも中等教育中主要なる眼目となつて居るかの觀がある。中等教育の目的が専門の豫備のみに在るに非ずして、一般社會の中流國民の素養養成に在ることは明かである。然るに、英語修得の問題のみが頻りにやかましく論ぜられて、而かもそ

れよりも更に大切なる帝國語、漢語漢字等の中等教育に於ける現状の點は其れ程には論ぜられて居なかつた。四十二年の中學校長會議に小松原文部大臣からの訓令のうちに國漢文に關する一箇條が掲げられてあつたのは全く時勢の要求に適合した事と思ふ。

今中等教育内部の實狀を觀察して見るに、英語の科目は孰れの學校に於いても最も必要なる科目の一つと認められ、爲めに語學と云へば即ち直ちに英語のことのみを指し而して實際、國漢文などは殆んど眼中に入れられて居ないやうである。教師仲間の方はさうでないとしても生徒の方に於いては殆んど皆之に近い思潮に依つて支配せられ、國漢文の輕蔑せられて居ることは、實に甚しい次第である。思ふに此の考へは現時の學校に於いては一般に最早や抜く可からざる根をおろして居るのではあるまいか。その原因には蓋し動かすことの出来ないものがある。即ち、

原因の一、中學生が卒業後その知識の最も著しく試験せられる機會は多く高等の學校へ這入る入學試験にあるのであるが、此の關門に於いて語學中では獨り英語の科目が最も重く視られ爾後入學後と雖も引き續き當局者が最も腐心する點は即ち此の外國語問題である。之に對するその注意はひと通りでない。又外國語について當局者へ色々具申するものも決して少なくはない。此の故に外國語問題と當局者とは常に密接の關係を有して居る。然るに國漢文及漢字の方面は如何。中等教育の立ち場から此の大問題を英語のそのやうに痛論具申せし人の出でし例は未だ自分には聞



かない。當局者も此の方面に就いては如何なる態度に在らるゝのであらう。一箇年間の各課程の漢文讀本に漢字が平均幾何含まれて居るかの調査すら出来て居ないと云ふことに依つてもその呑氣加減が測られる。然るに事實上近來國漢文の力の退歩は如何であるか。當局者の大に研究を要する點である。又社會そのものとても流石にその舞臺のあまりに廣くて一々學生卒業生の素養不足などを具申するのいとまはない。かく社會からとりわけ之を咎めざることと當局者の呑氣なるとは益國漢文の退歩の度を日一日と甚しくするばかりである。

原因の二、新しい學問を授くる科目、英語、數學の受持教師は、或る特別の學校は別として一般に大抵國漢文の受持教師よりもその地位に於いてまさり、勢力に於いて幅がされる。又その學科の性質上生徒に向つて毎日強ゆることの出来易きこと及びその教授上のまかく固陋でない爲め勢ひ生徒は力を多く此の英語數學の方に用ひるのである。されば國漢文の方は舊來の教へ方のみに執して居てはその採點法でも嚴重にする方法の外、生徒をして、心からこれに精勵せしむることは中々困難であらうと云ふ始末。尙國漢文の教師はその地位も低くして、俸給の比較的薄いと云ふ如きつまらないこと。これが上述の如くにその學科の重みを減ぜしめる感情上の大原因となつては居ないかと思ふ。但しこれは臆測たるに過ぎぬ。果していかゞ。

原因の三、英語等などを受持てる教師はその素養が比較的新しい研究法の上に基づいて居て、解剖的に、或は綜合的に、よく筋道が立つて居る。従つて之が又教授上にも程よく應用されて居る。今日その未だ完全なる教授法案はないにしても、兎に角、近來の英語の教へ方は言語感覺(Sprach gefühl)を本として、それで効を著々奏しつゝある。之に反して國漢文殊に漢文の教授は如何であるか。返り讀みの漢文では折角の漢文も日本流の覺感しか起らない筈である。その上、聞く所によれば漢文には教授法なく、教授要目も實効舉がらず。唯例に依つて返り點のまゝを機械的に讀ませて之に解釋せるのみ。若し文字の列べかた位を説明し加ふれば上の上乗である。その解剖的や綜合的の教授の得失如何、の研究などは勿論、一文章、全體の大意の注意、語句、文字の教授法などについては一つの規範方針さへも示されて居ないと云ふことである。實になげかはしき次第である。吾人は此の際、學理の一方に偏せずして實際社會を一方の參考にとり、十分實地の上にも應用の出来るきゝめある特別の教授法を漢文漢字について攻究するところがなくてはならぬと思ふ。されどかの今日義務教育に適用せる如き徒に形式の煩ひのみ多きが如き方法は考へものである。漢文漢字の素養不足の原因は教授法の名案なきことに依ること大なるもこの外に尙不動なる標準を示した所の昭代の一大漢和辭典の缺乏せること。これが又其の主なる原因となつて居るかと思ふ。

かくの如き理由により今日中等教育に於ける國漢文殊に漢文は案外に、不振の状態に沈んで居るの



である。予は外國語の科目を輕んずるに非ざるも中等教育に於ける外國語の獎勵は以て他の高等の學校の満足を買ひ得べく、又は特殊の場合に比較的ひろく知識をひろめ用を辨し得と云ふに過ぎず。所詮それが國家社會の全般と時々刻々直接至大の關係を有するの點は國語漢語漢字のその如く玄かく急なるものに非ず。我が中等教育に於ける國漢文の成績の如何は假令社會そのものが之を云々具申することなしと雖も、その不振の結果の影響はわが社會にとつて實に寒心すべきものである。忽ち朝夕用を辨し得る上から云ふも今日の日本に於いては國漢文の價值は頗る大なるものにして到底外國語の比に非ざるや論をまたない。卑近なるが故に、と云ふ理由で之を忽諸に附するは謂れのなき申しわけである。而かも古來國漢文の蔑視されたること今の如く甚しきはなし。今の時に於いて、眞面目なる方法を講じなければ、今後の中等教育は骨抜き教育となり了るべく、ひいては健全なる日本中流社會の國語文字界は前途實に憂ふ可きなき運命になるであらうと思ふ。吾人は當局者が社會の一局部なる高等教育機關方面のみよりの具申刺戟によりて、動かされ而かも社會全局面からの無言の刺戟に對しては、識つて知らざるが如き態度をとれるをあやしみ一日も早く世に先んじて中等教育の本に思ひ至らんことを希望してやまぬ次第である。國漢文教授法の攷究があと廻しにせられなければならぬ理由はいづくにあるか。國家の爲め社會の爲に吾人は深く之を怪しむのである。

吾人は更に一步を進めて、漢文讀本の編纂に就いて一言を加へて置かなくてはならぬ。殊に茲にと

りわけ注意せんとするはその漢語及び文字に對する點である。漢文教科書中に於ける漢語及び漢字の編入の法は從來あまり考へられて居ないがこれは頗る研究を要する點である。國民義務教育の方の書物にいくらを包含させて、中等教育の方にはどれ位を網羅せしむ可きか。これは大問題である。漢字一千五百字が國民讀本に入れらるゝならば、中等教育の方に於いてはそれ及びそれ以上に更に二千乃至二千五百を増し選定して、之が編纂に着手すると云ふやうにするか。これには國漢文以外の教科書との關係もあれば、直ちに國漢文のみの方でその悉くを網羅することも要るまい。併し兎も角も當局者が中等教育に於いて漢字三千五百乃至四千の選定は頗る必要なる準備事業である。

其の頃支那では既に立憲政の教育基礎として、先づ現行漢字中より五千の文字を選定し之を以つて國民讀本を編纂中なりと。彼我國情を異にするは素よりなりと雖も、文字の選定が我が中等教育に於いて三千五百乃至四千の間にある可きは我が中等教育の現狀に於いても頗る時宜を得たものと考へる。併しながら茲に世人の注意を要する點は漢字教育の價值は文字としての漢字の外に尙又言葉としての價值例へば熟語としての價值の方が更らに一層大切なる部分となると云ふ點である。それ故單に文字の分配上より云へば中等教育に於いては義務教育に比してわりに少ないやうであるが、さうでない。中等漢字讀本の價值は此の熟語を多く入れると云ふ點に於いて最も意を籠めなければならぬ。徒らに文章全體としての意味の上又は色々の原作者の名稱の配列の上などにのみ苦心して編纂した讀本



は生徒を漢文専門家にするつもりならば、格別、さうでなく、單に中等教育の目的と云ふ點からは考へものである。

故に從來大抵の漢文讀本が中等教科書を目的として居りながら思を茲に致さず、徒らに原作者の名前配列を本位として居たのは、實に目的を没却して居たものである。素より文章本位からして議論文、叙事文、紀行文などの文體を識別せしむることも害のあることではない。併しそれは支那人教育とか漢文専攻者とかの場合に適用すべきことで日本の一般中學生に向つてかゝることを本位とするのは如何であらう。況して文體の區別を知らしむるは更に一層適切なる帝國語の方で授け得る便宜がいふまでもないのである。又帝國語の方でこれをよく知らしめ練習をさせて置く方が卒業後裨益あるは云ふまでもない事である。卒業後の益に立つ文章の知識は漢文に非ずして帝國語としての散文であるのである。文章の稽古は中學では帝國語を以つて習ふを主眼とす可きであると考へる。

論者或は云はん。漢語及び漢字の教授も亦帝國語の方で十分出來ると。無論これは出來る。日本語流に折角の漢文をわざわざ返つて讀むのであれば、第一、國語を讀むのとあまりかはらぬ。されば單語としての漢語の方面は尙國語の外に他の諸學科と聯絡して教授すれば愈以つて十分に授け知らしむることが出來る。けれども茲に吾人が特に漢語漢字の教授を漢文科程の方に結び附くる所以は、漢文中に於ける一要素たる一文 (Sentence) 又は一句と、更にその内に含まれる單語及び文字との關係を

知らしむる點に在るのである。文の語脈組織と單語との關係などは到底書き流しの帝國語ではわからない。漢文を俟つて始めてわかるのである。されば漢語の素との用法の根本を知らしむる點で之は漢文の科程と離る可からざる關係があるのである。而してその漢語は常に語の性質以外に文字としての解剖的意義を有して居るものであれば、此の字面の上に就いての教授も國語の場合に於いてするよりは更に場合も多く、且つ説明も甚やしい便宜があるのである。

併し漢字を生徒に記憶せしむる點から云へば如何に漢文讀本中に△△又は○○などの注意點を附することあるも、それよりは假名交り文中に見えたる漢字の方が遙かに覚え易い。これは漢文の方はのべつに畫の多い文字が終始ぶつつきに臚列せられ従つて生徒の眼を特に刺戟すると云ふことが假名交り文中の漢字程に強くなって、却つて遙かに弱いのである。つまり漢文では一見特別のみわけがつかないからである。

以上は總べて漢文の外形上よりその文章中の句、熟語及び漢字の教授を目的としたる編纂上の注意である。次に然らば此の外形上の目的さへ達すれば編纂材料の内容はどうでもよろしいかと云ふに、此の點は更に別の問題として、攷究する必要がある。近來倫理思想の鼓吹を以つて内容の骨子となすべしとの説がある。これは一説として大に當局者も参考となすべきことで自分などもその半面の眞理は認めて居る。けれども中等教育の漢文の科目は、假令裏面には種々の深い意を伏せしむることが



出来ても、表面上の學科そのものの目的はやはり本來からの通り語學の一つとして認むることがその第一義であるべきであると思ふ。故に必ずしも一定の骨子を定めておくことはいかがであらう。倫理方面に引つくることは素より時弊を救ふ一策とはなるが、併しそれは寧ろ科目の上で附隨した義と致さなければならぬ。謂はば第二義である。そのうちには倫理の點の外に歴史その他色々のものが這入り得る。倫理道德を没却したる如き文を取つて編纂するの愚は固より教科書としては有り得可からざるものなり。されば中等教育の目的にかなふ範圍内に於いてならば、内容は必ずしも一定の主義にきめておかなくともよからう。かゝる第二義の點よりはむしろ第一義の意味で之に叶ふやうな工夫を施した漢文の讀本が編纂せられなければならぬ。宛かも英語に於いて文の外形、構造、句、熟語、單語がやかましく注意せられて居ると同様の事が漢文にも適用する可きである。更に文字に就いては又語學としての外に特別に形の上の注意が必要な事になるのである。要するに日本社會の現状よりして三千五百乃至四千の漢字及びそれによりて結合せられたる最も普通の卑近な熟語を知らしむると云ふこと、此の言語及び文字の注意の條々が中等教育に於ける漢文讀本の編纂に只今忽諸にせられては居ないかと思ふ。

以上の諸問題中漢文教授上改良すべき實際問題を引きくるめて云へば、之には、特に攷究すべき餘地が非常に多く残つて居て漢字研究者も、教授當局者も、又教育大家も、其の他讀本編纂者も、等し

く皆理屈をはなれて俱に聯絡して研究す可きである。その重なる點は次の事項である。

一、中學生に對して教師は先づ漢字（畫、音、義）を自覺して精確に教授す可き方法を立つ可きこと。

二、漢字讀本の編纂法は三千五百乃至四千字を限り、單語の配布と文の構造とに特別の注意を用ふ可きこと。

三、漢文の教授法は言語と文字とに第一、重きを置きて立案す可きこと。これには言語學、音聲學及び教育學等を交へ應用すべきこと。

四、毎週の漢文教授は從來の二時間の上に能ふ可くは更に一時間を増し三時間となす可きこと。尤も教授法次第では之は必ずしも必要ではない。

かやうに總べて目下の中等教育に於ける國漢文殊に漢文には大いにその教授の法に於いて又其の教科書の編纂に於いて改良を要すべき點が少なくない。尙これに聯關したことは作文の教授である。今日生徒の作文の力は教師が一々筆を加へた添削の效力よりも普通學校以外の諸雜誌などに依つて養成せられつゝあると云ふ奇な現象が生じて居る。これ等に依つて考ふると益々その教授法を攷究する必要があると思ふ。

教授法改良の問題はとかく空論に歸することが多く、殊に教員の天性教授に巧者なるものに在りて



は一定の方法で當局者より束縛する必要もないかも知れぬが、併し一般の教授の任に當られる者に向つては大體なりとも効果の多いやうな教授法の案を示しておかなくてはならぬ。

このことは漸く當局大臣の諮問に上ることは上つたことはあるけれども、併し一般當事者並びに世間では未だあまり問題として、研究せられないやうである。自分は之を現時の教育上最も大なる問題の一とする價值があると信ずるにより、文字の研究の應用方面として茲に序ながら教授法攷究の急務なることについて一言した次第である。

## 第十七章 ローマ字の研究すべき點

今日はローマ字、漢字兩主張の反目す可き時でなく、共に感情を去つて互に研究し、互に補佐して行く可き時である。ローマ字の主張者が漢字を研究するも、又漢字の主張者がローマ字を研究するも、文字の立脚地からすれば毫も非難せらる可きものでない。

嘗て上田博士との閑話中にこんな話があつた。「ついこの間、或ローマ字論の人が僕に云ふに、後藤と云ふ文學士が近來頻りに漢字の新研究を發表する。あんなに發表して呉ては困る。と、そこで、あれは吾れわれの方であの側の研究を獎勵して居るんだがね。」と云つたらべろりそれきり黙つてしまつた」

自分は今、漢字漢音の研究準備をして居る。従つて勿論此の側の主張とその試みとの發表とをして居る。けれども又由來ローマ字に就いても淺からぬ同情と自分一個の見解を有して居るつもりである。國字としてのローマ字の實現が不都合であるとか、ないとか云ふ假定的の Speculative のことは茲に問題とするのでない。唯今日の現状と事實とを基礎にしたまじめなる考察を試みて、茲にローマ字研究者の高説に蛇足を添へようと思ふのである。

一利一害の水掛論又は我田引水の僻論は何の議論にもありがちのことであるが、その轍を覆むことは吾人の潔としない所である。虚心淡懷、目下のローマ字の状態を観するに二大研究點が自分の眼に映ずる。觀やうでは一つの焦點に一致せしむることも出来る。一は漢語形式の日本語を強ひてやまと言葉に軟化しようとする弊害の點。二は莊嚴又は簡潔に感ぜらるゝ言ひ方、文體の發達を妨ぐる傾向のある點。これはよく噛み別けて更らにこまかく述べなければ、誤解される恐れがある。

### 一 漢語を軟化しようとするの點

ローマ字が表音を第一の性質とするからには言語に同音語の多きを嫌ふは當然のこと。此の弱點を識つてローマ字攻撃をなすは、これ無論、無理な話である。漢字の方にも慥に之に劣らぬ弱點があり、茲に水掛論が生ずる。漢字が上下五千年の間にその字形の變化を以つて言語の不足を常に補つて居る



やうに、ローマ字に在つては昔の變種、結合の如何を以つて其の形の不足を補はんとして居る。實に然かある可きことである。併し熟々考ふるに文字なる漢字の發達は往々にして言語の發達をさまたげる。殊に文章語に於いて美術的の文字の選擇が言葉のそれに優ること多きを見ても證明がつく。漢字異形の増繁の上より云へば同音の文字がいくら増加しようとも漢字そのものの興り知るところでなく、全く字形萬能主義と云つても過言であるまい。單に一箇の文字に就いて之を見るばかりでなく、二字乃至三字連續の場合とても、同様の主義がある。滔々たる漢語は名は言語なるも實は皆その字形萬能主義で支配せられて居る。支那の人名、地名などに至つては殊に然りである。耳慣れた名稱の外は殆んど皆その字形の教示なくしては耳にきくとれない。況して北京讀みと來た日には普通の名稱でも全く聞きとれない事になる。

かくも形本位で主に發達し來たつた漢語をば表音一點張りのローマ字に寫さうとするにはそこに一大困難が生ずる。然し普通にローマ字に寫されんとする漢語は先づ普通に見る漢語又は漢語形式になれること葉であつて、古來引き續き用ひられて居る漢語、又は新生の漢語形式が主である。然るに言語にはすべてそれに伴ふ言語感覺 (Sprachgefühl) なるものがある。これは容易に變ぜんとしても變じ得ないものである。歴史的の因襲と云はうか、此の traditional の感じは抜く可からざるものである。漢語が如何にローマ字にのぼす上に不都合が多いと云つても、かゝる些些たる理由の下にその言語感

覺の違ふ語に代へらるゝことはできない。絶対に不可能のことでないにしても、甚だ困難なことである。例へば『困難』と云ふ語をやめて『むづかしい』と軟化し『腐敗』をやめて『くさる』と代へたとて、もとの『困難』『腐敗』なる語の存在、及びその語に屬するまかつめらしい一種の感情は到底軟化語の埋め合し得るところでない。『國家』と『くに』に就いても同様の事が云はれる。若し『立食の宴』をやまと言葉に軟化しようとする時には如何がなす可きか。求むるに従つて漢語對やまと言葉の語は容易に搜し得可く、又製作し得べきのその數量や、全體の漢語の約二割以上には出て居ない。自分私かに思ふ、今の英語に於てアングロサクソン本來の軟語以外にラティンの外來語を含めることの非常に多きは、東洋の我が帝國語の内狀によく似たることを。英國に於いても、わが國に於いても、今や外來語の、自國語のと云ふ區別はなく、すべてそれ／＼國語となつて居るのである。唯一々の語に對する感覺が少々／＼異つて居るに過ぎぬ。よく例に出る語であるが、『今日は』と云へば、挨拶になるが、『けふは』では挨拶の語をなさないと云ふ今日である。既に用ひる役目、場合までがかやうにきまつて居るのを、近來の獨逸の獨逸語復活流にすべて復活せしめようとするのは日本では困難である。忌憚なく云へば已往百般の場合に就いて考へて見てもこは殆んど不可能の事のやうに感ぜられる。

かう申すれば、ローマ字を非難したやうに誤解せられるかも知れぬが、さうでない。ローマ字論者



が兎かく強ひて今日の漢語をやまと語化せんとする事が自分には腑に落ちないことの次第を述べたまでである。然らばどうするか。と云ふに、ローマ字はローマ字を立脚地として字面上の研究を凝らすればよろしい。又それがローマ字論の最も重要な地盤になるのである。文字に對する見解をやゝもすると一步を脱して言語上の議論に轉ぜしめる弊がある。言語は言語。文字は文字で、その間混す可からざる區別がある。それ故漢語をローマ字に寫すにも漢語は漢語としてその音のまゝを寫す。これがローマ字の特色の最も美しく正直に現はれるところである。

又ローマ字反對者は同音語の混同を以つて常にローマ字難の主點とす。然し自分は思ふ。言語の價値は單語の斷片に存するのではなく、寧ろ意味の完了せる Sentence に在ること諸學者の説の通りである。同音語のことを云へば漢語に限らず英語、佛蘭西語、日本語何れにも随分たくさんある。割合に支那にそれが多いと云ふ以上に何とも云へないのである。けれども素と單語に同音語が如何に多からうとも、普通の文脈の上、Sentence の上で、無暗な混同は起るものでない。故意の文でない以上、普通は前後の意味から判斷が出来る。混同の場合は極めて稀である。極めて稀なことを常にある如く之をかつぎ出してローマ字難を試み、それを受けて又急所を突かれたやうに感じ、相の手を出す。共にこれ等は單語を過重視して Sentence におろそかなりし弊だと思ふ。ローマ字は飽くまでローマ字本位で進む可きである。その寫す語が漢語であるか否かに係はる必要はない。漢語の場合に不満足に

感ずる丈それ丈又泰西歐羅巴語の場合には大いにローマ字は特色を發揮して順風に帆かけ得るわけである。ローマ字難は此の西洋語取り入れの場合のことを箇條のうちに數へない傾がある。が、今日の時勢は漢語の方面と同時に又洋語の輸入をも必要とする。漢學者の漢字に執し、洋學者のローマ字を鼓吹するも、何れ劣らぬ相當の理由の存することは十分に認められるが尙ローマ字の長所を認めることも必要である。

然し自分の考ふるところでは、唯さへ今日の帝國語は不足を感じがちであれば、通俗社會、實業、軍事、法律、哲學、文學、科學、醫學各種の方面に今日はそれ／＼非常な單語を増加しなければならぬ氣運になつて來て居るのである。折角長き歴史を有して發達しつゝある三萬有餘（帝國總語約八萬五千）の漢語をやめてやまと語に復舊せしむることは殆んど出來ないことである。否、國語發展上唯やまと言葉のみにてしまふことは甚だ不利とするところである。今日の狀態よりすれば漢語は未だ社會から棄てられて居ないで却て歡迎せられて居るかとも思はれる程である。

漢語で不足の語を補つて行くと同時に在來のやまと言葉で増加すること。これも固より忘れてはならぬ點である。今後益やまと言葉も發展させなければならぬ。然し一般の世俗が「みせ」と云よりも『商店』の語を好み、「問屋」と云ふよりも『商會』と云ふを好む風潮なれば教育の普及、進歩につれて益漢語が勢力を得るに至りはしないか。かゝる感情を養成する今日の教育が抑もいゝのか、わるい



のか、それは別問題として、ともかく今日の社會事實は以上の通りである。日本語の單語の發展は國語漢語の區別なく、和漢混合のものも生ずべく「歌ガルト」式の和洋語、「空氣ランプ」式の漢洋語も認められて居るからには、なにかにの好惡の念があつてはよろしくない。その判断は長き年月のうちに社會全般が淘汰してきめて行く。ローマ字採用者はその言葉通りをローマ字で寫せば、事足りるわけである。要は日本は言葉の國である。實際の言葉通りにその言語感覺を最もよく寫せば、事これで足りるのである。折角普通に通ずる漢語をば強ひてやまと言葉に軟化するの必要はあるまいと考へる。

## 二 莊嚴、簡潔な語の發達を妨ぐる弊

支那人の漢語に對する感覺は別として、苟も日本人の、教育を授かつた頭には漢語はやまと言葉よりも莊嚴に又簡潔に感ぜられて居る。儀式ばつた場合には、祝詞、宣命流の古雅なやまと式の文語もないではないが、多くは普通皆大いに漢語を散り鉗めて居る。非常な苦心で漢語が使つてある。威のある文章、法規、命令文、布告、一としてこれあらざるはなしである。然るに此れはローマ字の方では少なからず主義違反に感ぜられて居る。尤もこれ等は多く漢文直譯流の文語で漢文の訓讀と殆んど擇ぶところはない。故にこは最も極端なもの例である。若し愛を中心とせる如き文章ならば體も軟かに、英語のグワイブル式でよろしからう。けれども威ある文章としては日本ではどうしても漢語を多

く用ひ、漢文訓讀流の文體となすことになつて居る。これは歴史的にさうきまつて居る故に今更ら何とも致方がない。

扱ローマ字が一般通用文字として相當の價値の世間から認めらるゝに至る爲めには、莊嚴なる文章でも、日常の達意の文でも何でもかでも寫し得るところに達しなければならぬ。漢語を全く避けて、それで各種の文章が寫され得る見込みが十分あるならば、その方面の研究に向つて進むもよろしからう。然し若しなるとするならば、國語のみをローマ字に寫すことの外、漢語をもローマ字に寫す上の手段について別に何か妙案を攷究しなければならぬ。それとも在來の表音一點張りの特色で漢語をその音通りどしどし寫して行くことにするか。どうするか。

若し不幸にしてローマ字が絶対に漢語を寫すに不適當で、所詮漢語抜ききの文をのみ常に寫すことを能事とし、果ては、おとぎ話のカチカチ山、桃太郎程度のなだらかな文體に執し留らんか。いろは四十八文字と餘り逕庭のない事になり子母音の區別も唯僅かに個人的、方言的の訛音を寫したり外來語の音を寫したりする上に、假名よりも幾分か科學的だと云ふ位のこと過ぎぬことになる。

思ふに漢字がその字形の上から一種の莊嚴の感情を吾人に與ふること。これは到底ローマ字が及ぶ能はざる點である。英語の Right, Beauty などの文字も固より吾人にその感覺を起さしめては居る。けれどもそれは字面からではなくして、寧ろその文字の示す言葉から起さしめてをるのである。漢字



は字面から直ちに訴へて来る。兩者 Visual Stability は同じかるべき筈であつて而かもその強さに於いてローマ字は漢字に及ぶとは思はれない。それ故漢字交り文などは謂はば文字言葉半々主義で、ローマ字文は寧ろたゞ言葉主義のみである。即ち前者は唯、だまつて見て居ても直ぐ意がわかるが、後者は慣れた人は格別、普通は一々読んで見なければわからぬ。言語本位の文字は常にかやうに一旦言語感覚に訴へなくてはならぬのである。

簡潔の點より云へば勿論支那語の特質上漢語程まとまつたものはない。字形の上で複雑を極めて居るだけ、それだけ、言葉としては出来るだけ簡潔に現はれて居る。プラス、マイナスの計算をすればローマ字自身の性質とあまり差はあるまい。書く上の手数から云ふも漢字の畫はローマ字綴音の *Syllables* と甚しい差はない。然るに讀む時になると漢字とローマ字とは非常の差が生ずる。慣ればよろしいとは云ふもののローマ字では漢字程に簡短に行けない。ローマ字は言語本位であるから字形本位の漢字とはどうしても合はない。

然し言語本位の文字——ローマ字——は莊嚴、簡潔の表彰が出来ないかと云ふに決してさうとは斷言出来ない。要は程度問題なれどローマ字はローマ字の特色とする所を以つて、普通の漢字交り文に現はされ得る文語はそのまゝ、表音的に寫し、簡明な文章も莊嚴な文章も出来る限り試みて見る可きである。小學兒童にわかる程度の文章のみがローマ字の能事であるのでは無論ない。若しかりにロー

マ字がどうしても漢語の音を寫す以上のことには少しも應用の出来ないものであるならばローマ字の前途、その行はるゝ範圍は頗る限られたものとならざるを得ない。小學のもの、中學のもの、大學のもの、社會全般のものすべてに適用される見込が立つて始めて、その効力は一般に認めらるゝに到るものである。一部の學者一部の社會に如何なる賛否があらうともローマ字の運命はそれに支配せられるものではない。社會一般の認むると認めざるとに依つて始めてきまるのである。

翻つて漢字音とローマ字との關係上より考ふるに、簡單明瞭な漢語を如何に巧みにローマ字が寫し得る時代が到来しようともその程度は漢字交り文が達し得る如きかゝる嵩高（語弊あらんも）の域に達することはローマ字では殆んど不可能である。字形の妙味より生ずる一種の感覺は到底ローマ字の及ぶところでないから、之を一々言語の方で補ふことも極めて困難なことと思ふ。さればローマ字の達し得る文語の範圍は讀者が紙面に向ふことなくして而かもよくその意を耳で聞きとり得る程度のものでなくてはならぬ。その邊が漢字の領分とローマ字の領分との境界になるのである。文語をローマ字化して世界的にしようとする時にもその「聞き取り得る程度」が常に標準になることと思ふ。ローマ字はその境界以下に在つて之を世界的に廣くせんことにつとめ、漢字はそれ以上にあつて東洋の天地に益その精華の美を極むることになるのである。若しそれ支那の地名人名などに至つてはローマ字以上に超然として、別に常に漢字採用の必要がある。支那の學問、漢字、漢音の學の必要は益茲に生



するのである。

要するにローマ字を以つて詔勅、法規、布告等の文章を寫しとすることはカチカチ山流の文體の場合と同様に、その言葉のまゝを寫すのである。唯然しローマ字はその適用の程度が漢字の範圍以上に脱すること能はず。常にその低い程度に於いて漢語、和語、洋語の區別なく能ふかぎり各種の語の表彰法をはかる可きである。簡明にして久しく用ひ慣らされたる漢語を全く避けるとか、或は亡ぼしたりして迄やまと言葉に傾かんとするは日本語萬年の爲めに吾人の取らざるところである。

### 餘論

人名地名等のすべて漢字音よりなれる固有名詞は之をローマ字に寫すと次のやうな不都合が起る。總べて漢字音の固有名詞には言葉としての音と意義との兩者がある外に尙一つ忘れてはならぬことは字形の有ることである。支那の天子の名にしても『惠帝』と『景帝』の如く、その字形を示さなくては其の皇帝の決定が出来ない場合がある。日本でも普通の人名に『伊東』『伊藤』『柳井』『箭内』『喜久男』『菊雄』の區別が存して居る。之を唯のローマ字にするとその言語本位の爲めに、音と意味は判ぜられても字形の點が全く没却せられることになる。漢字の這入つた爲めかゝる字形の厄介が起つたのだと云つてしまへば歴史を無視した話だからそれきりであるが、少くとも地味な考から歴史を認め

て主張する時には日本人には矢張り形、音、義の三者を兼ねた漢字が即ち姓名を表彰するものとして然る可きことと思ふ。西人に知らしむる爲め又は手びかへなどして後藤を Goto とすることはあつても、これは唯の方便で符牒の符牒たるに過ぎぬ。西人にしても Goto を以つて眞の日本人の姓名を寫したものは思はない。心あるものは必ずや、お國の文字でどう書きます、と突き留める。Togo は加奈陀の新停車場の名で、『東郷』は我が日本の東郷侯元帥である。徒らにローマ字が世界的だからと云つて固有名詞までをローマ字化して、眞の表彰の如く考ふるは如何と思ふ。試みに今、西人の作れるローマ字化された中華民國の地圖を見るべし。西洋人は之によつて僅かに手掛りを得可きも、これを以つて、本來ローマ字地名の歐米の地圖と同一視される價值のあるかないかは敢へて茲に贅言を費やす迄もないことである。

文語がローマ字化せられると或る程度以上は有効的に寫されざるが如く、人名、地名なども之をローマ字に強ひて寫さんとするには語の音が示される丈でその字形の要素は全く放棄せられなければならぬことになる。これローマ字化した名稱と漢字本來の名稱との明らかにわかれるところである。

漢字研究の立ち場からローマ字に就いて觀察せらるゝ點は大略以上の如きものである。吾人は之を端緒として反對にローマ字研究の立ち場より漢字に就いて陸目八目の觀察が出で、互に他山の石でこれを磨くのを擧げんことを希望するのである。



## 附 ローマ字發展論

## RÔMAJI TO KANJION.

Rômajî wo kokuji ni sai'yô suru ni daiichino shôgai wa Kanji no on kara dekite oru kotoba de aru.

Genkon waga kuni de mochiite oru kotoba wa yaku 8-man aru, sono uchi 3-man bakari wa Kanji no on kara naritatte oru. Kono 3-man no Kango chû, kokugo to onaji imi wo motte oru mono wa ôkumo 3-wari wo idenai, nokori 2-man amari no Kango wo ikani subeki ka ga mondai de aru.

Aru Rômajî-ronsha wa zettaini kanjion no kotoba wo haiseki shô to shi, mata aru ronsha wa Kanji no kotoba ni naoshite tsukau beki de aru to shuchô suru.

Zensha wa tôtei shôrai okonawaru beki koto de naku, mata Rômajî wo hatten sasu ue ni oite mo, kaette samatage to naru osore ga aru. Mata kôsha wa koregatame sekkaku hattenshikakatte oru Nippongo wo konran sasuru yôni naru.

Jibun wa Nippongo wo hôfu ni suru tame, zairai no Kanjion no kotoba demo nandemo naru. beku sai'yô suru koto wo shuchô suru no de aru.

Zairai no kanjion no kotoba niwa sorezore rekishitekini hanasu koto no dekinai imi wo motte oru mono mo ari, kanjion de aru tameni sono kotoba no imi ga seikaku de aru mono mo ari, mata tate sono kotoba nomi dewa imi no aimaina mono ga aru to shitemo, zengo no kotoba kara sono imi ga hanzento wakaru mono mo aru.

Tsumari sudeni Nippon no kotoba de rippiani shiyôserarete oru Kango wa kore wo sonomama Rômajî ni sai'yô shite sashitsukae nai hazu de aru. Sanakidani fujûbun naru Nippongo kara, kotogotoku Kango wo nozoku toki niwa konoue hijônaru futsugô to fusoku to wo kanzuru ni itaru de arô.

Kanjion no kotoba to itemo, kore wo jikei sonomono no arawasu imi de kaishaku suru hitsuyô wa arumai, mimi de kita sono kotoba no on ni yottemo, sono imi wa jûbun wakaruru node aru. Kyôiku no fujûbun na mono demo, Kanji sono mono no imi wa sukoshimo shiranai de shikamo seikakuni Kango wo tsukatte oru. Tsumari gwaikokugo wo mattaku Nipponkwa shita mono to sureba, kanjion no kotoba demo sono mama tsukatte shikarubeki mono to omou.



Yôsuri ni koremade no Kango wa kamawazu Rômaji ni saiyô shinakereba naran. Rômaji-hantaisha wa tokaku Rômaji no jakuten wo tsuki, Rômaji-ronsha wa kyûshite imasara Yamato-kotoba no fukkyû wo unun suru. Kotogotoku fukkyû ga dekireba kekkô da ga, rippani yatte shimawan uchi wa nantomo iyen. Ikani sekaitekino monji to ittemo, konotameni genzaino Nippongo wo fusoku narashimuru yôdewa honnatsu tentô no koto ni naru. Dôshitemo Rômaji to Kango wa yûgôsuru toki ga konakereba naran node aru.

## 第十八章 書の研究と談書

書に對する觀察方面は云ふまでもなく三つある。實用の方面。鑑賞の方面及び研究の方面が即ちそれである。西洋流のローマ字は主として第一の實用方面にのみ觀察せられ、日本、朝鮮、支那、安南の東洋流の漢字は實用、鑑賞、研究の三方面の觀察を必要とする。

新日本の勃興と日露戦勝の結果とは近時東洋の特色、日本獨特のものに頼みに價値を添へ來つて、大いに自尊主義の喧傳せられるものが少なくない。書道鼓吹の聲も此の時代思潮の一反響である。最近の學校教育がすべてペンや鉛筆のみで文字を書きとらせ、ペンがきの書牘などが横行するに至つた

今日、書道の鼓吹は時宜を得たものである。然しペンの行はれ、鉛筆の重寶視せられるは、實用上毛筆に優ることの著しい故である。必しも舶來也との故を以つて一概に斥く可きものではない。ペン書きの筆記、書牘の前途は益榮ゆるとも衰ふることはあるまい。けれども此の傾向は引いて書道の上には恐る可き影響を來たすこととなる。

固より書道の鼓吹は別に觀るところがあり、人品の静養。氣韻の翫味などの一方が大いに注意せられて居る。適切な語で言へば所謂書道とは貴族的の方面にとゞまつて、平民的、前垂掛流の方面には觀察がにぶれて居る。國家の勃興は全國民の勃興に在るが如く、一國の書道、一國の健全なる書の精神は平民的の方面に存しなければならぬ。とにかく實用の方面が第一である。書を談ずるものは國家全體の上から此の點を出立點としなければならぬと思ふ。

學校生活を送り來たれる吾れわれは自然の境遇上やゝもすれば毛筆をとらずして、ペンを取る。ペンの方が手數がかゝらないで早く書ける。時として毛筆よりも美しう書けることもある。尤も自分は所謂書の筆蹟拙なるを自白して置く。ペンは横書きでなく縦に右から書くことも無論出来る。滔々たる學生の所謂筆蹟が近時非常に拙になつたのも、字に頓着せぬ罪もあれど、こゝらが大なる原因だらうと思ふ。單に實用の點のみから云ふ時は、何で書くも妨げなしとの論も出る位である。無理もない。書道の論者之を見て如何に觀するや。言葉の研究に口語上の研究がある如く書の研究もまた現代



の卑俗なる方面を明かにしなければいけない。研究上の活材料は却つて多く此の燈臺の脚もとにあるのではないか。

第二の鑑賞の方面。これは多く主観的の評價によりて上下その位置を異にするものなることは無論だが、今日書を談じ、書論を戦はすもの。皆多くはこれにある。秦東書道や、東方書道の會場などに見えた一方の論にも亦この點が多かつたやうである。氣韻はすべて言ひがたし。書の氣韻も亦説明し得ず。眼が利き頭が肥ゆれば、自ら判断がつくなどと云つてしまひ、また、美術などには美學上の新見解からともかく科學的の公評が出来るが、書にはかゝることは出来ぬ。故に書は美術に非ずとの奇説が出で、この奇説が又世に歡迎せられて居る今日である。書は勿論、尋常一樣の手先のわざや藝術的のものでないから、見かたでは如何やうにも神聖視し得るも、然し之に科學的の見解の立たないものもときめ込んでしまふのは、未だ時代が早過ぎる。單なる賞翫者の言としては妥當なるも研究者の言としては速斷の嫌ひがある。吾人は此の點に於いて中村不折翁と多少見解を異にするのである。

書の賞翫のうちには固より歴史的の考へ、一種の美術上の考へ、(西人の云ふ美術の定義より云ふに非ず)天下稀有自家珍藏の誇り、その他種々の聯想思ひ出によつて之を愛するのである。世の所謂道樂としては之に優る高潔なる道樂はない。支那では北平を除き地方の民間珍藏者は多く之を秘して、ひたすら官憲の名により事に托して沒收せらるゝを恐れ、容易に同國人間に公けにしない風がある。本

邦には幸に此の弊なしと雖も、愛翫の風を固執し名品多く權門に集注せらるゝことの外に未だ何等の發達あるを見ないかのやうである。愛翫の風必ずしも難す可きに非ず。愛翫の精神は聽ては材料輯集の動機となり、後日研究時代の曙光たる點に於いて是非通過せざる可からざる段階である。然し、書は唯愛翫することのみを以つて能事了れりとす可きではない。固より愛翫と研究とはその精神が全く別であれば、愛翫を事とせるものに研究を強ひるとは愚なりとの評もあらう。けれども國家書道の大綱より推して考ふるに盲目的愛翫以外に否、むしろそれ以上に研究的の態度に進むは極めて必要なことと思ふ。書は美術に非ずとか。理屈の評を措いて、唯無言のうちに無上の風韻を感ずるに至るやうにせろと云はるれば、それまでとある。亦何をか云はんやである。然し今日は談書の會合、席上和漢の書畫を賞するの機頗る多く、又書道一流の大家以下同趣味の詩人墨客會するもの頗る多きを數ふるの氣運に向つて居る。此の時に際し着實に而かも研究的に手蹟、拓本の原物に就いて書そのものの研究の道の開かるゝに至らんか。愛翫以上に書道研究の眞髓は益發揮せられ立派なる談書の會ともなるに至るであらうと思ふのである。

第三の研究の方面。書は美術であるないの論は別としても書道の研究となると、やはり一般の文藝に作家と、評論家の分業があるやうに、勢ひ中心が二つに分れることと思ふ。然し又兩方の出来ないものは固より書道研究の資格はない筈である。文藝の大家、又歴史の大家にその人が大人物でない



きはその作その評が下落して感ぜられるが、殊に高潔を尊び風韻を重んずる書道に在つては人品が骨子となる。書そのものより云へば無關係なる可き筈なるも、事實それが筆蹟そのものに現れる。これ書の研究の最も困難で且つ最も傍證的調査の多く要るわけである。

然し科學的研究よりすれば或る程度まではその氣韻の研究も形に關聯して觀察が出来ると思ふ。それなくしては書の研究は絶対に出來ざるやと云ふに決して然らず。それを出來ずと論ずるものは所謂貴族的の書道論者である。吾人は唯それあるなしに拘らず、兎も角も舊來の書道を中心に骨子となし、之に新學問の多くを綜合して一つの『書學』の一學問が東洋の天地に成立し得るの自信を有する。又成立せざるを得ないのである。唯それが今日の多くの洋學の如くむやみに解剖的ばかりに進んではいけないと思ふ。解剖綜合兩方から互に補つて觀察し、心理學上、及教育上の方面に應用して之を學校教育に資し、引いては社會國民一般に推すことも出来ると思ふ。今の習字法は昔の寺小屋式の手習ひ以上に進歩せること幾何ぞや。他の學に壓せられて却つて今は退歩しては居ないか。書道の科學的方面からしては大いに攷究を要す可き點である。その他古文、篆、隸、楷、行、艸の特色を書としての側から運筆懸腕のことに關聯して研究すること。こは中々の大事業である。又一世一國を風靡した人々の筆蹟の比較研究、支那人の書と日本人の書の比較、これ亦種々の事實の發見があるに相違ない。人種學上でも相似た、やまと民族（實は複雑なれども）と漢民族のうちに争はれぬ區別の點の嚴然と

存して居るが如く書の上にも亦それ位の區別點の闡明が出來はせぬか。こは興味のある問題である。

尙歴史的の時代にわたつての研究。科學的研究の上に此の歴史的觀察を試みるは書道研究中最も重要な點である。談書の楽しみも實は此の點に多く存する。今日の談書は銘々の經驗上から直覺的に鑑定せるのみで、何が故にと云ふことの理由、次第は殆んど他人に傳へられなかつた。書の妙味はそこに在るのでもあらうが、吾人はそれで満足が出來ない。少なくとも健全なる理由の下にその次第が順序正しく開陳せらるゝ迄にでも談書のみちは發達せねばならぬ。而してそこ迄進歩した見込みの十分立たないことはあるまいと考へる。書學としての歴史的の研究は今日は比較的樹て易い方面だと思ふ。これには單に書そのものの史的沿革と多少學術的の書學としての史的沿革とがある。主たる方は固より書そのものの沿革で書體の變遷、各時代の書體の特色、風潮、南北兩地方の書派の上の研究、地理と書體、時代と書體、これ等は孰れも面白い題目としてそれぞれ研究の出來るものであると信ずる。唯散漫なる觀察を避けて、秩序的、歸納的、又演繹的の一學問にまとめて行ことが今日の急務であつて、要は書の史的體系を作るに在るのである。

ところが此の研究に於いてその根本資料となるものは云ふまでもなく古人の眞の筆蹟である。止むなくば碑文又はその摺物だが、碑文以下のものを科學的の資料とするは頗る危険である。之に眞の肉筆の趣の見えるものは殆んど見ない。況して磨滅しつゝあるものに至つては碑に限らず、法帖の類で



も中々あやしい。然し多くの材料は集むれば集むる程事實に近い概括的の眞理の歸納せられることは疑はれぬ。故に眞筆のなき場合は蒐集を事としてその比較を試みるに限る。然るにこの研究に困難を感ずるは偽物と眞物との鑑定である。傍證的立證である。これは至難の事業であらうと思ふ。然し今日は尙幸にして、先秦文字の開拓者、六朝書風のオーソリティーと仰がれつゝある人々その他斯道の尊者少からず。唯繩張りの見解を去つて書學、書道そのものの爲めに科學的研究の起らんことを希望してやまないのである。

附

書の科學的並に歴史的研究に伴つて起る可きは筆紙墨の研究である。又昔しの彫刻用の刀類の研究である。然しこの側の研究は世界諸地方で諸人種が用ふる劃字用、繪畫用の器具について豫め研究して置かなくてはならぬ。つまり書の研究にしても用具の研究にしても單にその目的のものばかりの基礎の上に積み上げる研究では駄目である。成る丈け地盤は始めから大仕掛けにしてかゝらなければ、健全なる書學の確立は覺束ない。吾人の一代で學の完成を期する如きは學者の本領でない。最近の氣運につれて、書の研究と談書について聊か日頃の自分の希望を茲に述べた次第である。

學校用習字手本の編纂法に就いても書法研究の旁大いに熟考改良す可き點があることであらうと思ふ。然しこれは問題外のことになるから茲には暫く論じないで置く。

## 第十九章 文部省と標準字典

英、獨、佛の如き又、米國の如き民間出版業の旺盛なる國は別として、目下我が國では民間で收支の償はぬやうな大編纂、大出版物を出すに云ふことは、云ふ可くして行はれ難いことである。其の理由は多々あるも、第一出版業者に經濟上の餘裕と雅量がなくして、一も二もなく、算盤珠のみから打算する状態であると云ふこと、これが主なる原因である。さらばとて之る助くる大投資家もありさうで其の實はない。故に從來の事實の示せる如く、僅かの限られたページに、切り詰めた經費でその上大急ぎで編纂に従事すると云ふ始末であるから、完全な大規模のもの出来よう筈はない。假令始め一部は出来ても先きが案じられると云ふ有様である。

標準漢和字典の内容の範圍組織などは固より之が任にあたるもの見識と實際社會の要求とによつてきまるべきものなるが、其れより先決問題となるものは、云ふ迄もなく『人』と『金』と『時』とである。民間にありては常に此の三者を都合よく兼有することのむづかしさに、常に折角の大計畫も水泡に歸する始末であつた。現に社會は今日尙未だ一つのしつかりした標準字典のないのを甚だ不都合として居る。見よや日本は戰爭毎に非常なる發展をなし、その發展に伴ふ漢語と漢字の發展は又こ



れ古今未曾有の勢である。「滿燈飾」「電飾」「提供」「自動車」「停電」「觀光團」「滿洲事變」「國技館」「告別式」などの新語は日に月に作られて之を寫すには必ず又漢字が専ら用ひられて居る。假名やローマ字で書くに適したやうな風の新語は事實に於いて甚だ少くして世態は獨り簡明の美を尙び、漢字本位でどしどし進んで行きつゝある。

吾人は茲に強ひて漢字説を主張するのではないが、現社會に於いて如何なる範圍まで、又如何なる種類に於いて漢字が發展しつゝあるやを窺ふに足るべき、浩瀚な字典の未だ存せざるを怪しむのである。見よや、今日通俗に流布せる漢語漢字の誤謬は更にその誤謬の度を高めつゝあるではないか。

單に音の側に就ても、嘗て某侯が或る席上の演説でボクキョ（枚舉）に違あらずと云ふ怪我の誤りをせられたので、一時新聞にも出たことがあつたが、かゝることは敢へて珍らしくない人の心をスンド（付度）するだの、カクラク（嬰鏢）たる老翁だの、クッタン（費端）を啓くだのと随分振つた新熟語が製作せられつゝある世の中である。吾人はこれ等の誤を耳にする度毎に漢字發音法の困難なることの感を深くする。さればとて突飛なローマ字説などを今茲にかつぎ込むことは許されない。右の誤謬には皆それぞれ一應尤もな理由が自ら認められるけれども、教育の上又は字引の上では此れ等の誤は飽く迄も指摘しておかなくてはならぬ。これ等の誤りは多く文字の上の誤りではなくして、言葉としての漢語熟語の上の誤りである。民間に出て居る小字典には一々此れ等悉くを希望することは出

來ない。されば國民の十分に信頼することの出來、又社會がオーソリティとして準據するに足るべき national の國家的一大標準字典の必要なるは論を俟たずして明白なことである。國家としての日本がこれ迄に之を有して居なかつたのは大いなる手落であると思ふ。人は屢康熙字典のことを云ふ。併し康熙字典は支那三百年以前の古い編纂に係れるもの昭和の日本には餘りに小さく、餘りに不完全で而かも一つの字體の沿革なく、字音の科學的説明なく、更に字典として最も必要なる熟語の編入の點に於いても絶対に之が除去してあると云ふ始末である。且つその上、千九百三十四五年型の文明に關係ある新しい字義の含まれて居ないと云ふことは固より云ふ迄もないことである。されば今日、康熙字典などを以つて標準視するなどは未だ決して、日本今後の漢語及び漢字（國字）を整理し、日本の言葉を發展せしむる所ではない。今後の標準たる可き字典は少なくとも其の質に於いて又量に於いて康熙字典以上幾十倍のものとならなければならぬ。今日の日本にそれ位の字典が出来ないようでは情ない次第である。政府は豫算の許す限り、國家の上、社會の上、又教育の上の一大缺陷を補填する目的で、今日之が事業を起すは頗る時宜を得たものと信するのである。

今日昭和の標準字典なきが故、例へば字形の正誤を論ずるに、三省堂の漢和大字典を本として云々するものあり、康熙字典によるものあり、隋唐のものを標準とするものあり、六朝體に據るものあり。近來は漢代のものを本とし又特殊の學者の間では先秦、周代のものをとると云ふ騒ぎである。つ



まり御互水掛論に時を費せり。之によつて來たる社會上竝に教育上の弊害は又實に大で、いつも此の點にぐらぐらして居るところが多いやうである。全國の中等教育に従事せる漢文受持の教師はその數恐らく一千二百を下らざることであらうが、その教授に際してすべて同一の標準をきめて正確なるところを教授せしむることとせんか。その効果はいかがであらう。英語などには流石にスタンダードその他有力なる標準大辭典の設備がある。然るに我が國字、國語とも見るべき漢字、漢語に關しては現代の大字辭典なるもの一つもあることなし。坊間にある漢字典は大抵高がきまつて居る。之を以つて現代文字及び漢語の全體を包含するものとなすは固より謬見である。その活字中に尙廢字の含めるはまだよし。されど、現に實際吾人の日常書きつゝある普通文字例へば圓、錢の字の略體の如き、何れの字書にも未だこれあるを見ず。甚だしい手落ちではないか。

標準大字典にはかゝる類の文字をも加へ、此の他、語に於いては最近に出來た漢語熟語を網羅し、音に於いては種々なる場合の現象を載せ悉すやうにしなくてはならぬ。例へば、硅酸、硅素などの硅の音は坊間の漢和字典では總べてカク（虎伯切）の音として出してあつて、ケイの昭代の音を別に載せて居るものは見當らぬ。これがない位では昭和字典としての資格はない。これは音の場合であるが、かやうに、昭和の言葉のことも考へ中に入れて、音の外、意味、字形のことも、十分に説き盡くさなくてはならぬと信ずる。これ等の計劃をこまかく立つれば、立つる程、内容は益精密になり

完全に近づくも、その年月と經費は益増大して來らざるを得ない。

要するに完全したる科學的の標準字典は國家の體面より云ふも又實際社會の必要及び教育上の要求より云ふも今日なかる可からざるは勿論なるが、此の事業をして十分の實効を擧げ、而かも出版上の利益に目をかけずして社會全般のものに信賴すべきものとなすには政府自ら率先して之が實行に着手しなければならぬと考へるのである。

唯併し此の事業は性質が性質であるから、政府は必ずや社會各階級が陥れる文字上の誤謬によく注意し而かも理に馳せず、俗に流れず、よく文化の進運に伴へる一大字典として世に出さなければならぬ。若し然らずして標準たるべき漢和字典が何時までも着手せられないやうでは、國語及び國字の根本問題は尙いつまでも空論、小田原評議で行く末長く残るのである。最後に一言す。今日世人一般が我が漢字を支那字也とするは非常な謬見である。千有餘年の久しき此の國振りの通用文字を今に國字の一種として見て居ない如きは全く歴史を無視した見解である。假名ばかりが國字ではない。ラテンより來たれる英語が立派な英語として見られて居る如く、所謂漢字も亦立派な日本の國字として見るべきものである。況して言葉として見らる可き日本の漢字音には現に今の支那音と殆んど似たところはないではないか。實用の方面より云つて、吾人は飽くまで漢字が日本字なりてふことの前提の上、文部が此の事業の必要を認められんことを希望する。聊か記して以つて當路者の猛省を促がし旁



讀者の高説を承らんとする次第である。

## 第二十章 新字制定に就いての注意

時代の進運につれて社會が舊來の文字だけで満足せず、更に新たに適當な文字を生み出させる必然的の力を有することは過去三千年の歴史の明らかに證明せるところである。單に文字のみに止らず、更に根本なる言語に於いても同様の現象を見るのである。近くは徳川時代と維新後とを取つて見ても或は又、更に近くは世界戦争以前とそれ以後と取つて比較して見ても所謂俗語（モダン式の）として又は漢語（赤化、煙幕の）として新たに現れて來たつた言葉（word）は幾何なるかを知らず。言語の新陳代謝は實に非常である。文字の方の新陳代謝は言語程に激烈ではない。蓋し新思想の發芽或は輸入に對してその觀念に伴つて先づ第一に生ずるものは常に此れが表彰の言葉である。而してそれに對する符牒に用ひる文字は大抵舊來の文字で工夫をする。爲めに二字乃至は三四字より成る熟語の形式が甚だ多い。併しかやうに在來文字の熟字形式にて満足せる間は未だ新字を見ることはないのである。之に満足せずして簡易の一字に之をまとめ現さんとする程度に至つて、始めて新字を見るのである。こは新字に最も多くあり得る場合であつて、「人力車」が「俵」の一字にせられるのもその一例である。

けれども此の俵の字に人力車 jin riki sha と云ふ四綴より成る音が元來あるのではない。「櫃」をセンチメートルと讀み「漚」を海里と讀むと同じく、一種のきまつた訓讀をなし得る符牒たるに過ぎぬ。近來「電氣」株式などが一字にまとめられんとし、又自分等も「人造石」を人偏に石の字にまとめたる如何と思ふが、然し音綴上の點に於いて一般の漢字と同種のうちに認めることは言語と文字の關係上いかゞであらうかと疑ふのである。

次ぎに云ふ可きは新造文字の便利説である。便利であれば新造文字は必ず社會に行はれるにきまつて居る。が然しこれは一概に然りとは云はれない。勿論社會は全體としての進歩の爲にはあらゆる便利 facility なるものを取りて推移して行く。手紙の上に草書の走りがきが書かれ、日常の筆記に畫の少ないものが用ひられて居るのもその爲である。更に遠く文字の歴史に遡つて沿革を辿つて見ても、字畫は常に簡略の文字に向つて變遷して居る。此の點より云へば文字は簡易なものに限る。煩しさの多い畫は社會の進歩に妨げとなる。一も二もなく、簡便なものでなくてはならぬと云ふことになる。此の潮流は動かすことの出来ない理法である。けれども併し此の便利説なる理法は深き眞理を有するも、此の理法より打算して現行の文字を演釋的に悉く残らず簡便な文字に改めてしまふことは、少しく理想に馳せ過ぎた話だと考へる。論者は云ふ天下の新聞を利用してその活字を改めしむれば、こは掌をひるがへすが如きのみと、新聞雜誌の效果の侮るべからざるは固より明かなるも、現時の社會に



於いてかゝる簡易文字の理想がその活字の上にも容易く實現し得らるゝや否やは一代疑問であると考へる。

けれども文字の簡便説はローマ字論の根本破壊説とは違ひ、わりあひに行はれ易きは言を俟たず。既に歴史の證明せるところによつても少くとも一部分の簡易文字は實現せらる可く、又今後の社會の爲にもしかあるべき必要を認むるものである。併し茲に留意すべきは文字は終始社會全般と生命を同じうするものなることこれなり。これは極めて自明の事なれども世間往々謬見を抱くものあり。文部省と教科書の關係などは格別として、一般から云ふ時は如何に政府の力をかり又は支那流に欽定として畏きあたりの御威をかりるとするも、社會全般の文字は到底之を左右し得べきものに非ず。況んや政治上の一團體や、學者の團體などが如何に斷乎として主張するも末長く社會を之に服従せしめたることは頗る覺束ないことである。文字は既にも云へる如く言葉と同様でその根は深くひろく、社會の根底に擴がつて居るものであれば、文字そのものの行はるゝと行はれざるとは、滔々たる此の全社會にあるのである。此の點に至ると社會は實にえらいものである。されば學者が超然として社會に對し己れの手腕で全社會に行はるゝ文字を新造せんとするなどは甚だ壯なりと雖も、その効果や甚だ少なきものと斷定せざるを得ない。見よや今日一般に用ひられて居る假名の沿革は一朝一夕の淘汰を経た位のものに非ず。又一個の僧侶の手腕などによつて成りしものにも非ず。吾人はかの契丹、西夏の新造

文字が極めて短命なりしに比し日本の假名のかくも長命なるは固より國の興亡如何にもよるべしと雖も、その社會が文字との因縁關係を結ぶことの深き如何に大いによることと信するのである。

此の故に若し強ひて一個人の力或は政府の力などで新文字を造る必要がある場合には既に一般社會に萌芽せる俗字を苗として之を培養し、さも一箇の完全なる樹木なるが如くに資格をつけて公にするより他に道はない。併しこれとても末長く行はれ得るものなるかどうかは一般社會の現象を見た上でなければわからぬ。然しかゝる方法に據りたる者は大抵榮え行はるゝものと見てよろしい。『灣』の字の弓の上を『亦』の字に従はせるなど、略字の制定の時には恰好の參考となる。即ち略字の制定には多少既に世の一般にあるものを採用する。新字畫の制定も之と同じ方法によらなくてはならぬ。學者は云ふ『懼』の字は唯目の字を二つ並べて書くに止むべし。簡易にして且つ古文にも叶へばなりと。此の説一應御尤至極なり。されど現時の社會にかゝる萌芽絶えなきを如何せん。若しこれが應の字の中部の佳を除きて應とし、又雁の字を唯の厂となすと云ふ場合には、これは或は是認せられるかも知れぬ。併し尙これとても以て今日立派な正字として認むることはまた少し早すぎると思ふ。尙行書や草書の略しかたにしてもその一定の畫に決定してしまふことは甚だ考へものであるが、強ひて一定する必要があるとするれば、字の歴史沿革上から正しいものを探ると云ふよりも、現時の社會に、どういふ略體が最も多く普く行はれて居るか。つまり學術上の點よりも俗な點を主にして制定しなければならぬ。併しそ



れにしても政府や一個人の力で定めたものに在つては、たとひ教科書などで一部分位には行はれるとも、廣く一般のものが、その通りに従つて書かねばならぬと云ふ必要を感じるに至るか、どうかは疑問である。況んやその文字の實現を將來の社會全般の上に見るなどは甚だ以つて覺束ないことと信ずる。獨逸の法制史家グリムは云ふ。凡そ一國の法律にして慣習を無視して立てられたるものは法律としての効力なしと。法律ですら、單なる作爲的制定を許さず。その本來社會一般に生命を有する點に於いては法律も言語も文字も異なるところない。故に新造文字は國家社會の進運に必要なものなるも常に社會の最も俗なるものと相俟つてその生命を有すべく、深き歴史的研究や一個人の理想やで制定せらるべきものでないと云ふことは明かなことである。

以上は實行の側、効果の側より觀たる注意である。けれども今日社會の現状は漢字を今の如く亂雜なるまゝに打ちやりおくべきものなるか。これ世の經論家、學者、教育家の別なく、具眼の士の齊しく顧慮せる點である。此の側より觀じ來たる時は効果のみを見る實利主義を離れて、眞面目に此の亂脈を正し、どの位の程度まで系統的に文字の整理が出来るか。支那に對する文字上の比較調査は別としても少なくとも日本内部に於いて、小は教育上の社會に向つて大は全般の社會に向つて、文字問題を攷究しておくことは國語問題と相等しく、極めて必要なことである。そのうちでも、殊に此の新らしい文字、新らしい字畫の制定はローマ字論者の口調をかりて云へば『今後の日本の發展』に至大な

る關係を有することと思ふ。されば今後のことを顧慮して、新造文字を論ずるからには、多少の空想、希望、理想の伴ふは普通のことである。であるからかゝる新造熱は必しも否定するわけにはいかない。唯併し文字の新造は學問の高きにとまつてなすべきものに非ずして、俗社會一般の味方となり、俗字を標準として將來を卜さなくてはならぬ。知らず世人の今日正字とみなせるものも隋唐以前に於いて必ずしも正字として目されて居たものばかりではないのである。故に自分は俗字本位を以つて新字制定をなすこそ却つて今日の社會の進運に伴ふ制定法と信するのである。

要するに新字制定のことは實際問題である。卑近なる社會上の問題である。一般からたやすく認められないやうな新字の制定は、如何に學術上正統な理屈があらうとも全く駄目である。専門家の智識を以つて案出したやうなものは事實世間では中々行はれない。それもその筈である。學者の理想は社會と相容れぬことが多い。原理の研究は必ずしも世と一致しない。されば新文字の制定の如きも一つに世の習慣性に俟つより外にみちはないのであると自分はさう考へる。

## 第二十一章 義務教育上の文字選定

文字の學術的研究の方とは少しく縁が遠くなるが、茲に應用の側の實地研究を述べて置く。而かも



此れは現今の教育上に少なからぬ關係が存して居る。とにかく實地問題は學術問題と違つて色々の水掛論が起り、非難の相手も慥かに多い。けれ共が之はいゝ加減に打ちやつて措く可きものではない。識者は如何に觀察されようとも茲には自分の愚案を提供して、世人の眞面目なる實地の調査の一資料としておくわけである。

### 一 初等教育と文字

文字の修得が教育の殆んど全部を占めて居た時代は昔の寺小屋當時のことである。字さへ多く學んで歸れば寺小屋に通學した目的は達せられて居た。然るに新知識を眼目とする今日の教育では文字は唯の方便の方便となつて來た。言語が第一の方便で文字はその又方便であつて見れば、文字萬能の寺小屋時代とは雲泥の差がある。爲めに字のことなどはどうでもよろしいと極論するものも出る位である。然しそれは茲に別問題で、唯文字が言語の符牒として今日の教育上に用ひらるる以上は教育の目的を害しない限り完全に、文字の知識をも授けて置かなくてはならぬと云ふことを主張したのである。

東洋の國々は西洋と歴史を異にする故、西洋ではなくて濟む文字教授の負擔が別に存して居る。新知識教授の形式は西洋に參考とす可きものがあつても、獨り此の文字の教授法に至つては、東洋獨歩で自ら開拓して行かねばならぬ。單に日本丈でなく、支那でも憲政の準備の一つとして之には昨今腐心して居る様子である。支那はその國柄として漢字をいきなり教へなければならぬが、日本や朝鮮はそれぞれ假名、諺文と云ふ、言葉を寫し易い簡易文字がある爲め、着手が比較的容易である。漢字を知らなくても、思想感情は立派に假名で綴られるので或る支那人は之に驚いて居たと云ふ話がある。然し社會の表面に立つ人々には無論假名丈では駄目である。初等教育に早くも漢字を授くるのもその爲めである。

兩假名を教へ、アラビヤ數字を教へ次いで漢字を授ける。假名には綴り方がありアラビヤ數字には位どりがあつて居る。漢字に至つては、形と音と訓と熟語との四つの場合がある上に、その各の場合が又、多少宛變化して居ることがある。尙漢字にはその書き方に就いて一々教へる必要も生じて來る。爲めに教育上では成る可く簡易な漢字を採つてそれを先きに教へる。かたの如くにその主義で行く。此れ今日の漢字の教授法である。易より難に向つて進めて行く方法は兒童心理の爲めより云つて然る可きことである。けれども漢字の修得は必ずしも、始めに一の字、次に二の字、それから三の字と云ふやうな順序でいつも行かる可きものではない。字形の畫の多少の點のみから打算するから屹度かやうな方法になるのである。漢字の教授を字形だけから打算するのは得策でなからうと思ふ。

愚案では折に觸れ、事柄によつてその思想感情の盛に興つて居る時を利用してその言葉の聯想上か



ら文字を教へるやうに力めること。之が兒童の最も面白く興味を以つて文字を覚える時である。理科博物の教師が折にふれてそのものの性質を話してきかせるやうに、文字に在つてもかやうにして授ける。これには讀本の編纂がそんな鹽梅に先づ出来て居ると尙以つて妙であらう。ホタルの話が書いてある時は『螢』の字を教へる。それに虫の字が兼々教へてもあれば、それと聯想させて覚えさせるやうにする。かやうにすれば字形の難とか易とかは大なる問題とはならないのである。

戦争の當時には『大勝利』とか『號外』とかの言葉が兒童の耳に慣れ『萬歳』の語も到る處に唱へられる。學校に於いて態々鹿爪らしく教はらなくとも、兒童の頭脳にはその言葉がその言語感(Sprachgefühl)と共に染み込んでしまふ。『勝利』が如何なる意味だか知らなくとも『大勝利』と云ふ語の儘で之を十分に知つて来る。『萬歳』の語も亦同様である。かやうに時代が兒童に教へ込む言葉は、ともすれば、中には學校で學ぶ迄もなく、その文字をも覚えて來ることがある。學校の方では『勝』の字がまだ教へてないから未だ『大勝利』の三字を教へるは早すぎるとか、又『歳』の字がまだだから『萬歳』の二字は教へにくいなどと云ふかも知れぬ。然し必しもその心配は要るまい。小學の兒童は豫想外に漢字を知らぬものとは云ふものの又豫想以外におぼろげなりともよく記憶して居るものである。友達に『伊藤』『齋藤』などの姓があると、先生からの教授を待つ迄もなくその漢字を知つて來る。少くとも『藤』の字位はかすかに記憶して居る。『米』の字なども以前の文部省案に漏れてゐたかと思ふが見らる可きものである。

今の小學兒童で『米』の字位を知らぬものは少なからうと思ふ。コメと讀み、ヨネと讀み、ベイと讀み、マイとよむ讀み別けは出來ないにしても兎に角その字形は知つて居る。その他地名の漢字にして、『熊本縣』のものは『熊』の字を學校以外に別してよく知つてゐると云ふやうなものである。自分は疑ふ。今の小學兒童の一般はあまりに國語讀本の容易過ぎて多少之を輕んぜる傾きのありはせぬかと。果して然りとせば、こは先きに兒童腦力を餘りに斟酌して漢字節減を過度にした爲めの一反映とも見らる可きものである。

かく觀察すれば漢字が無暗みに増加せられることを希望せるが如く取られるかも知れないが、自分は必しも増加説を絶対に主張するのではない。出來得る限りは國語讀本の漢字を他の學科のそれと連絡して、殊に習字の時には相引照して、その書き方のことをも注意してやらなければならぬ。習字は習字、讀本は讀本と別視する様では漢字の教授は出來がたいわけである。尙教授する文字を増加するにしても、第一その方法が宜敷を得なければならぬ。折にふれ興味を以つて覚えさす可きことは無論だが、兼々教へたものは一々記憶の底から呼び起こさせて、教へて行くやうにし、又教授者は成る可く漢字上の知識を有して生徒に明確に秩序正しく示してやる方針にしなければならぬ。『國旗』の『旗』を教へた後に『其』の字が出たり、『岩』の字が出たのちに『石』の字が出てもそれは構はない。『騎兵』の『騎』の字を教へた後に『馬』の字、『奇』の字を教へたからとても罪になるわけではない。



兒童が好奇心に富んで、覚えようとする機會の折角到來して居ながら、畫が多い字であるからと云つてやめにくること。これが一番惜しむ可きことである。過度の重荷は勿論無理であらうが、今少しく合理的に、又實用的に普通字と思はるゝものはその機會を逸せず、教授する方針にしたならば如何と思ふ。然し自分は不幸にして小學教員をした經驗がないので實際義務教育の教へ加減がわからない。唯研究的の側のみから立論して主張したに過ぎぬ。

### 二、漢字一千六百五十字案

茲に示した漢字の表第一段及び第二段は今日の新聞雜誌及び教科書類に最も普通なものである。大體、音の分類法で五十音別としたのであるが、上の段は先年文部省から出た表を基として分類選定したものである。下の段は上段の文字で著しく不足を感じるから更に愚案で増補したものである。尤もその増補の分の採りかたは成る可く上段のものと音符の聯絡を保てるものを主にしたのである。されば字音の上では上下相聯關するもの甚だ多く、大抵は第二篇第十六章に詳述してある類推法で行けるから字の増した割りには煩しきは増してゐないと信ずる。尙茲には今日の俗字略字をも加へたいと思つてゐるが、活字上の都合で省くことにした。然し教授の上では例へば臺灣の灣の字の俗字。圓錢等の略字なども一々序でに教へて然る可きことと思ふ。

左に示す漢字の表は、愚案で我が國民義務教育上最も必要と認めらるゝ漢字一千六百五十字を選定したものである。現今日本の中流社會で普通に讀み書きせられて居る漢字の總數は自分の調査ではその正字が約五千字位ある。一千六百五十字の選定は五千字に對して丁度三分の一程に當る。字數は必しも兒童腦力の負擔となるものではない。下手に教授すれば僅か五百字でも大負擔となる。方法の宜しきを得れば千八百字でも、二千字でも構はないかも知れぬ。要は教へ方の如何。教科書の編纂の如何に在るのであるが、自分は先づ左の一千六百五十字位を妥當と考へる。

#### 一千六百五十字表

上段——原案一千百二十字

下段——増補五百三十字

ア……………愛櫻央奥押惡暗安鞍

亞啞阿蛙哀鶯闇

イ……………衣依醫育印

伊

ウ……………羽雨云雲運

宇烏(コノ二字及び云雲運は本來はワ行に屬す)

エ……………延怨

英永宴

オ……………億乙音恩

歐翁

備考 (ア行を見る場合にはヤ行及びワ行を参照せよ)

カ……………加賀可何荷河歌假假價夏佳家我俄芽改界開

牙霞嫁嘉雅介戒解街凱概江更硬稿毫豪



海械皆階屈害好岡降講溝巧考號港糠耕香辛  
交校肴孝高甲合各客額角學革割威鑑甘堪勘  
干幹岸岩顏問寒眼

効狡航香康岬鋼較格確劃覺岳葛汗旱竿  
簡韓漢姦看監雁  
奇崎騎既企鬼祈季汽棄蟻疑戲龜白舉裾  
究經泣凶琴欽均勤

キ……………其期旗基欺寄騎己記起紀忌貴宜規危机喜義  
議儀機器希歸氣僞技久弓宮求球救舊牛魚漁  
去居鋸許境鏡競共供恭狂京恐教驚鄉強胸行  
仰及扱級吸急給局曲玉極菊吉詰金錦禽禁僅  
謹斤近銀巾

苦寓隅貢華怪廻悔塊懷宏鑛括穫完冠管  
館還忠觀緩玩頑群勤

ク……………區句九具愚遇空化花貨靴菓菓課過鍋禍火瓜  
瓦科書灰會快悔外回屈堀掘荒光廣皇君群軍  
訓關官寬勸歡貫慣丸願

系啓刑桂螢契穆携鯁頸協曉劇擊傑驗劍  
謙權懸研喧顯繭憲弦殿幻諺

ケ……………下掛雞計兄惠敬警景慶經輕係頃傾揭形藝迎  
橋挾狹叶業穴缺決決血月潔結見現硯險檢儉兼  
嫌減原源堅賢卷倦券縣犬肩絹件軒遣建健言  
限玄

コ……………古故枯固個湖戶雇午御五吾語互口后工向功  
紅厚後公候國谷黒告刻穀忽骨今根懇魂昏婚

呼虎狐鼓糊壺袴吳誤護虹興薨洪孔告獄  
根懇昆混

ク……………左佐差查坐祭際才再菜細災最催妻載裁歲罪  
在材財葬早草壯像桑掃走相霜箱騒造册昨作  
酢札察殺雜三參鷲杉散産山算傘殘

詐座採彩債齋哉栽砦曹艘想莊裝倉創燥  
操巢象藏柵刷薩贊讚棧竄斬暫

シ……………止齒旨指支枝士仕志此紫史使思子師是施始  
示只矢之四豕姊試至紙漬死市私次資姿賜伺  
慈自寺時耳事辭似兒字社寫者車射謝卸捨著  
書署煮諸朱手取趣處酒守狩受授助鋤主住女  
汝如壽舟周週黍初修臭秋鎌種鐘丈杖尙賞常  
召照招詔從縱將醬松證商上勝承升狀就讓乘  
場獸柔繩娘城唱情收小少消障蒸充生十汁集  
習濕拾祝借勺若雀弱尺宿縮叔熟式識織職植  
色食飾出術質漆失心深尋森神伸身臣信仁新

氏司管覗祠詞嗣嗣詩誌視脂脂鮪鮪社雌屍屍瑤  
斯芝刺柿肆滋殊殊株首戌樹州洲酬終紬娶  
秀衆囚舍奢斜庶所序除徐庄床裳裳債債詳  
獎昌匠稱肖梢沼冗壤釀淨爵酌蝕殖辱辱悉  
七疾實津斟診唇賑晨眞俊純準循執



薪振震又盡任進順巡

ス……………數推誰垂吹衰穗水寸

崇睡遂雖雖醉翠隨

セ……………世姓性西成誠盛正政征青清請靜精勢星濟井

制製逝晴整妾捷攝成脊夕斥絕綴占仙撰

聲稅笑燒傷跡昔籍石責積惜席赤析說設節接

鮮煎宜

切拙雪舌染川先洗船淺錢賤泉戰千線專扇選

全漸然前揃善繕膳

ソ……………祖租組粗爪爭送層僧贈窓總宗東速足促則側

且俎素訴鼠疎蘇奏巢剿勿曾增即塞屬遜

息粟族囑賊俗卒村尊孫存

樽損

タ……………太馱多打他代貸袋退臺忘體替對帶滯第大隊

蛇墮睡待台泰耐態澤濯托拓唐逃討禱黨

題刀到倒堂當稻湯島桃陶盜糖道導宅度濁達

丹旦誕痰談探歎彈斷

奪答但端團

チ……………地池知智恥致置遲治持茶緒著貯注柱長帳張

馳維值儲兆條駐胃誅腸應懲着逐珍朕鎮

町重應徵釣鳥晝弔中沖仲忠蟲勅直竹築畜沈

枕貫

ツ……………圖追通痛

テ……………低底呈程庭丁釘停弟悌帝締貞定堤調朝潮的

廷抵亭偵遞笛蝶影展奠澗

敵適鐵店點天添轉傳田殿電

ト……………土吐塗徒途都怒斗豆頭冬投等桶東動得德毒

兔奴統騰藤督突屯頓吞

特讀豚貪

ナ……………內南難

那乃腦惱楠軟

ニ……………二貳乳入肉日人忍認

ヌ……………

ネ……………熱念年

ノ……………能農

寧

ハ……………波破廢貝敗買賣拜倍配稗背枚梅方放妨防亡

婆派肺輩律乏房訪紡旁妄泡暴貌拍舶莫

望忙忘寶帽包抱飽飽報法白伯泊發八伐髮祓

瀑幕博薄般範汎煩番

跋鉢凡帆犯反板坂飯晚半伴判繁

ヒ……………非悲皮彼被妃費比否飛避未鼻尾美備評坪氷

批疲豹寶

病匹筆必濱

フ……………布付府腐附父斧負婦夫富不悔無武福幅復腹

浮扶馱符仆赴普舞賦部服複